

505
58



始



3-2516

575-58



近松門

高野聖山
黒木勲蔵

狂言全集

校訂

第八卷

表陽堂蔵



はしがき

本巻には第七巻に引續いて、享保二年から享保五年まで、即ち近松の六十五歳から六十八歳迄の作十二篇を収めた。其の中一篇だけは歌舞伎狂言本であるが、他はすべて竹本座上場の淨瑠璃で、中には善光寺御堂供養の如き未翻刻のものも収めてある。

世話物としては山崎與次兵衛壽の門松と博多小女郎浪枕との二篇がある。いづれも近松の世話物中でも出色の作として知られたものである。

時代物中にも注目すべき作が多い。就中會我會稽山は例の雪女五枚羽子板、國性爺合戦と共に近松の時代物の三傑作などと稱へられたもので、數ある會我物の中で殊によくまとまつた作である。又傾城酒吞童子は、第五巻に掲げた酒吞童子枕言葉の第三段以下を改作したものであるが、その中に當時世に知られた大阪新町の茨木屋幸齋の豪奢を仕組んだものとして名高く、平家女護島はその第二段鬼界が島の場は、後世の戯曲に少からぬ關係を有し、第三段には名高い吉田御殿の巷説を取入れてあるのが面白い。それから傾城島原蛙合戦は世界を鎌倉時代に取

つて、天草の亂を仕組んだものとして、本朝三國志は豊太閤の事蹟を題材としたものとして、共に注目すべき作である。

其の他大時代物としては、素盞鳴尊の御事蹟を仕組んだ日本振袖始、聖徳太子の御事蹟を主材とした聖徳太子繪傳記、三國傳來の善光寺如來の由來を綴つた善光寺御堂供養、惟喬惟仁兩親王の位争ひに業平の情事を取合せた井筒業平河内通などの如き變つた諸作がある。狂言本の「日本振袖始」は、淨瑠璃の日本振袖始の梗概に過ぎないものであるが、特に参考として之を掲げたのである。

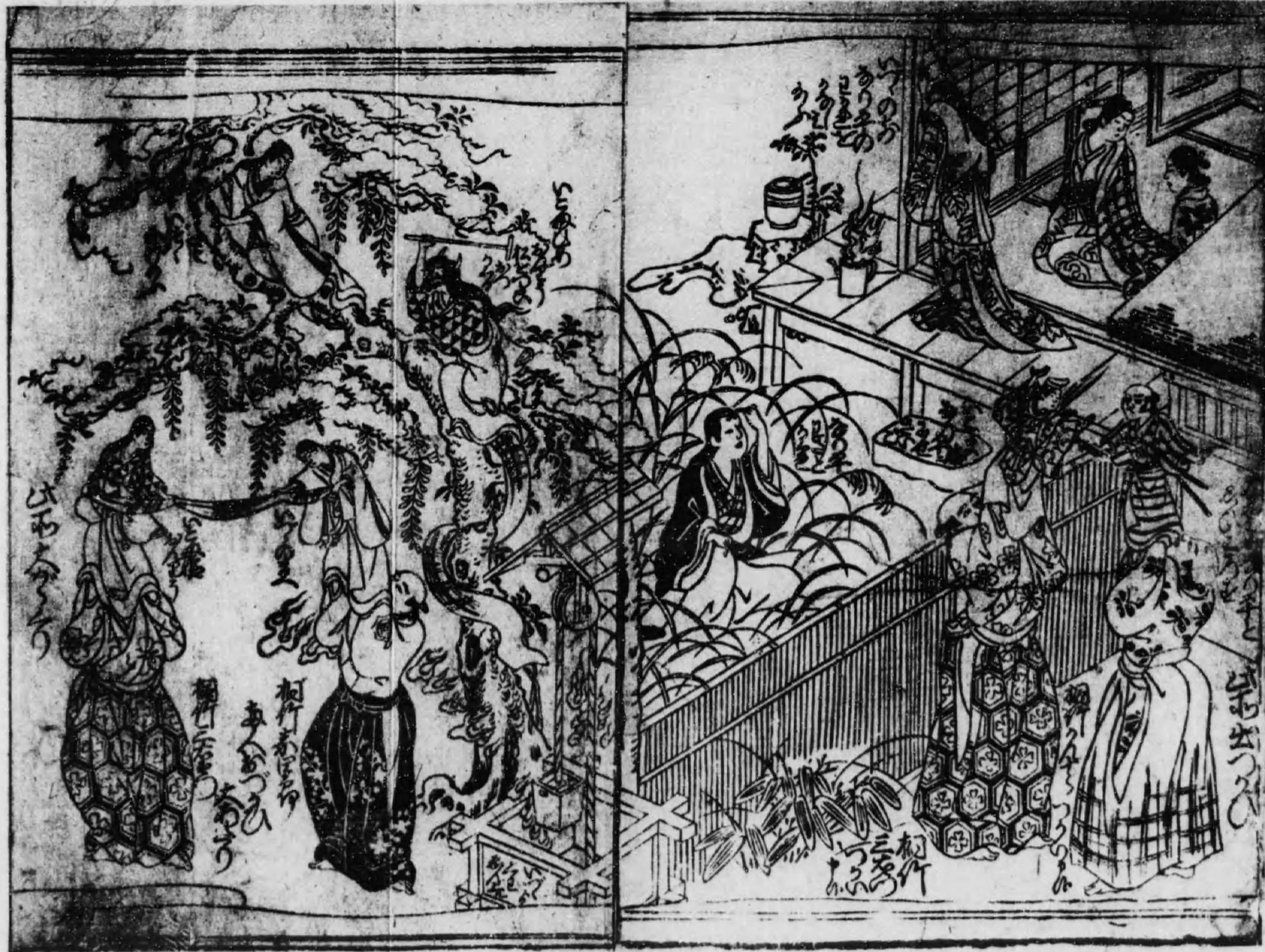
大正十二年四月

校訂者しるす

近松門左衛門全集

第八卷 目次

| | | | |
|---|----------------|--------|-----|
| 一 | 聖徳太子繪傳記 (淨瑠璃) | 享保二年刊) | 一 |
| 二 | 山崎與次兵衛壽の門松(同上) | 同 三年刊) | 七〇 |
| 三 | 日本振袖始(同上) | 同 年刊) | 一〇二 |
| 四 | 會我會稽山(同上) | 同 年刊) | 一六四 |
| 五 | 傾城酒呑童子(同上) | 同 年刊) | 二二六 |
| 六 | 日本振袖始 (歌舞伎狂言本) | 同 年刊) | 二九九 |
| 七 | 博多小女郎波枕 (淨瑠璃) | 同 年刊) | 三二八 |
| 八 | 善光寺御堂供養 (同上) | 同 年刊) | 三五二 |



井筒業平河内通挿畫

| | | | |
|----|--------------|-------|-----|
| 九 | 本朝三國志 (淨瑠璃) | 享保四年刊 | 三九五 |
| 十 | 平家女護島 (同上) | 同年刊 | 四五七 |
| 十一 | 傾城島原蛙合戦 (同上) | 同年刊 | 五三三 |
| 十二 | 井筒業平河内通 (同上) | 享保五年刊 | 五六六 |

聖德太子繪傳記

(七行八十七丁本)

作者 近松門左衛門

聖德太子繪傳記

序同佛勝鬘夫人に記を授けて曰く。汝如來の眞實の功德を歎す。此の善根を以て當に無量阿僧祇劫に於て自在の王と成り。現前に讚歎せん事。今の如くにして異なることなかるべけん。等勝鬘師子吼經の金文苑も符契を合する如く。一千餘回の法の花始めて爰に咲匂ふ。聖德太子の救世の恩オロシへ報じても猶。餘りあり。地御父用明天皇崩御の後。伯叔の帝に攝籙の臣として。靈山附屬の法水を神國に湛へて。垂迹和光の影を浮べ。周公孔子の教を羽翼として。十七ヶ條の憲法を立て。現世安穩の佛説世に示さんと思せども。天下の貴賤未だ迷の邪義の罪。上一人の御惱と成りフシ良藥。效驗を失へば。地太子の御身に大衣を着し緋の袂に柄香爐を燻らせ。南殿につゝ立ちて御惱平癒の御祈り。小野の妹子蘇我の馬子佛法歸依の兩大臣。地太子の左右に隨ひ信心無二の御祈誓。諸佛薩埵も影向あり。佛法擁護の善神もフシ感應さぞと著し。地妹子の大臣宮中を見廻し大音上げ。謂凡そ天子の御惱は天下の煩ひ。月卿雲客頭を病ましめ心肝を焦す所。

大連物部の守屋只一人參内せず。天機を伺ふ事もなきは仔細ぞあらん。勅使を以て所存の通り
 屹度召問はるべきか。馬子如何候と評定まち／＼なる所に。地六十餘りの老女練貫の袴踏した
 き。詞いや／＼御使迄もなく。わらは則ち日盆と申す守屋が母。御説の如く君の御惱を臣として
 悦ぶ者や候べき。地我が子の守屋深く悲み。度々の諫言用ひられず。上の御心より起つたる作
 り病。詞忝くも日の本は天照大神の御子孫主として。代々の帝神道を以て御代を治め給ふゆ
 ゑ。地君安く民豊なる神道を捨て。うたてやあさましや佛とやらん西天竺の人形を尊び。罪を
 作れば死して地獄に落つるとや。地獄の釜は何國の釜屋が細工土釜か鐵か。死んでの後の身體
 は焼けても焦けても構はぬ事。節分の鬼さへ恐わなす神國の人間。牛頭馬頭の惡鬼が責めよか
 し。此の婆がいがめてやる。かたはら痛い佛法。見て來て證據に立つものなければ來世とはよ
 い拔道。佛になつて成り了せて何の樂みサア。何の徳がある佛像を海に沈め。經卷を燒棄て國
 土を清め給はずば。天神地祇の御崇り天帝龍神怒をなし。帝の御惱民の煩ひ國の災止む時なく。
 詞守屋が諫思ひあたり給はんはたつた今の事。地佛法と聞くと耳汚れ佛といふも口穢はし穢は
 しと。破法の唾白髪たる。フシ頭を振つてぞせりかけける。地庭上に控へし御隨身跡見の赤髯物

にこらへぬ兵。生得の赤面鬼灯の如くせきのほし。詞ヤイ婆め。己が知る程の事聖德太子の御
 存じなうてあるものか。地獄の呵責合點がいかずば赤髯が此の腕を見よ。うぬが頭爪先まで微
 塵骨灰に引裂き。地獄はまつこのやうなものと。地性根を付けてくれんすと。大手をひろけ腕
 付くる。詞日盆けら／＼と嘲笑ひ。ア、ことをかし。見ん事婆は引裂かうが。我が子の守屋を
 引裂きだして腕首引抜かるゝが笑止々々。佛法もちやうどその通り。人によつての機の前正
 體もない後生の沙汰。極樂とはよい夢地獄とは怖い夢見る如く。手にもとられぬ闇の夜の空際。
 虚空に繪を書く子供たらし。地願ふに足らぬ佛法皆偽りと正理をくります辯舌は。フシ則ちそ
 れぞ地獄なる。地聖德太子忍辱慈悲の御聲にて。不便やよく／＼迷うたり。神道を見損ひ佛道に
 は猶疎し。十界の三世は差別の法三を開して一佛乘。神は唯一圓頓一實相の外。別に佛法なく。
 本地垂迹一如なれば神佛とて二つはなし。守屋親子が佛を編し地獄極樂なしといふ。舌三寸の惡
 業梵天に響き。天の災難只今よつく見懲りせよと。宣ふ中より電光。虚空はためき鳴渡り。雲
 は炎と燃立つ煙朱をさす如き日輪に。本地釋迦如來毘盧舍那遍一切處の御形。増上我慢の惡人
 を驚かしたる破法の猛火。佛體焦るゝ現相渦く火炎の虹となり。日盆が頭に燃えかゝればナウ

熱や堪へがたや。やれ焼死ぬるわ焦けつくわと。逃げ惑ふ前後も煙七顛八倒悶絶し。五體を投げて跑く音大磐石を火に焼いて、フシ淵に沈むる如くなり。地太子日天子に向つて三寶の御名を唱へ。合掌あれは忽ち火坑變成の五色の光明御簾を照らし。異香燻じ花降りて法身莊嚴の本佛、八十種好歡喜微笑の御かほばせ。地瓔珞華鬘輝きわたり雲井に入らせ給ふとひとしく。御惱平慮寂涼しく見え給へば。上から下に悦び合ひ皆南無佛といさむ聲。フシ暫しは鳴もしまらず。地老女やうく本性つき溜息ほつと詞はなく。スエテ涙に沈み居たりしが。詞誠に地獄極樂は今生にもありし物。勿體なし恐ろしし。地佛法は偽りと譏り嫌ひし五逆罪。十惡人とは我々親子。太子様の御慈悲に白髪あたまを剃りこほし。四部の御弟子の一分にて後生を助けたべなうと。頭を叩き手を合せ、フシ懺悔の涙せきあへず。地太子歡喜ましよよいかなく疑ひ菩提の種となる。めでたしよそれ我が法は無明の煩惱を切る利劍なれば。何ぞ剃刀の刃を頼まんと。柄香爐をさしのべ日益がいたよき善來比丘となで給へば。惠日の影に解けそむる頭の霜の落髪も。七寶無數の莊嚴。日月も納受の天に音楽一群の。紫雲下つて剃髪を包取る光に映じ行く空の。雲の上人御垣守下官の男女に至る迄。はあつと感じて禮をなす、フシ初發心こそ不思議

なれ。詞太子重ねて。家に歸つて汝が出家を守屋に見せば。大きに怒り評ひて却つて功徳を失ふべし。頭を包み隠し置き。地毎月六齋日草木の花を瓶に生け。諸天を祭り供養せよ。凡そ立花の功徳には草木成佛の因縁。花ちり葉の落つるにも聲聞無常の悟あり。粧ひ立て色々に咲匂ふ花を見る時は。濁る心も清やかに怒なく恨なく。天人の歡樂花にあり。いかに放逸の守屋も花には心和らぐべし。その時出家の姿を見せ佛道に誘引せよと。日益お暇賜はりてつもる迷も疑も。ひらくる花の帽子にて頭つむも柔和なる。民は名字の人となる。御法の花の初咲の國も。榮えて三重へちはやふるフシ和光の影も。地理に暗き物部の守屋の大臣。僻見の横車正直無上の道を遮り。因果もなく後生もなく今生一旦と見破り。立花は天の祭ごと母の方便聞入れて。親しき公卿武家浪人等に一瓶づつと所望の花。風おほひ水そぐ女小性の其の中に。玉鶴といふ華車者の立花も少し心得て。詞ナウ傍輩衆。今日は以上五瓶の筈揃うたら申し上げまいかと。地南面の廣庇誰とは札に名のらせし。右のはしは弓削の勝海。詞ム、く見ごと蘆の心。柳の副前置に寒菊。正眞の鶏頭に少し色を持たせてしやれ木の取合せさつても挿いたり。これは弓削の廣海。南天の心正眞の紫苑龍膽のあしらひ。胸に伊吹のうつりのよさ。左の端は

東の直駒。ハア、挿いたわ。松の心正眞の燕子花。地枇杷の葉をつかうたり控の柏落霜紅の受。出来たさうなと褒めければ。霜夜といへる龜相者。詞ナウ玉鶴殿。あの後からぬつと出たまんぢうの木は何とやらいひますの。ハテ爰な人。木の名は檜葉。後に見えるは見越の枝といふ物。ヲ、それ地ほんに見越入道。フシいやくところほめにけれ。次は鞍作りの數手の臣青葉まじりの紅葉の心。ながし控の取合せ正眞の菊。どれもくよう出来たとほめ囃す。眞中の花瓶には花一本挿しませず。詞利根さうに膳の靱負と札打つたは是誰ぢや。エ、彼の浪人の膳か。それなら道理素浪人。地花よりも先づ鼻の下。物ほんからうと。フシ一度にとつと打笑ひ。水差し水打ちさはめけば。玉鶴胸にひつしと應へ。膳の靱負と此の玉鶴が人目を包み忍びあふ深い中。もしや知つてのあてことか。此の男はなぜ遅いと氣を碎く折ふし。花箱に文添へて膳の靱負より。玉鶴殿へのお使と聞くより嬉しさ口上も。ろくに岩瀬の森の蟬。たかいくと文引き隠す。襦袢の袂を屏風の盗み讀。詞今日の御會心に落ちぬ事どもあり。龜忽には參るまじ枝をため葉をすかし。立つるばかりの木葉の色々。地此の目錄に引合せ。頼むとばかりひつこなす文章も誠の夫婦。戀を離れし戀の底嬉しき肌じつとつけ。詞是傍輩衆。靱負殿は遅參にて花を我等に

立ててくれとの使。見様も知らぬ女の業。殊に手向の立花には深き口傳もあるけな。地知らぬは知らぬと正直に。いふぞ誠の天の道覺束ながらと立寄りし。姿も品も花なれば向ふ花瓶の水鏡。スエテ立てぬ花こそうつけりけれ。

眞の立花

是々御覽ぜ是ぞ此の神に手向の眞の花。の數歪ます直なる心の竹を立初むる。一二の枝のふさやかに茂る葉重ね呉竹の。世々を重ねる。フシ例なり。正眞は水仙に陰と陽とのつがひ葉は。爰に口傳と岩戸を表しめぐみの露を貝口にオクリうけて。諸願も成就の神影向の枝とかや。受添は残んの菊。籬のもとに手折りては。ハルフシ悠々として。南山を見しは唐土日の本の。朝日のてり葉はまきして君がため鐵しつはりと。オクリ撓める。露に戀をもつしぐれも霜も降らば降れ。ながしの松は深緑ぢつと控の若緑。見せばや鶴も。我が宿と千代に八千代の昔衣。しやれの枯木を馴つくり雪を出でたる早咲の。フシ梅こそ谷のうつりにて。ハルフシ水際きよき。花の影。地何に譬へん唐繪の屏風よナゼく。立て、見たれば。面白や木立枝ぶりつりもよく。峰を見こしの。松の葉に。月をも宿す景色あり。木々も草葉も縁切れず夫婦の縁も結び合ひ。

フシ長うそへとや。副下にまくらから葉の。胡蝶花は寢よけの。フシあひしらひ。同じ青葉も濃き薄き。わけて淺黄と紺こん瑠璃の。葉がくれに。フシ珊瑚の玉をもち上ぐる萬年青は三がのまへおきに。口傳あるぞとしら玉椿。八千秋を祝ひこめ。フシ野菊澤菊さし混せて。左草とめ右木とめ。雨露のそめ葉の芳しく造花の手業仇ならず。おのづからなる風情には見あぐる山の蔭繁み見。下す谷の奥深く。淺澤小野の水わけて千代を。見せたるフシ竹の節。非情も心。あり顔に。さしかこひたる立花の作意。天も納受人樂み。妖艶風流のもてあそび。月花わかぬもの迄も。フシあつと。感じて詠めけり。地必ず。傍輩衆。玉鶴が立てたとは沙汰なしに頼むぞや。詞ヲ、く、何の云はうぞ。立花揃ひしとばかり。いざ披露申さんとオッリ打ちつれ、奥に入りける。フシ出づるに警し。入るに蹕す。天子を眞似る守屋が驕。御出なりと呼ばれば。弓削の勝海東の直駒なんど。花の連衆御機嫌うか、ひ並居たるに。挨拶もなく上段にどうと坐し。詞なう方々。親の恩は廣大。老母此の頃守屋が心を慰めんと立花を好み給ふ。花の色に氣は染まねども母の心を休めん爲。我も立花を習ひ、各にも望みしに。膳の靱負といふ素浪人。常は家來同然に出入し。此の頃は召せども不通に來らず。立花を望めば立捨てにして歸りしは。面

面に云ひ合せし某が企、氣取つたりと覺ゆる。召寄せ實否を地糺すべしと云ふ所へ。膳の靱負參上と。更に心の解け難き氷の上を踏む如く。衣紋つくろひ遅參御免候へと。坐する所を直駒勝海に目くばせ。詞御機嫌わるい口上張るな膳と。左右よりひつ包む飛びしさつて身構へし。詞立花の仰かうぶり早天より精出し。御意をそむく覺えなし。エ、く、エ花がお氣に入らぬな。よしあしは知らず心一ぱい。何か御意に違つた。縁きれ花か見通し枝が。きれ枝をれ枝まがひ枝りうご壁指く、り枝。四つ手月の輪釘かくし六花六葉四花四葉。是定まりの花の法度。其の外は時の機轉。出來不出來は指果報。地天に捧げ人の心を和らぐる御會。思ひよらぬ立花が喧嘩になりさうなと興に。フシなしてぞ立ち居たる。詞ムウ汝が立花一切守屋が氣にくはず。天も神も納受。國家安全の立花の祕傳。守屋が家に傳へ簾中に一瓶立て置きたり。地一座の輩皆我が弟子。今日より汝も弟子にせん。それく師弟契約の連判と。いふより勝海心得て連判の一卷硯取添へ。サア血判と差出す。扱こそと披見すれば聖德太子を滅し。佛法を破却し帝を弑し。おのれ萬乘の位を踐み。神道を以て天下をしるべき謀叛一味の連判。靱負はつとせしが少しも動せず。詞ム、珍しい花の流儀さりながら。師匠の手際も一覽せず判形は致されず。守

屋公の立花拜見と。立たんとすればヤア無用の師匠吟味。先づ判形と睨付くる。勝海つゝと寄り。印判の用意なくば手形を押せと腕首取るを振放し。是さ師を選んで習ふは古の法。先師匠殿の立花一見とすんど立つて。師弟となつては七足さる。今の兩足地慮外なしと。花瓶片端に取つて投げ。松も紅葉も踏分くる野邊のさ牝鹿あばれ鹿。床にかけたる簾引ちぎつて捨てければ。床には守屋が劔の立花。鐵のうすばたに七つ道具は拔身の双。さはらば切らん氷の利劔つるぎの枝ともいつゝべく。さしもの靱負當惑し。フシ息をのんでぞ控へける。守屋怒れる胸聲にて。劔の一色よつく見よ。蠅同然の汝等親子。此の守屋に楯つく事。蚯蚓が大蛇に争ふ如し。地抑汝が親膳の連は。先帝の勅勘世のたゞすみなく。調我が領内に身を忍び相果て。大恩受けし其の悴。我が法度の佛法を信じ剩。汝が妹膳姫。我が妻にせんと望めども承引せず。佛法信心親孝行の聞えありとて。聖徳太子娶るべき約束にて。芹摘の后と女官の號をかうぶるとや。地言語道斷の奴輩待つて見よたつた今。一戦に勝負を見せ。佛を信する帝の御首眞に立てたる鉢に貫き。正眞には太子の首。流し控に蘇我の大臣妹子が首。其の外一天下尼法師の首切つて。受副前置串柿さしに貫き。みな紅の首の一色。佛法を攻伏せ神の流の日本。帝位を

望む守屋の大臣。調いはれぬ我を張んより佛像を燒棄て。姫をも我に得させよ。いやといふ詞の下膳一家が首切つて。劔の立花の下草にさしならべん。地返答いかにとをめぐ聲。天地に響き礎に。フシどうづき突くが如くなり。地遁れがたなき膳。よもや生けては歸すまじ。一生の浮沈今日と。調是大臣殿。神道に事寄せ代を奪ふ逆心とは。目高がとづくに見付けたり。神道佛道の善悪は知らねども。大連朝敵に與する男でなし。佛法をふり捨て姫をもくれとは髭口から。あまいことよといはるゝのう。サア。此の瘦首を劔の立花にさゝるゝか。貴公の首を。花桶や棺桶の投入れにさす物か。地互に命の水際さつぱりと綺麗にさせと。つかに手をかけつゝと寄る。コハリ守屋が見くだす面。魂。肉眼の威におされ。抜きもやらす太刀のつか。目貫もひしけ砕くるばかり握りつめていどみあふ。地鞍作の數手走寄つて後より。鑑返しにむすと取る。さしつたりと一反そつて拔打に。數手が頬がまち願がけて切りさぐる。太刀風に勝海始め。フシ遠侍にぞ逃出しける。地守屋飛びかゝり膳が。細首擱んで打伏せ背骨にどうど乗りかゝり。調たとへ夜を晝牛を馬といへばとて。守屋が是非を糺さんとは。慮外千萬ちつへいめ。息骨が立てらるか動いて見よと。地もたれかゝる肥滿の身體。大山を負うたる如くにて指を屈めん様もなく。

牙かみならず膳が、ッシ心の内ぞ無念なる。地かくと聞くより母尼公泣々駈出で。ヤレ恐ろしの有様や。此の頃くれんぐいひ聞かせし。責めらるばかり地獄でなし。地責むる心が則ち地獄邪見の子を持つ因果にて。奈落に沈まん此の身を。太子様の御慈悲教を受け。咲散る花に無常を知らせ。心をやはらけ善心に引入れん爲の花好み。ッシ老の榮耀と思ふかや。見るもいぶせき太刀刀閃かし。劔の山の導きか善とはならで悪とな。科なき花にも紅葉にも。恨みが出来たと子を思ふスエテ口説き涙は。せきあへず。サア調尼法師の首きらば。先づ一番に此の母が首討てと。顆頭取り給へば守屋大きに動轉し。詞ヤア何時の間に誰が刺つた。心中に望みあつて。佛經を削る守屋が母。佛を信じ尼となり我が子の恥辱はおほさずや。地曲もない母上と氣色を損じ恨をなす。詞ヲ、曲もないとはおことが事。地悪業の報いの罪助けん爲の母が尼。懐に乳を含めし嬰兒の時も今とても。可愛さは變らぬ物。恥になる事する物か。膳を助けよ殺さば母も死ぬるぞと。立花の小太刀追取つてサア。母を殺すか助くるかと。胸にあてたる刃の光稲妻待たぬ危き命。守屋が傍若無人にも。母を見殺す悲み。おめくと鞆負を助くるも口惜しく。心迷ひのたるみに跳返せば取つて押へ。母を見やりてはあ。くはあと身をひやすばかり

にて、ッシもとより。蒔かぬ慈悲の種。助けん色め見えざれば。詞ヤレ母が目の前死するを見ても。人を助くる心のない。地己れは鬼畜木石か。存らへ如何なる恥をか見ん。子の罪を母が身には是を見よ南無佛と。咽に突立て臥したりし。ッシ見る目敢なき最期なり。詞ハア、しなされたりしなしたり。うぬめいよく遁されぬ。地母の敵身の敵と膳が首の骨。一捻ねちつてゑいやつと捻切り日本の提婆我なりと。我慢を張つて立つたる勢ひ。見るより玉鶴たしなむ刀かい込みせきのほつたる女心。脇目もふらず守屋が前にすつかと居て。詞是守屋殿。我はもと母君の奉公人。常分そなたの雇なれば。主で主でない物。慮外などといふまいぞ。ヤイ。鬼め鬼神め畜生め。母君が命がけの意見聞かず。科もない大事の男をよう殺したな。人目忍ぶは是迄。膳の鞆負が女房玉鶴。夫につるゝ女の作法。地我も佛を信仰の身。佛法の敵夫の敵と切りかゝる。入りちがへ弱腰を。片足に三間ばかり鞠より軽く蹴ちらかし。詞ム、くやさしいしほらしい。小女郎一人指揮でも殺せども。地大事の軍の門出近し。無益の女を殺すは軍神の穢れ。助くるぞ出てうせう。詞しほらしい刀三昧でかしたく。地褒美をくれる頂戴せよと。鞆負が首を投出せば。玉鶴怒りの氣もがつくり。昨日逢うて詞をかはし。今朝は文の便りを聞き今の

間に死顔見る。たつた一日一夜の中。斯うも變るは何事と。目もくらみ氣も落果て。涙見せまい泣くまいとせく程。もるゝ涙なり。詞エ、獨りながらへ何にせう。地死んでくれうと思ひ詰めしが。分別しかへつゝ立ちあがり。詞コレ名にしおふ守屋殿の太刀先に。數ならぬ女の此の首を貫かれ。さき立てし夫の爲。手向の立花になりたいが。芹摘様が氣遣ひな。地とつくと御殿に移し參らせ互に一命一色の。花の會に必ず見參。それ迄さらばと身をすゑて。フシ女松の心の枝振よし。地小言吐かずと出てうせうと。詞も猛き鬼百合にこなたは。しをるゝ姫百合と流し控の睨み合ひ。目前修羅の劔の立花左右に。別れて三雲の上。更け行くフシ月の。夜遊の舞樂聲は嘯伽の鳥の急。菩薩も爰に歸德樂。春鶯囀の鶯に誘引せられ。芹摘の後は只獨り來るともなしに青柳の。柳花苑の笛の聲笙箏築は澄渡り。フシ樂も終りて聞えけり。詞ア、戀し〜と思ふ中何時の間に來た事ぞ。太子様のまします斑鳩の御所は爰。築地ごしに高々見ゆるは夢殿さうな舞樂があるからはまだ御格子ではない。内へはどれから入ることぞ。爰がお既黒の駒が居眠る。ハア、舍人の調使丸が草臥て烏帽子着ながら高駈。ナウ調使丸。地調使調使とゆり起されあいとばかりにむつくと起き。詞こりやお馬目を覺せ。君のお出ぢや調合點

かと。沓しめなほす草鞋の紐地ヤア是は芹摘様。太子様かと思つて。詞あつたら目をさまいたと。ころりと寝るを是々頼む。詞ちつとの間目さまいて話す事聞いてたも。みづから后號迄下されても。いつ御所へ參つてしみ〜としたこともなく。里にぶらく〜する中に守屋が妻にせんと。兄の靱負をせびらかす辛氣なことばつかり。地但悟氣する后達でもある事か。又外にお心通ふ方もあることか。お目にかゝつて御心底が聞きましたい。どうぞそもじの才覺で太子様の御座なさるゝ。夢殿の中へ自らそつとやつてたもやと宣へば。詞のう〜ならぬことならぬ事。男さへ出入叶はず。いかな后様でも女子は猶以て。殊に毎夜々々甲斐の黒駒に召し。拙者一人口につき日本の山々嶽々國めぐり。地やがて唐へも渡り天上もあそばす筈。何時しれずお供の用意。フシふせりまするとぞ寝轉びける。詞あの人のまざ〜しい嘘わいの。夢殿に心を澄し。坐禪なさるゝに伶人の舞が入ることか。夢殿はかこつけ后達とのお慰みに極つた。地サアまつすぐにいや〜と首筋に手を入れたまへばア、こそば。ア、〜いやこそぐられても打たれてもない事は申されぬ。今宵に限らず爰ぞといへば伶人の舞。太子様に添うた物さうな。殊に前生は唐土南岳大師と申す大知識の御再誕。昔の御身の御命日毎月廿二日。舞樂を奏せよ

との仰。蘇我の大臣笛の役妹子の大臣笙の役。此の馬も時々は、フシ太鼓の役と笑ひしが。地ヤ思付いた疑の念晴し。此の着替の烏帽子白丁を打ちかけ。調使と召さばはつと答へお馬について道すがら。明さ暗さを問ひ問はれば互の思召すまゝ。烏帽子めすまゝ白丁の袖にひかるゝ黒の駒、フシ黒白しやれたる馬取なり。地案の如く聖徳太子築地の上より調使。くゝと召さるれば后舍人が教の如く。あつとお馬を引寄せ烏帽子傾けおはします。馬上にひらりと乗移り。大悲の手綱をくりかけ智恵の鞭を當て給へど。此の駒毛を立て身顛しスエテ四足を縮め働かず。太子后に御目をつけ珍しや芹摘。御身が。嫉妬煩惱の纏に神變自在の黒の駒。駿足を、フシ繫がれたり。夫婦の契は天倫にて好色戀慕の類にあらず。我釋迦佛の跡を追ひ。和國に佛法流布の大願夢殿に閉ぢこもり。諸國に佛法興隆の地を見立て。梵天王宮にのほり世尊天上の遺教を求め立歸り。夫婦の契は朽ちすまじ。地心外無別法佛も法も心にて。夫婦も、フシ又心なり。地應無所住而生其心。邪正一如と鞭を上げ給へば。調使丸駒の口をひつ立てて。フシ矢を射る如く飛ばせけり。地たまノ逢うて甲斐もなき。暫くなうと聲を上げ。慕ひ行かんとし給ふ所へ。膳の靱負あわたしく、詞危しく、妹君。守屋が今日の花の會。天皇太子を失はんと謀叛連判の會合。

其の諍ひにて修羅道に迷うたり。地我夫婦と語りひし玉鶴を力にして。いづ方へも落ち給へ此方へと引戻す。いやノ太子の御供と控ふる袂兄弟の。此の世の縁もふつゝときれ。かつばと轉ぶまろ寢の床、フシ夢は。破れて閨の戸に。なう太子様ノと御門に走り出で給へば。腰元下婢怖い夢御覽なされたか。お心しづめられませと。いさめても茫然と、フシ空さへ曇る。玉鶴が走りついたる夫の門。あわたしく頼みませう。くゝと叩けども。守屋めが使さうな黙れくゝとひそめく音。調いや大事な玉鶴と申して靱負様とは夫婦。守屋が逆心一味なされぬにくしみ。無體に害せし靱負様のお首を證據と投入るれば。地后是はとさめやらぬ。夢に夢見る御涙門を開けば走入り。契りし人の御妹御。夫の形見の後様。兄の形見の玉鶴殿と。引寄せくゝすがり付く中は嫂、小姑。涙の絲のむすほほれ寄合ふ。縁の哀れさや。夢の合うたる御物語かなしみ深き夜半の霜オクリおくに、ともなひ入り給ふ。地御隨身跡見の赤擣太子の仰を蒙り。後の屋形を忍びの夜廻り。五尺四寸の一本刀、檉丸太の仕込杖。鉢丁笠の軒ふかき。フシ小家のありくに異ならず。門外に踏んばたかり。詞あらうそさびしい。今宵も何の事もない。太子夢屋御入三昧の間。後の屋形守れとの御意を受け。何にもせいでは嬉しうなし。地強盗でも來いかし

とふり返る山手より。提灯星の如く數百人群つたり。ヤア曲者と門の冠木をしつかと取つてひらりと乗り。煉築地の棟瓦大あぐら組んで、フシ待ちるたる。程なく大勢斧鉞打ちかたけをめて来る。詞大將は東の直駒左右に下知して。ヤアく者ども此の門一重打破るは易けれども。太子方より用心かまへ過ちしては不覺なり。提灯さし上げ内を照して驚かせと。地取りのべ取りのべ上ぐる鼻の先。赤擣をかしさヤアくだされた。暗闇にしてよい氣味せんと。ふつと吹消し又引寄せては吹消し。引寄せく片端にふつくと吹消され。俄闇に度を失ひ行當り摺合ひ。亂れ騒げば直駒騒ぐなく、詞塀の上に何やら見ゆる油断するなといふ聲に。地赤擣騒がず棟瓦取つては投げかけ雨の如く投げつければ。そりやこそ敵が飛びおりたと。味方討同士軍、フシ更に分ちはなかりけり。詞直駒聲をかけ見付けたく。塀の上なは跡見の赤擣。地誰かある搦取れ。承ると山邊の石繩腕木に取付きあがる所を肩骨つかんでえいと引上げ小脇にかいこみ。首ふつと捻切りしは、フシ熱柿をもぐより易かりけり。地見たかく名乗るに及ばず。跡見の赤擣そこへおりて見參と。煉築地ぐわらく踏碎く土煙。搏つ鵬羽たたく驚。逃ぐる敵をあまさじと十町ばかりぞ追かくる。詞何として直駒郎等少々取つて返し。門たたく割り亂れ入り后

を奪ひ引つたて行く。ヤア玉鶴が是に居る。后様を渡さうかと取付く所を一つに攫み大地へどうと打付け。動くなおのれ等鉞の二洞と。地振上けんとせし所に。赤擣すかさず躡の起るが如く宙を飛んでかけ來り。直駒をはつたと蹴倒し鉞もぎ取り。胴骨どうと踏付けしは、フシ心地よくこそ見えにけれ。サア此の間に落ち給へ都は守屋が方人多し。明けぬ先に早うくと見送つて。詞ヤイ罪人め。此のあらけない鉞。むくくの娘達を是で割つてたまる物か。地うぬらが罪障の山の杣入杣木になれと振上げ。代木丁々とうと割つたる頭の鉢。兩腕兩腿ちやうちやうはたく微塵に割りてわり付くれれば。残る兵一度にどつと寄せかくる。詞ヤイ摺山の雜木ども。こなしてくれんと東西南北四面。八面割りちらし。太子は御佛守屋は地獄。せめ手の赤鬼赤面よつく見よ。地獄の釜の割木にして大焦熱の燃口よし。三途のながし死出のち。生木ふし木のきらひなし。十惡五逆の五かけ十かけ手早い。木割が手並は是迄どう。く。どうどうとうとふんだる足音。川音水はしる富の。小川を打越えて斑鳩の御所へぞまゐりける。

第二

地蜂に上下の禮あり鳥に反哺の孝あり。人は四靈の長たるや。世の時を見て滄浪の冠を洗ひ口

すゞぐ。秦の川勝といふ武士あり。家の弓矢は忘れねども今俗倫に身を寄せて。河内の國に居住の地守屋が領分入りまじれば。主あしらひの無念さもそれなりけりの親の孫。父川文入道病死あり。今二日にて七々の名残もいと身にぞしむ。落葉は書院に満ちて紅を敷く。玲瓏たる佳月寢所にかゝやいて別を今も在すが如く。父の位牌を供養し。喪に引籠る川勝が。フシ極信心こそ他に異なれ。フシ夫につれて。風俗も。うづたか蒔繪の煙草盆。手づから提げて中陰は夫婦も遠慮の襖ごし。詞永々の御忌中。ま一日二日といひながら嘸お氣もつきませう。廣間の庭の白梅が返り咲。春の様など女子どもが申します。地暫くの間お心晴らし御覽もやとうかへば。詞ム、女房か苦しからずと襖戸ひらき。おいやる如く父の忌中も今暫し忘れうとは思はねども。去る者は日々に疎し月日の立つも名残あり。父母の別れには王憂へて諒闇三年とて。一天の君猶斯くの如し。匹夫の我等二月たらぬ中陰に。目を悦び耳を樂み心の儘に過さんこと天の恐れ。其の上地頭守屋殿澁川に城を構へ。叛逆の思立。父入道殿は専ら佛法に心を入れし人。其のかひもなく守屋が手に屬し。帝太子に弓引く事は迷惑ながら地頭の權付。地いやといへば臆病者。是非なく陣觸の廻文に加判する上は忌中明け次第斷付け。切つてのはつての心は

佛道形は修羅道。詞返り咲の梅花手向に受けうも知れぬ命といふは座興。手柄して見せませう。二日の忌中大切に勤むるは孝行鬱氣する事おりにない。地ゆめ／＼氣遣ひめさるなといへば女房、み寄り。詞便りないお物語彌々心がいな物。先づ申して見ませうか。お位様の御忌中は月を日にかへて十二月を十二日。我儂ななされやう。すりや三年も名ばかり。地それに五十日の長精進をやう／＼濟めば軍立。内でとつけりと精進あけの間はないぞる。魚でもあがつて力付けての軍立がようござんせう。私も木竹の身ではなし夫婦ちとしつほりと。ア、魚でもあがつたらようござんしよと恥かしげに。赤らむ顔のほんのりは。フシ霞に虹の如くなり。地門外に馬の高嘶若黨罷出で。詞葛城の島主様急用の御相談とて。御出なりとぞ申しける。ム、お中のよい島主様ようこそ／＼此方へと申しませ。ヤレまて／＼。尤島主懇意とはいひながら彼は太子方に無二の忠臣弓馬の道も磨く者。守屋の地に住む某日頃とは違うた。咄に來う様もなし來る隙もない筈。よし何にもせよ。地頭の出仕も相止め。燕居せる川勝他の對顔も本意ならず。戻すも無禮幸ひお身も近付き。地立會ひ様子お聞きやれそれ此方へと請せさせ。間の襖に中陰のフシ遠慮を。隔て聞きるたる。地いつに變りて島主は白檀みがきの腹卷。木蘭地に藍花摺つ

たる陣羽織。大太刀首かき刀かさ高に出立つて。廣間に通れば女房會釋し。詞是は珍しい御出
 地けしからぬお出立されば夫川勝も。詞お出の由承りお目にかゝりたきものなれども。御存じ
 の如く明後日迄父の忌中。地頭の出仕も致さねば何方へも御意得ませぬが。お心やすい島主様
 御用とは氣遣はし。私に聞かせませいと申付けお心置かれず仰せ聞けられませ。ハアお煙草
 はあがらず。火をきよめて、フシお茶上げませいと愛相らし。ム、忌中とは御尤。さりながら
 申さでもすまぬこと。奥方へ咄致すは川勝殿へ申す同然。屹度御聞きなされう。詞守屋の大
 忝くも聖徳太子佛法御興隆を嫉み。おのれが母をも見殺し膳鞆負を殘害せし大惡逆。剩へ帝を
 失ひ奉り其の身萬乗の位に即かんと。志紀の郡濫川に城廓を構へ不日に内裏を攻むべき催。御
 存じでござらう。地太子は折節夢殿の禪定に入らせ給ひ。天上とも入唐とも凡人の知る所にあ
 らず。是によつて蘇我の馬子妹子の大臣斯う申す島主を始め。勅命を申しくだし近日彼の地へ
 發向し。一戦に守屋を亡し宸襟を安め奉る合點。それにつきて。詞川勝殿守屋が領内御住居の
 人。申さば敵味方爰をよう合點あられう。天地の間に生ある者いづれか天子の恩を受けずや。
 良禽は木を見て棲み。忠臣は君を選んで仕ふといふ。天下を奪はん位に即かんと。臣として君

に及向ふ守屋は至極の大惡人。太子は此の世ばかりかは未來出離の大導師。善惡の二つ目前に
 見えたこと。若い人のわるう呑込み降參などと思しめさうが。必ずさうでない。帝に頼ま
 れ奉つての御味方頼入る身不肖ながら此の島主七重の膝を十重も折り。甲の天邊を地につけ申
 さん。直談とは此の無心偏に御料簡。川勝殿の御名代御返答はと一筋に。思ひ込んだる武
 夫の魂等閑なかりけり。座は替れども理は一途川勝も吐息つき、フシ分別眼を閉ぢにける。地
 女房つくづく打ちうなづきいやといはれぬ理の至極。詞夫川勝と申しても守屋に譜代相傳でも
 なく。當國守屋知行ながら。龜井竹淵大初瀬此の近郷は夫の先祖。刀の先で切取つて一派立て
 た身なれども。地いつぞの程から年貢地が雜つたとて。ふつと守屋の下知を聞き。あがまへが
 高じくして今で地頭の名はあれど。それは假令なんの守屋に恩は受けず。お主と申すは王様よ
 り外はなし。詞殊に父御入道殿佛道の信心者。親孝行の佛法のお味方何の否とは申されまい。
 忌明け次第駈付けお前方と御一所に。地手柄は仕勝ち功名は誰に劣りもせぬ人と。夫自慢の舌
 車口にはせど川勝は濫顔。地襖細目に裾を引き。守屋の廻文判形は削られぬ。帝の御味方
 ならぬ。云直せと囁けばはつとして。かたい夫の料簡押付けてもいはれぬ首尾。島主がそ

ばへすり寄つて。詞又斯うもござりましよかいの。川勝存じられうには恩のあるなしは内證。秦の川勝守屋の被官とは一國知らぬ者なし。今御味方に参つては得手勝手な卑怯者。人でなしと嘲りは先祖迄の恥辱。義も道も立ちますまい義を重んじては撮髮の童子。地死するに門なしと常々主の口ずさみ。よもや心は變ずまじ。お頼みなされて得心なければ互に心よからず。さうは思召されぬかと始めの詞押拵けて。間に青柳の絲筋をッしわけて云ふにも云ひにくし。地島主一圓うてぬ顔。襖の彼方に川勝があると見しより大音上げ。詞ハア、川勝殿の内室なれどもさすが女性。彼の昔物語比干が紂王を諫めて胸を裂かれ。夷齊が武王を憤り終に首陽に飢ゑたるも。悪を諫めて義を求め仁を勧めて身を捨つる。それさへ天下に益もなく。我が身一つの仁義だて胡麻と芥子が大小を諍ふ如く。どちらを見ても小さし。地四海の仇を拂ひきよめ廣く國家に仁を敷き。名を金石に記されて譽を子孫に残すこそ。武士たる者の望む所何ぞや僅かの義にくゝられ。國賊の方人仕畢せて大悪人仕損すれば子々孫々永く家名を失ふこと。其の上御親父入道殿。詞太子の法義に歸依めされ形の如くの信心者。父の道を改めぬは孝の一つと忌中の勤めも佛法にて。追善作福ありと聞く。守屋に従ふ心ならばいかに親の爲とて。佛道

にて跡とふは僻事であるまいか。地そこを構はぬ心底に一物ありと見て取つて。詞を盡すも川勝殿味方に頼まれたばかり。いやかおうか二つに一つの御返答。ッし承らんとつめかくる。地女房いよゝ理に伏し。詞重々いやと云はれぬ御詞。かうしたことを聞かれてはよもやいなともいふ氣か。但いはぬ氣か。地いかゞと跡をさし覗けば。川勝は鏡に向ひ若黨の團中が。剃る月代の際立てて。一理窟ある顔の色茶道坊主の茶行めは。時計仕掛けてめつた打ち敷はいくつか知らねども。氣は百千に碎かれて讀む程知れぬ夫の心。問ひには立たれず囁いても返事せず。どうした事と島主も奥を見やりて諸共に。野澤の水の五月雨やッしすまぬそこを汲みにけり。地川勝衣服改めて睨みつめたる眼ざし。今もや事にあひざめの大小ほつ込み玄關さして立出づる。女房ちやくと袂に縋り。詞けたまましのお顔付月代も遊ばして。地いづ方への御出で様子がなうては叶はぬ筈。御物語と引きとむる。詞ヲ、いうて聞かしよ。父母の忌中は大事の物耳に多言を聞かず。目に悪色を見ずといふ。最前より心に受けぬ多言を聞き。今二日と成つて大事の親の物忌に疵付けんこと勿體なく。茶坊主めにいひ付け二日の時計を一時に打たせ四十九日の數を合せ。今日則ち五十日の忌明。地地頭への出仕をするに不思議はないと。袖

振切つて突きくる先には島主身構へして。詞コレ川勝。中陰明けて他行する身が是に居る某に。色代もせぬは長精進で眼が見えぬか。心に受けぬ他言を聞いて中陰の妨とや。地心に受けうが受けまいが直々の返答承らんと突立つたり。川勝臆せぬ笑ひ顔。詞ヲ、最前よりの長口上天下の人民皆國主の味方そりや知れた事。然れども義によつては。朝敵となり命を果すも武士の道。二つなき川勝が一身敵とも味方とも。今返答はならぬ。ハテ辭宜をするも事による。どつちも付かぬ言分せずとも。一口にかた付けて今返答とつめかけたり。地川勝立戻つて佛前の父の位牌を持来り。腰の指副引抜いて位牌を二つに切割り。詞コレ此の一方を返事に持つて歸られよと投げ出す。地島主も動顛し女房は氣も狂亂。こちの人餘りな。こなたの一味せうせはないは位牌の知つた事ぢやなし。勿體なや父上をとステテ伏沈みてぞ。泣きもたる。詞島主膝立てなほし。詞ム、聞えた。返答あしくば堪忍すまじき此の島主が面魂氣味わるく。親の位牌を切割り是で料簡してくれか。いやかおうかさつぱりと口上で返答せよ。此の判じ物の様な事身には措け。守屋にせいと投返す。ハ、ア、さ程道理に暗うて武者大將見事するか。親子は一體位牌則ち川勝が一身。今連判削つて守屋に叛けば武士の義立たず。又親の信ぜし佛法に敵すれ

ば孝行立たず。地御分に渡すは孝行の位牌手前に持つは武道の位牌。二つを一つにつぎ合はする時節来れば川勝が。孝も立つ武も立つ此の上の返答ないと。又島主が前に置く。詞ム、おもしろい。孝と義となき士は味方に頼んで詮もなし。地必ず位牌をつぎ合せ孝行武道の義を立てよ。それ迄は敵味方戰場に向つて遠慮はせぬ。合點か。詞ヲ、いふにや及ぶ。此方も遠慮はない。島主が首は身が取る。川勝が首は身が取るぞ。必ず取られよヲ、取つて見せう。サアさらば。地さらばくと別る、武士の一言は。返らぬ水の川と島。濁らぬ氣立て。三重吹分くるフシ嵐は柳に。地ほろをかけ松柏枝を矢につがひ骸は積んで山をなす。寄手にひやく責鼓城に合する関の聲。矢叫びの音法螺の貝百千の雷も。フシ爰に落ちくる如くなり。寄手は名に負ふ蘇我の馬子妹子の大臣。葛城の島主は官軍の武者大將。日月の御旗家々の物印。軍兵風に梳り枯野の露に沐して。一刻にもみ破り我乗取らんと勇みをなす。コハリ城中には守屋が副將軍弓削の勝海。寄手を直下に見くだして断散らし追拂へと。大手の門八文字に開かせ。一度にどつと切つて出づれば。地ためらはオクリ入れかへく。フシ名乗りかへ。雪を散らし木の葉を亂し花を飛ばせて戦ひけり。城中には川勝が百術千慮の下知をなせば。さしもの寄手色めき立ち攻めあぐん。で

フシ見えにける。城の中より七尺豊かの髭男鎧の上に淨衣を着し。立烏帽子に三本御幣の指物。つげの棒提げ烏居立につゝ立ち大音上げ。詞抑是は當國河内の國守早公の氏神。符都の大明神の神主大造とは我が事なり。汝等が佛法は。此の世は苦海の娑婆世界。早く淨土に至らんと願ふとな。やすい事ゝ。我と思はん寄手の勢神罰の棒を戴き。極樂淨土にたつた一飛びいざ。フシこいゝとぞ招きける。地につくい禰宜めが廣言。打取つて功名せんとオクリ抜きつれば抜きつれ。切つてかゝれば事ともせず。謹上再拜拂打ち。うやまつて申すりこ木打。神はきね打正直の頭肩骨腰のつがひ。和光胴骨きらひなく。千早振棒八方無隅微塵になれとぞなき立つる。地利那が間に七八十騎弓手右手に薙伏せて。詞ハア、笑止々々聖德太子。佛頼んで地獄へ落つる。地不便さよとフシかんらゝとぞ笑ひける。地寄手の陣より二十餘りの若僧鎧の上に掛絡をかけ。太刀を提げ小躍りして大音上げ。詞抑愚僧は和州橋寺吉沙彌といふ沙門。おのれら來世を見た事もなく。あるなしの穿鑿かたはら痛し。此の太刀の引導受け。極樂地獄の疑晴らせと。地南無阿彌陀佛の拜み斬り。火宅を出づる車斬り平等大會の撫斬り。横斬り亂れ斬り。佛道神道分けめの勝負。晴れがましくぞ三思見えにける。地造は大嵩者既に危く見えにける。詞法師飛鳥の身もかろく。かいくぐつて烏帽子際眼をかけてすつばと斬り。よろめく所を附入つて疊みかけゝ。首ふつゝとかき落し。神道汚れの生首佛道には五體不具。どちらつかずのさいたら島と打笑ひ。地味方の陣に引きかへせば。ほんさまお手柄ノゝと。フシ一度にどつとぞ襲めにける。地此の勢ひに乗込めとどつと寄すれば城中も。門の扉はたと打つて堅固に守つて控へたり。寄手馬子妹子を始め堀際に駒を並べ。すぐに城をや乗取るべき。陣を堅めて後度の勝をや待つべきと。評定まちゝなる所へ。島主が二人の子政若都賀若大汗になつて断付け。詞父が鎧の草摺をひかへ。夜前守屋が大勢内裏に押寄せ。御所を圍んで攻めし程に。宿直の兵防ぎ戦ふ力なく。或は逃失せ討死し。帝はやうゝ倉梯山まで落ちさせ給ふ。剩へ守屋が軍兵公卿の館へ亂入り。妹子馬子を始め。公卿大臣の御臺北の方を奪取り。我々が母月益御前をも搦め取つて候。地兄弟も討死と存ぜしが當手の勝負。父の御事氣づかはしく此の事知らせ申さん爲。すゝと後を見せ。是迄断付け候とスエテ涙を。浮め語りければ。兩將を始め諸軍勢。是はゝと氣を失ひ呆れ。果てたるばかりなり。地陣中ひそめき皆落仕度に見えければ。詞島主躍り上つて齒がみをなし。エ、口惜しや守屋が弓矢何程のことかある。心憎きは川勝一人。

よし／＼守屋に川勝敵に實が入つて面白い。島主があらん限りは二つの首を両手に提げいで置かうか。ヤイ餓鬼めら。おのれも父が子。若年なりとも鎧を着たは何の爲。だてに着たか。寒さに着たか。兄弟枕を並べ討たれたりとも。君の御供したりとも。親はなんほう満足せう。母をおめ／＼敵に奪はれ。父の御事氣遣ひとはふ／＼の態で是へ来て。ヲ、奇特によう來たと悦ぶ親と思ふか。地大腰拔のうろたへ者。ごくにもたゝぬ注進し。妻を奪はれし人々に氣を落し。守屋方へ降参させ笑はん爲か。詞あれ見よ。いづれも色も變らず結句心に勵みつく。うぬらが母を奪はれし此の。島主人々への申譯。朝恩を報ずる爲さつぱりと。討死と云ふものをして見せう。女房も子もなければ世の中に残念なし。勘當ぢや立つてうせう。地まだ失せぬかと反を打つ人々驚きかけ隔て。兄弟に物いはせずオクリ無理に。陣所へフシ引入れける。地島主に勵まされて兩將家を忘れ妻子を忘れ。身を忘るゝは兵家の常今更驚くことならず。天恩を辱うし。勅命を受けたる臣等佛神も照覽あれ。生きて歸る心はなしと思ひ切つたる顔色に。諸軍勢も義にすゝみ誰か不忠を存すべき。骸を御旗下に曝さんと眞先駆くる詞の花。雪間に匂ふ冬の梅。フシはや勝色ぞ顯れける。詞島主勇んでヲ、尤斯くこそあるべけれ。一大事は帝の御上氣

遣千萬。地此の城には柵を配り砦數ヶ所つけたれば。いつ攻めうともこつちのまゝ。一先づ皇居を守護せんとオクリ暫く。陣所を拂ひける。フシ日はさやかにて。搔曇る。目は泣きはらせど骨々にしみ付く親の諫言を。最後のすゝめと兄弟大手の門に走り付き。詞いかに城中の人々。斯く申すは葛城の島主が二人の子。兄政若十五歳弟都賀若十三歳。母は守屋に奪はれ父には不興。生がひもなき命何を以て君恩を報すべき。此の城を枕に討死するより外はなし。地不便と思ふ人あらばおり合うて勝負を決し。兄弟が本懐をフシ遂けさせたべとぞ呼ばはりける。子供目當に我一と功名諍ふ守屋が勢。中にも役の熊王六田の岩切と名乗つて。暮に討つてかゝる兄弟につこと打笑ひ。詞ヲ、聞分けあつて早速の御出忝し。参りさふと渡り合ひ秘術を盡し戦ひしが。熊王太刀を受けはづし。弓手の肩口切下けられ。地岩切も膝口わられ。フシのつけに返り失せにける。詞兄弟大音上げ弱者は相手に足らぬ。秦の川勝はあらざるか出合へやつと呼びかくる。地軍兵ども腹を立ていはれぬきやつが相手好み。鱧にたゝけと聲々に。をめてかかれば兄弟今を限りの死ぐるひ。大勢に渡り合ひしのぎを削り戦ひける。詞島主は兄弟陣所になしと聞くより。必定死に出でつらんと。子に引きかへす親心逸足出して駆來る。地案に違は

す大童おほわらこに戦いくさひなり。既に危あやく見えければ島主是こゝにと名乗りかけ。面おもてもふらず切込みたり。父と見るよりおくれじと駈たもと出す。親は討たせじ子は死なんと。控とどまる袂たもとをふり放ち躍り出づればかけふさがる。敵は手しけく切つてかゝる。拂ふ間に子は進む。後は親子の諸刀もろやたな。忠孝慈愍しゆきうじみんの切先きりさきにあしらひかねて軍兵ども城中へさつと引き。門もんの戸はたと押立つる子は切込まんと駈出づる。詞ことばヤレ待てあぶないでかしたと引きとめ。父が子く。明日死んでも落着いた。地是程健氣けんけいな兄弟を何しに勘當するものぞ。大將を始め諸軍勢氣を落せし。武者振りを勵まさんとの謀はかりごと。勘當は免したといへば兄弟縋すがり付き。親の御慈悲とばかりにて。フシ嬉し涙に咽なびける。詞ことば、嬉しいかおれも嬉しい。地大將にも告げ知らせず。忍んで来れば不審ふしんも立たん。フシいざ歸らんと立ちあがる。誰か射るとも白羽しろはの矢島主が眞甲まがまに。裏をかゝせてはつしと立つ。大事の傷なればたまり得ず佛倒しにかつば伏し。兄弟あわて縋り付き城を見ては齒がみをなし。顔を見てはしやくり上げ。御傷おんやうは浅い氣を張つたりと。勇むる我も諸共にフシ消えんと。かこつばかりなり。地島主眼をくわつと見開き。詞主も知れぬ矢さきにかゝり。むざくム、むざく死ぬるか口惜しい。川勝めを存生ぞんじやうに味方へつけず首も見ず。互の詞も反古はなごにして。是一つ残念

残念。我死したりとも。肌にかけた位牌かたわけの片割。繼合つぎあはする時節を見よ。繼合つぎあはせば川勝が。首取つて手向たむけよ薄着うすぎするな毒喰どくくふな。達者たつしやで兄弟中ようせい。孝を思はゞ心を盡くせ。君の爲には死にをれと。地是を最期の詞にて五十一期つきはつる。兄弟ははつとばかり。大地に五體を投けすて、聲も。惜あはれず泣なきるたる。跡見あとみの赤擣あかぢ後ればせに駈来り。詞南無三寶島主討死が。よいよい此の赤擣あかぢが弔いたひ軍。生死しやうじの門を押破つて。地ゆるりと往生やうじやうさすべしと城門に兩手をかけゑいや。ゑいやと押しければ。コハリ楠くすのぎの尺余の角柱かくはしら。手に随つて動き立ち。瓦碎かへらくだけて散る音は飛龍ひりゆうの波をたゞくが如く。屍しかばねしわつてめきく。金物ちぎれてさらく。めつきりはつたり。地地響なまは。フシ須彌しゆみの崩くづるゝ如くなり。地赤擣あかぢすかさず駈入つて城中じやうちゆう難がたいで難がたぎ廻れば。副將軍勝海。鹿毛かひげなる馬に捨鞭すてむちうつて逃けて行く。詞赤擣あかぢ笑壺わらわに入つて大笑ひ。軍は負け海態うまゐは逃げ海逃うま逃げにがせ。終に一度はこつちの物と。門の貫くわんの木押取りのべ。雜兵を片端かたはしに打立てく。討てばひつしやり夏の日の。フシ蠅はを打つより易かりけり。地門の扉をひつかたけ島主が死骸しかいを乗せ。當分機轉あてぶんきてんの輿こしは涅槃ねはんの門の扉。前後は兄弟。かゝれとてこそ武夫ぶふの生死不定は覺悟かくごの前。泣くな政若。涙掛けるな都賀若と。いへども兄弟しほめる顔。跡見の赤擣あかぢが赤顔

島主が牛顔も。二度見せぬ昔の下。埋れぬ名をとめ置き。印の石に苦むして巖とならん代々
迄も。鑑なり手本なり。尤弓馬の教訓ぞと聞く人。手向をなしにける。

第三

地 若蘭が織りし錦の歌百花散亂すといへども。夫を思ふ心重き事山の如し。此の日の本の假名
遣ひ千言玉をつらぬるも。心を顯す事讀みなす文字のてにはにあり。物部の守屋滋川の軍に勝
誇り。帝を倉梯の山陵に追込め困め奉る。公卿大臣の御臺所宗徒の武士の北の方。奪取つて人
質とし。天地も許さぬ天子の粧ひ甲冑楯鉞。兵器を並べし屋形を臺盤所朝餉殿上などと名
付け。蝶鳥書いたる帳の中千里の外も一呑の。フシ謀こそうたてけれ。地 軍奉行秦の川勝進み出
で。詞今度の合戦味方十分の利運とは申せども。蘇我妹子など存らへあらん限りは勝負いまだ
決せず。人質の女數多候て。一人に五人十人の繩取番の者人數の費。軍中の妨粗忽に首も討た
れまじ。一向助け歸さるゝか。御評議然るべしとぞ申しける。守屋打笑み。ヲ、人質こそ智略
の第一。田夫野人の夫婦さへ戀ひ慕ふは人間のならひ。況んや佛法にしみ付く。心ぬるき公家
武家來世は一つ蓮と契りし女房。死出の山を手に手を取つてなどと。思ひこころだる佛者ども。

女も皆歴々翠帳紅閨に顔を並べ。詩歌管絃に暮せし中。忘れがたく内裏を捨て此方へ降参する
は必定。地 時には太子が佛法獨り打つつゝ。佛法とも音は上げさせぬ。太子さへ滅ぶれば帝
は水に放れし魚。日本の王位は守屋が此の掌。戦はず殺さずして勝つといふ神武不殺の軍法是
なり。人質どもに對面し直に心底引いて見ん。女ばら残らず召出せやつと詞はあらく。よい女
房見る下心顔に守屋の目は細く。伺候の軍兵葉武者まで俄にたしなむ男振り。鎧の袖や草摺に
さはればかたひしがたくと。フシ衣紋つくるも騒がし。地 武者大將勝海が弟弓削の廣海。
目錄ひらき讀み立つる。地 聲をしるべにフシ井手の山吹。云はねど風に顯れて。何れも奥様フシ
御前様。地 氣高く着なす衣裳がら五色の織物縫物の。花をからみし高手小手。繩目ばかりはか
くるれど手を通さねば便りなき。袖はうつせのうちかけ姿。鎧武者の並居る中。ホフシ怯めず場
うてず怖氣なき。詞 一番は蘇我の大臣の御臺所櫻戸御前。地 次は小野の妹子の御臺軒場の秋。
大伴の神手の臣の御臺藤袴。牧吹の宿根當麻の真人の北の御方千歳御前閑屋御前。詞 討死した
る葛城の島主が妻月益御前。地 堂上にあらずとて帳にも筆の末の露。おくれを見せぬ敵の前何
れも目許涼しげに。善と惡とを襦袢一重。下は召人上は長閑けき花見。月見の歩み振り。につ

こと笑うて坐しけるは、フシいひ合せたる如くなり。地威だかき女中に弱味を見せじと守屋のだけ高になり。詞扱々和御前達は情のこはい男を持つた故。かゝる恥をかき苦痛をもすることよ。忠で候義で候とて妻子に別れ憂目を見せ。骸を人馬の脚にかけられ。子孫の根をたやすは笑止千萬。女心思ひやり不便々々。あさましき人質の身の上を。面々夫の方へうち歎き云ひ送らば。木石ならぬ者ども妻をあはれみ我を捨て。守屋が味方に降参すべし。地然らば官祿ともに加増し夫婦かはらぬ千歳の契。榮花を子々孫々に傳へんは人たる身の悦びならん。蘇我妹子を始め面々の夫を此方の味方へ引取り。夫婦めでたう暮したうは思はずか。フシ心底聞かんとたらしける。地蘇我の御臺臆する色なく。詞ム、物部の守屋とはわもじのことか。珍しい對面しますの。定まる奥方有るか無いかは知らねども。芹摘の後様に深き戀より事起り。佛法を妨げ王位を傾ける程の色好み。定めて氣に入つたお妾お局もある筈。女の心は馴れても御存じないかいの。地命を捨て身に換へても夫の威勢がましい。夫の名が上げたいと願ふが天性と女の情。我等が殿御は蘇我の馬子。守屋殿とは左右に立並んで。朝家の堅め天が下の大臣職。其の妻ぢやぞや。女房ぢやぞや。いかに人質の身がづらい。別れて居るが悲しいとて。膝を組み

肩を並べた同輩に大事の男を降参させ。主君と仰ぎ輿車の跡に付け。扈從させてじろくくじろ見てるさうな女子どもと見えるか。とつくと目利なされ。サア何れも目利させまいか。ヲ目利頼まんと一度にきつと振上ぐる。顔白妙に無念の涙。フシ雪に霰ぞ亂れける。地守屋も案に相違し一應にいふ事ならず。それく繩を許せ承ると武士ども。打かけ取つて引きのけ引きのけ縲縄押切り押切つて。繩は解けども打解け難き。敵の眼に氣を付けて。フシ猶も心ぞしばらる。詞守屋えせ笑ひ。ム、く扱は面々が夫を守屋が味方に頼みたく。懇望すると氣を廻してのカみよな。いかなく彼等如き何萬騎敵にしても。睫の塵とも思はねば味方に持つてせんもなし。軍達してひこつき廻る面にくさ。鼻ひしがんと人質は奪ひ取つたれども。科もなきわごぜ達に物思はずも大人氣なし。地夫婦は唇と齒の如く唇なれば齒寒し。若木の花の苔ながら梢を放れし思ひさこそく。夫婦一所にありたくばサア今でも我が味方に引入れよ。所領を與へ一生安樂に暮させん。戀路の哀れ思ひやる。守屋が詞わるう聞くな女房衆と辯舌に過を入れて。とろりと騙す油口妹子の御臺目に涙を持ちながら。詞是守屋殿。戀路の哀れ御存じとて我々が憂身を。梢に放れし花とまでは氣が付いたか。枝が高うてまちつとの所へ手が届か

ぬ。吉野初瀬の名所も四季常夏に櫻が咲き亂れて。あると思ふは不覺の至り。夫婦の契りも其の通り。飽かぬ別れの曉もなく心にさはる待つ暮もなく。二人添うた所は地吉野の山の彌生如月。地又斯う引き別れ互に戀詫びた所は。吉野の山の秋の末花も葉もない。木々の梢も又來る春を待つたのしみ。散る時あればこそ花も咲け。別れがあるからはハテ逢ふ時節も來らいで何とせうぞいの。夜があれば晝があり。表があれば裏あり。満つ潮あれば引く汐あり負ける時あり勝つ時あり。西へくくと入る月日と思へば東に出づる月日。天道はぐるぐる。一度はあたる順の舞今か、つた此の繩。めぐりめぐつて守屋殿の身にかゝる。天命のいましめと思へばちつともそつとも苦にならぬ。そなたも萬事取込の中。年の寄るにいはれぬお世話とありければ。地残る人々一同にテ、問ふに及ばすいふ迄なし。弓矢取る身の軍の門出今生夫婦の暇乞ひ。敵の虜となる上は夫に逢はぬ生きて歸らぬ二つの覺悟をすゑた女。とくく首を刎ねられよと。敵の詞に靡かぬすゝき穂に顯れし思切り。高慢第一の守屋の臣。言ひしらけてぞ見えにける。詞素より心に義を含んだる川勝つゝと出で。詞それくく夫ある女中は男の心遊らすための人質。其の證も候へども。末座に控へし月益は夫葛城の島主討死し。寡婦の獨身誰をこ

らす爲の人質とも。捕へ置きたる其の益なし。なう月益御前幼少の子もあると聞く歎きを申し歸りたうは思はずか。御前の執成此の川勝を始め誰あつてあしかれとは申すまじ。地上にも定めてお聞入れ爰は願のありさうな義と。教ゆとなしに教ゆれば。月益顔を振上げて。川勝をつくく見て。スエテ暫し涙にくれけるが。詞扱は音に聞く秦の川勝殿とや。夫の島主出陣の時申されしは。敵陣に人多けれども心にき弓取は秦の川勝。いで一軍して押並べむづと組み。搦めらるゝか搦むるか。川勝が首ならば人手には渡すまじ。又我討死と聞くなれば。首は川勝が取つたりと思へといひ置いて出でられしが。地敗軍の勢を喰留めんと味方を勵まし深入りし。多勢を引受け思ふ様に切散らし。天晴見事の討死とは聞きしかど。命の中に川勝といふ武士の顔。生けてならずば首なりとも聖德太子の御旗下に。一度はつけて見せんと。詞もあだに軍場の苦の下なる白骨まで。さこそ無念にあるらめと。今顔ばせを見るにつけ情の詞を聞くにつけ。いとしいは我が夫と。覺えず我が身をどうと投げさけび。臥して歎きしが。詞なう川勝殿。各一所の人質我獨り助かり。此の命何にせう。夫の忘れ形見政若都賀若とて。十五十三の二人の子供母が憂身を悲しみ。おめくくと守屋殿へ降参し二心よ卑怯者と。後指をさゝれ親の

名までくださんかと。地案ずるは是一つお情には一番に。此の月益が首切つて高々と獄門にかけて下されかし。兄弟の子供に見せ母の恨父の仇。君の敵と一心に無念に無念の義を勵し。子心に勇みを付け。詞鬼神も欺く守屋殿の眉間に鏑矢の一つも射かけさせ。地小腕の小太刀も切りかけさせ。でかしたり健氣者。親も親子も子なりと。世上の褒め者冥土の父の魂魄を慰め。武士の手本となる體を。獄門の木より見る嬉しさは數ならぬ母が露の命。百千にもッシかへられうか。地お情には川勝殿。早く命をめす様に願ひ申して下さるが。なう御恩ぞやと打ち口説き涙に咽ぶ哀れさよ。かけかまひなき伊美の武士もッシ感涙催すばかりなり。地すぐりし如き烈女どもさしもの守屋ほつとあぐみ。よし〜是非の沙汰は重ねて則ち秦の川勝。並に弓削の廣海兩人に預くるぞ。志紀の山館に移しこめ。大臣高官名ある者の妻なれば。番の者も禮義正しく敬ひ。藝者の盲法師など琴琵琶花鳥慰みは望み次第。酒など勸めて女心を煩すな。病氣には醫師をつけ能々痛はれさりながら。夜廻り等厳しく出入の人を吟味し。晝夜の番忘るな。若し奪ひかへされては我が一生の恥辱。汝等が越度用心油断すべからず。詞是女子達。死罪の日限も程あるまじ。此の逗留暫しの間慰みでも食物でも遠慮なしに。地好みの物望んで随分活計活

計と帷幕の。内にぞ入りにける。弓削の廣海したり顔に罷出で。詞山館迄も二里の道申しても大事の科人。道の用心急度搦め申すべきが。牢輿に繩網かけさするからはしばるに及ばず。地いざお次へ立て牢輿にと。いはせもあへず月益くわつと色をかへ。詞人質の我々を何科あつて科人とは。其の科の品を聞かん何れも大臣公卿の御臺。此の月益も武者大將葛城の島主が妻。見苦しい鳥獸の如く。繩網とやらかけた乗物乗り様知らぬ。道の用心氣遣ひならば桎械格でもさゝばさせ。地其の分では此の身が金輪際迄にえこむとも。いかな爰は動かぬとはらく涙の目を見合せ上藤達一様に。膝を固めし張肱はッシ苦々しくも哀れなり。地川勝取敢へず御尤御尤。詞是は廣海詞のあやまり。科人などの如く牢輿には。めさせられじと申すことを粗相千萬。川勝に御免下さるべし。折ふし陣中御車は出し衣の用意なし。見苦しなから少しの道張輿にめされ下されかし。地お輿添ひもはかぐしからず我等兩人馬は引かせ申せども。歩にてお供仕らん。詞御馳走役承るも恐れながら。御縁にや御用あらば何事も。地御家來同然に思されよと色代して述べければ。月益につこと笑ひ顔。詞是はまあ〜御念入つたお詞。いはれぬ女の仔細らしいとお笑草。これも夫の名を惜みての申しごとお歴々を歩驟で輿添とは憚りお役目

の警固ならば兎も角も。地鐵の鎖はのがるゝとも川勝殿の心ある。情の繩に搦められ逃走る道もなし。何になりとも乗せられて只御苦勞ない様に。いざ皆様お立ちと會釋して。一度に座敷を立出づる。男も女も意地一つ。たとへ網代の車より武士の詞ぞ玉の興心に。乗りて三重歌よそには知らぬ。飛鳥川。淵は瀬となる人心。雪折竹の一ふし唄ふ。フシ聲のあや。調べ合せし三つの緒を。何に譬へん軒の村雨さゞめごと。スエテ彼の白居易に泣かせたき。フシ浮世の外の山館。地秦の川勝弓削の廣海預りて。女中の心痛めじと。聲よき替女琵琶法師など召入れて。オン氣を配り痛はれども扉の外面は亂杭や。馴れし都は近けれど。千里を隔つる二重垣。長持今日は漢宮の人にして明朝胡地の妾となる。思ひを爰に籠鳥の。慕ふ雲井は遙かにて。近付くものはフシ最期日の。影も短く暮れかゝり。番所の火鉢吹起す。風より外に出入のフシ人を嚴しく咎めけり。地表門より時の拍子木ちやうくくと打ちたつれば。中門の太鼓數にこたへて打合せ。七ツの切の札改。外より入來の人々早出でられよと呼ばはれば。盲法師の辰の市。歩む疊に目はあれど。けつま月夜も闇の夜も。晝ともなしにさぐり足踏かる足の又明日と。出づる所を武士ども兩の手をむづと取り。詞懷中改め御制法と。ぬつと手を入れさがせどく懷寒く。

地鼻紙薄き氷砂糖。寒晒し痰切生薑。詞聲の藥は身に相應。書いた物は持たぬか。書いた物があらば是へ出せ。それは迷惑書いた物はござれども。すんど古い地木綿々々御免々々といひ捨て。とほくとほくと歸る跡からフシ又とほくと。地川舟といふ替女が手引きくと呼びこがれ。出づる所を引つとらへ。詞いつもの通り吟味すると。手を押入れる懷も。匂袋鼻紙袋。中に撥柱琴の爪。斯様の物は構ひなし。此のふくさに包みしは書いた物でありさうな。ア、姫ごぜにざんない事そりや書いた物ぢやない。我でに探つて抜いた物。地眉をぬいたまゆ綴とフシ口がしこくもいひすべらす。地金柑頭の典藥佐伯の元享齋。詞ヤ川勝殿廣海殿櫻戸御前の血の道。かるいことく藥一服調合せず。替女座頭に一曲彈かせ。忽ち本服いたさせし。是が老醫の機轉の療治。右の手の三脈が三下り。二上りにびんくしたる地見立てなりと。笑うて通るを兩の袖口しつかと取り。詞誰によらず懷中改め上意なりと。懷さがして是々此の封じ文誰に頼まれ誰への文ぞと咎めける。いや文ではない咳氣の療治の藥代。捻つて見ても知れた事。上書に咳氣の證據。銀子三兩十二匁九分くと。地關をのがるゝ心地して。面々に札合せオクッ残らず歸れば門々しめ。フシ奥に女中の。看經の。スエテ聲々細き燈火の。影に二人の預りも

心やすまぬ晝夜の勤。フシ眠り催すばかりなり。詞何と廣海殿。弓矢にたづさはるもの。死後に名を上げるも一つは女房の心にあり。打揃うたる女中のけなけさ。別して月益御前の操といひ利發さ。あれに添ひし島主ならばと奥床しうはおほさぬか。それにつき月益獨り小歌も聞かず引籠り。氣色も勝れぬ面體。重らせては貴殿我等の不念。ちと容體お尋ねなされといへば。廣海物怪顔。ムフいや、拙者は先度牢輿に繩網かけうと申しやり込められ。氣の取り苦しい女房。又詞とがめにあへばこは物御免あれ。地然らば我等と踏みしたく。袴の裾の長縁つたひ障子の前にこわづくり。詞何れも氣鬱なき様にと。主君より念入れらる。地御心晴しにとあくる障子に影はさゝねど書寫す。御經に心すむ月益御前筆をとめ。詞扱々何かのお心遣ひ氣のつまる事もなし。是は爰元では御法度。法華經と申して諸經の王。夫島主菩提の爲百ヶ日迄に書きたてんと。急ぐ程猶筆廻らず。炬燵はなし手はひゆる。なんと申し。それへ出て火にあたる事はなるまいか。お道理く式法なれば御近所に爐はきられず。地いざく是へと伴ひて炭つぎ直す埋火の。あたりは春の心地して。フシ涙の氷解けぬべし。地ハアお二人左様に飛退いて私一人あたるも迷惑。女の側との御遠慮ならば此方こそと立ち歸る。それは結句迷惑。扱々お

構ひなさるなと袖に取付く川勝が。手を袖ともにじつと取り。詞申し斯う袖を取りかはせば昔が思ひ出さる。島主殿と我が中は常體の夫婦でなく。互の戀の様々。其のほれ始めは私が心一ばい筆に染め。先づ此の様に袖をとられた。をりに幸ひあつちの袖へ彼の文を。地まつかう入れたと誠の一通川勝が。袂に入るればはつとして何かなしに突戻す。又押入るをつき戻し。詞ナウく寒氣の節濡咄地所望に存せず。ひあがつた。フシ火鉢に仕らんと寄居たり。詞いかにもいかにも戀も無常もおもしろからぬは人の身の上。さりながら聞くも形見語るも形見。耳の役に聞いて下さんせと。地詞遣ひもやはらげば廣海何の氣もつかず。さらば我等も耳の役とすべりよる。火箸手草の火ぜせりして。詞ほんに此の火に焼かれう嘘はない。私は始め禁中に宮仕へ。島主殿はもとより侍所の勤。二十一の元服男私は十六。傍輩の上藤中藤御格子過ぎて局。毎夜々々の男穿鑿ア、羨しい事かな。あの男に文が一つ付けたいと。思ひの数々書きくどき。常に肌を放さずおつかなくサア爰ぢやと。思へば傍にきつとあまのじやこ。エ、面倒な。あまのじやこのない時節をくと。天から降る時節を待てば雪も降る。師走は内裏も餅搗。千石。萬石。ソレヤ上藤を白へ入れうと。仕丁どもが杵持つて追ひかける。まだ十六の目からは

大きな杵がこはうて。御殿中を逃げ廻り御番所に彼の人が。ちやうど此の川勝様の様にして居る所の袖の下へ。まつ斯う顔をさしこんで。袴腰にぢつとだきついた其の時は。白も杵も打忘れ。ぞつこんたへて其の嬉しさ。底の眞實は知らずに。淫奔者と思はりよかと。恥かしいと嬉しいと汗はひつたり。肌につけた文が。濡れぬ先にやりたけれども又そこにもあまのじやこ。エ、辛氣なあまのじやこがあら向くかと思へど。爰を大事と見つめて居る。あれくくく。あそこに餅花。それくくく。そこに餅花。したり。くく。しだり柳に櫻花。花に鶯手ふり鶯。聲につき手につききよろくする間に。文を袂にやれば戻す戻せばやる。ハテ讀みていやならそつちで引裂いて捨てたがよいわいの。拜みますく。地拜んでもせがんでもふみ返すは丸木橋。いやともおうともいはば岩橋しつかりと文渡して。詞ア、嬉しやと思つたが戀の事始。地胸の思ひの煤掃は昔咄。今は引きかへ此の世あの世の年こし。語る我が身は炭より先に焦れて灰になりさうなと。語れば川勝すまぬ顔。廣海は猶合點せず。かわいやそばに居たあまのじやこ。口へも入らぬ餅搗き囀が。フシ鳴らうと笑ひける。地表門より呼びつぎく君よりの上使ありと呼ばはる聲に。月益奥に駈入り給へば河邊の何某使として。詞是々廣海守屋公急々に仰付けら

る旨あり。夜中ながら早々出仕あるべし。跡は川勝用心油断なき鎌にとの仰なりとぞいひ渡す。廣海謹んで夜中急の御召片時も猶豫なりがたし。いざ直に御同道川勝殿。御番所渡し申した。地馬に鞍置き郎等跡より追付けと。袴腿立取敢ず夜半の鐘の聲送る。フシ風を追うてぞ急ぎける。川勝番所に只一人つくくと思案し。詞今宵俄に月益我に戀慕の仕掛。此の文懐に押込んだる心入れ一圓に心得ず。此の女猥りなる者にあらすどうでも仔細あるものと上書見れば丸かなに。かはかつさま。ム、うへはわざと戀の文内に大事を地書いた物と。ひとりうなづき開く文假名美しく眞字まじり。先づ筆たてに。詞よとみたかかはこひはかと。地書初めしより終迄。大和言葉のひんぬき上々の痴話文。見れば見る程我方へのぬれ文。奥書に一首の歌。詞恥かしや身はさかさまの戀衣。打ちかへしては哀れしれかし。川勝はつと興さめ呆れ果て。書いたりく畜生女。見る目も。汚れ取る手もいまくし。見下け果てたる女め。地此の川勝をなぶつてかあなどるか憎くいやつめ。此の文面へ打ちつけうか引裂いて踏みにじらうか。それも結局情もし。諸人に見せて恥か、せん。斬つても捨てたき女めと。フシ獨り腹立ち居たりしが。地庭の高舞めつきくと破る音。すは盜賊か忍びか。袴の紐も時は何時夜中過ぎ。外からは貧

の盗人内には戀の歌。扱ませ合せて事やかましと。獨言して帶しめ付けて高からけ。心かけ置く身のかため。筒の火かい込み縁をおるも音せじと。庭の木の間をさし足してつまりく切りやぶる切先。ヤ死に、來たる不運者と。燈火そむけ提灯ふせて待つともしら刃の山刀。非力と覺しくやすみく切り音も。めつきめきく。きれもきれたりさへり。一間なんなく切りやぶり潜る形は星の影。明らかならねど十四五ばかり。十二三の丁稚兄弟らしく太刀かたなの指こなし。只者ならぬ身の取廻はし山刀そつと捨て。耳をすまし囁き合ひ。息を呑んで足音も。渚の鷺の小鮎を覗ふぬき足して。縁際近く寄る所を。くわつと上げたる筒の火も。明たる川勝が眼ざしは子心に。猶すさまじく馴ふるひ。怯氣を見せじと踏しめて。ッシ睨みあうて立つたりしが。詞兄様エ、口惜しい。本望は遂げられぬ。地是非に及ばぬ何とせん。是迄入つたる思ひ出。母の顔一目見て。切死にせんサア來いと飛んで入るを。待てと一聲かけられて。あつととまる兄弟が。ッシ心の内こそほいなければ。川勝覺えず涙を浮べ。おこころは葛城の島主が子供よな。母を奪ひ助けんとの一器量。島主が悴とはいねども明らかに。砂の中の金とは汝等が事ならん。よし川勝が腹切るとも。目を眠つても本意を遂げさせたい場なれども。

奪はせぬが親子の爲。朋友信あるの道なるぞ。此の母ながらへては大悪事を仕出し。不義五貞の悪名を取り、人並の死をせず。子供の名を捨て死したる父が白骨にも。恥辱を得るは目前。その儘置いて守屋方にて刑罰に死したる分は手がつかず。無道の母を思ひ捨て。父が武勇の名を繼ぐこそ孝行者よ。地相役の見ぬ中はや歸れ。兄弟が骨柄島主に見せたやなエテ残念さよと涙ぐむ。詞兄政若發明者卑怯なり川勝。誠や御邊は一度帝の御味方に參らんと。我が父と堅き契約あるよし。士たる者の詞を違へし面目なさ。母にあらぬ難を付け。世上の訕をふさがん爲の偽りな。サア。證據をあけて母の悪事を承らんと氣をせいたる。ヲ、子供相手にいふもあさましながら。打見るより大人しし物の道理は知つたらん。總じて女は二人の夫に見えぬ法。然るに島主が忌中殊に人質擄の身。預りの此の川勝に戀慕し。艶書を袖に入れ。人前も憚らぬ見苦しき行跡。いふも中々いまくし。地物も書くらめ母の手も知つたらん。はおふくろの痴話文御覽なされと投出す。ヲ、母の手知らいでよいものか。詞なに上書はかはかつさま。地ナウ都賀若慥かに是は母の筆と。頂かせ頂きて。ッシ開く心ぞ無慚なる。それぞ大和詞の戀の文。とつくと讀めとつくと讀めと。いはれて巻返し繰返し。讀んでは巻返し。ナウ都賀若。悲し

や母様氣が違つた。天魔のみいりか口惜しやと。兄弟膝にもたれ臥しあたりも。恥ぢず泣き居たり。調ヲ、道理々々口惜しい筈悲しい筈。斯くいふ川勝も一度は御味方に參らんと。父島主との契約。時節がな來れかし人質の上藤達を盗み出し。御土産として參内せんと。折を待つ今宵しも此の文。扱こそ催促の文よと披見せしに。案の外とも興さめて手を打つて詞なし。川勝が御味方は大丈夫の義は缺けて後家と密通の好色故と。評ぜられんは弓矢の瑕瑾。よし人は知らずとも天地が明らかかなり。地我が心も清からず。母が不義の心一つで契約違へし。フシ残念さよ。地島主が亡魂あらば冥土より手を伸べて。討ちも棄てたかるべし無道の母を思ひ捨て。家の武名をきよめよ。フシはやく歸れと制すれば。詞いやく一家一門の恥辱。川勝殿の御加勢を妨げし大悪人。地島主が名代と名乗り。削打して冥土の父の怒りを休めん。そのき給へと駈込む所を。ヤレ爺忽すなと帶を攫んで止むる間に。都賀若先へつゝと抜け。障子引明け母を見るより刀ひん抜き。人でなしの母様父上の名代と削打に四つ五つ。小腕まはつて肩の口三寸ばかり斬込まれ。うんとおれば政若。走りかゝつて弟が刀ひつたくり。調侍の子と生れ削打を仕損ひ。なぜ母上に傷を負うせたうろたへ者め。地削打の仕様教へんと。弟の脊骨疊みかけく

て打つ刀。母は朱に染みながら。縋り付きもぎはなしスエテ涙に。くれし目を見出し。調ヤイウろたへ者とは己れが事。爰はどこぞ敵の屋形。守屋退治の御陣に槍一本の御用にも。立たうと思ふ所存はなく母親獨り助けんとて。地垣を破り忍び込み命は幾つ持つたるぞ。父母が生み付けし命は只一つ。うたてや情なや。生きとし生ける者には一色づつの役あつて。鷹は鳥を取るが役猫は鼠を取るが役。三毛の唐猫も獵せぬは鼠取らずといふ。武士に一つの大役ありなんほう親に孝行でも。忠義と武勇を忘れては。鼠取らぬ猫同然。調おねし達が母いといひ母かはいと思ふより。父御前がおねし等をかあいうおほしきめれたは。地百倍千倍まされども。其のかはい、子を振捨てめざましい軍の討死は。武士の役目とフシ知らぬかや。調親の子ならばなぜ親の眞似はせぬ。兄弟爰で無駄死し家の氏は誰が継ぎ。武家の役は何とする。地斯くあらうと思ふ不便さに疑の立つ文も書く。若し落ち散つても艶書は我が身獨りの不義と。調戀の文に書きしかど二色の讀み様にて。子供の方へ送る文。地届けて貫はん爲なれど戀一色に讀まれし故。母は一生の仇名を取り。我が子の手から削打受け。斬られし刀の疵よりも子供に當る天罰の。悲しさよとかつばと臥し流るゝ血。紅白粉やもろこしの涓流を。袖に湛へたり。地川勝黙して居

たりしがからく」と笑ひ。口がしこい事いうたりく。文一通に二色の読み様とは人をたぶらす抜け言葉。某不勤といへども假名文讀まぬ程の旨でもなし。地違うたか違はぬか子供を證據に聞かせんと。高々とこそ讀みにけれ。よどみたか。川はこひわがこひしとは。のりなしぶねはいとよおもふ。家のりなしぶねとはふい後なれまとうにとひなびけ。見ぬたもとしにたき。なさけとをののこひやみか。どれなひすむなせつひは子や。おとこかりたふつたへもつたへ。エしたたるしあるけまだぬしはうとむかわれらしんぞおきふし。ひこそおなごのちのよろこび。たゞしたひもをとくとくかしく返すく一首の歌。恥かしや身はさかさまの戀衣。打ちかへしては哀れしれかしかはかつさままゐる。サア此の文章は浮の空の痴語文。若し又別の讀み方にて。子供に送る實の文に極らば。地契約の通り川勝御味方に參るべし。一字も違はゞ不義者に極る。一生一度の大事。善惡の境サア承らんと打ちつくれば。詞されば此の一首の歌。身はさかさまといふ事にお目が付かねば是非もなし。直に讀めば戀の文。さかさまに讀めば子供の方へ送る文。地宛名も政若都賀若。二人の名を一つにして。詞川勝様をさかさまにして讀み給へ。地まさつがわかではッシあらざるや。地筆の始めはとめとなり。とまりは筆の始めとなる。文章つゝかすくだくしく。はなれくの詞に含む親心。聞し召して思ひやれとて。ヌエテ涙乍らに讀み給ふ。地オンくどくどおもひだし。たゞひごろよの。ちのこなをぞッシこひし。ふぎをぞんじらればかんだうはしぬ。詞へだつもへだつふたりがこと。おやはいつせなむすびなれど。かみやいこくのほとけ。さなきだにしもたぬみ。けびなひとにうとまれな。ふほをとゝいは。ねふしなりのいとしいこ。地かはひこはゞがかたみとよ。地兄弟も打ちしをれ。川勝もびつくりと女の才智の働きに。始めのにくさ倒のッシ文詞こそ哀なれ。ナウさかさま文字もすぐさまに。讀めば直なる親の慈悲。是が母がいたづらかとわつとさけび伏しければ。ゆるして下され母上と。兄弟左右に縋りつき。涙あらそふ親子のさま思ひ。やるさへ。哀れなり。地川勝は飛びしさり。詞及ばぬ智慧を定規にして。人をはかりし誤り。悔いても返らず川勝が今の禮。地人がらは尊ます月益御前の本然の智慧を禮し候と。三度頭を地に着け大首上げ。詞葛城の島主と。秦の川勝が契約金石の如く。只今より守屋を捨て天皇太子の御味方。證の爲人質の女中達一人も残らず許し申すと呼ばはる聲。地人々寢耳に水を得て網代を出でし淀鯉の。淵に躍るが如くにてッシ悦び給ふぞ道理なる。地門番下番騒ぐ所に弓削の廣海大息ついで。詞ヤアく川勝。人

質皆々此の曉。首を刎よと仰せを蒙り歸る所。地腰拔侍かへり忠。遁さぬやらぬと刀のつかに手をかくる。其の手を取つて打ちかつき横投にどうと投げ。詞脊骨を膝にひつしき。かへり忠とは舌長。普天の下天子の味方でない物誰がある。我代々の所領の内。縄尺寸の守屋が年貢地まじりしゆゑ。是非なく一旦守屋に従ひ。我が軍配にて澁川の勝軍。是で年貢はあまる程はかつてしまつた。遂には佛法王法の御味方と。島主某勇者と勇者の契約磐石より猶堅く。父入道が中陰位牌二つに打割りて。繼合はする時を期せんと約盟。身を放さず是にありと。地まもりに添へし錦の袋位牌の半片取出せば。政若父が遺言我も身を離さずと。肩にかけたる小包より又片割を取り出し。寄せたる割符の位牌金泥の文字ありくと。孝心忠心漆となつて。ッシ離れず合ふこそ不思議なれ。詞おのれ一命は助くる。川勝が詞守屋に屹度達せよと。地はや繩にしぱり上げおつたつれば。門番下番道を開き恐れをなす。月益親子人質の人々誘ひ出づる日の。かけはれやかに世を廣く。心も廣き女の才智。勝鬘夫人は大王の。一通の文を得て恒沙の衆生を濟度あり。月益御前は一通の假名文に。佛法の味方をひく一つの文は二つに讀み。二つの位牌は一つとなり。一乗一味の法の花種あり實あり好みあり。武勇の種も有明の月益が。筆ぞ教へなる。

第四 芹摘の後道行

花鳥にいひならひてか。音には鳴く。梢離れて散る花も。皆天地を旅纏にて。習はで物ぞ思はる。スエテ馴れし雲井は隔たりて。さきにはあての土も木も。皆我が夫の物なれどしのべは心おく霜に。白き脛まで赤らみて。まだうら若きッ芹摘の。歩みかねたる爪先を。手に息吹いて玉鶴があたゝめなづる引立つる。氣負を道の力にて。オクリこがれ行方ぞ。はてしなき三笠の山は。ありながら。眉の下ふる時雨には。さすが女の袖と袖ぬれたなりとぞと人や見ん。小袂りしく。ッ引きしめて。君と寝る夜を眞土山。我は夫もなきわたる。長地蘆邊のたづを玉鶴と千歳契りしかひもなく世は偽りを耳馴れて。誠稀なる神垣は三輪の社の印ぞと。ッ過行き。がてに手向山。額づきながら御后見上げ給へば。歌峯の紅葉は。草葉にかゝる。野邊の。錦は誰が。着るぞ。ナホス我も故郷にひるがへし。ッ袖ふる山の。うらやまし。往來の岡の松並みてオクリ人目も。しける葉も茂るオクリおもはづ。かし。暫しとて。笠傾けて眞直な石に助くる道疲れ。そなたの方を見給へば日影うらなくさえ渡り。磐につれたる木魚の聲。スエテ殊勝氣に修行者

の。〇〇なんむしいはんきろつうきやたいついたいふいおみとふなんむくはんつういんふさ。なんむたいせいつふさなんむおみとふくくとふくくとフシまめやかなり。地是ほどにいき筋はつて申しても聞えぬか手の内も施さぬ。但詞が通ぜぬか。阿彌陀といふたらひからうし。ぞくの釋迦よりかるたの釋迦を握りつめた世の中。大かたでは手放すまい。分別ありと打領うちりょうき。鉢鉢々々キ釋迦はすき。彌陀はほしがる一錢を。投げぬ人こそ哀れなれなもふだくなむあみだ。誰か財布さいふのひほをとかなん。できたけふからは々と。フシ笑ひをのんでぞ通りける。△地玉鶴立寄り釋迦も阿彌陀もおすきとは、浅いやうで深いお勸め。お殊勝に存じます。一包の志恥し乍らと差し出せば。鉢鉢々々キテ、御利發おりにはつな上藤や。貧者ひんじやの一燈萬燈もしんどう思へばむそくする。かう見た所かたぐは、卑しからざる生育おひたちち。何處どこから何處へ行く人ぞ。フシおほつかなしと問ひければ△地しほらしいお尋ね御出家なれば太子の御事。〇詞ム、云はしやるな人も聞く。御身の上はかくれなく。世間の噂に聞きました。愚僧ぐそうも申さば太子の弟子。お師匠のおかさまである。地心やすかれかくまうた身は鉢鉢びらきのまうけなくとも。太子には御意得たい用もあり。御歸洛の折までは庵あんにござれ人も通はぬ山住やまぢの。淋しいは御ふしやうと。〇△無二の詞に力を得フシ

是も佛の引合せ。今日の今見て今の中に。馴染は日數ふる市の里を南に横折れて雲の絶間のゆふづく日。立留たちどまりりては呼び交し聲は梢に山彦やまひこする。フシ山のかけぢは。いざくと背せなさし寄せて姫君を。負おふは優曇華うぜんげ法の道。鉢鉢々々キ彌陀十劫に正覺しょうがくを唱へ始めて三界の。衆生を助け誘ひし昔も今に似たるぞと。問ふも答へも黄昏こよがれに連れて。庵へ三重々雪霜と次第月のめぐりをしるべにて。く。日の行く。御空尋ねん。地然るに入唐渡天にっとうてんといつば。佛法流布ぶつぽふの古跡を見るそれさへ難し夢殿の。外をも夢と御覽じて夢も現も一如いごとぞと。見ひらき給へば天上も。下界も爰に遠からず梵天宮ぼんてんぐうへと行幸みゆきなる。傳法救世でんぽうきうせいの御慈悲心ごじひしん。忝かたじけなくしともフシ有難し。△地七部の大乗御肩おんかたに老せぬ駒の道しるべ。御馬副おんうまのたもとには調使丸てうしまる明暮御馬めいぼおんうまの口取りて。日本めぐりの嶽たけ々の。富士も筑波も眼の下に。もゆる浅間あさまのあさまにも。谷の小川の煙りかと比良や横川よこがわの花曇り。見おろすフシからに一かすみ。つたへ聞くさへふりし世の竹杖たけぼうしひとつ橋として。月の都に入りしとかやオクリためしを爰に引く手綱てづな。フシりんりんりん。響く響こたけの音ならで。鳥の鳴く音も絶え果て。フシ駒のなづまん草もなし。かつしくと歩あゆませて。行けど果なき岩が根に。玄冬素雪げんとうそせつの寒風かんかぜは肌はだをつんざく所もあり。流るゝ汗は醬こんじやうをなし夏より暑き所もあり。ホフシ虹を産出

す。山の腹時雨吐出す谷の口。いかなる名山高山とも名も白雲にとちられてオクリおほろ。く
 フシ おほろが中の。瀧の音。飛瀧直下三千尺。其の水上に駒とめて。いざ水かはん天の川星
 も。手にとるばかりなり。○調使丸口をひかへ。今迄君の御供して御馬を雲に飛ばせ。峯々
 嶽々残らず見ては候へども。地斯る峻岨不思議の御山行先猶も覺束なし。還御あるべう候と御
 馬の口を引返せば。○詞是こそ須彌の半腹大梵天に行く道なり。地我攝州難波の里に。大伽藍建
 立の心有り。されば梵天王宮の宮殿をうつさん爲。梵天宮に登るなり是より凡夫の身は叶はず。
 一先づ歸れとの給へば。△調こは情なき仰や候。高麗唐土の果迄も形に影の調使丸。地上は有
 頂下は奈落の底迄も。何しに離れ申すべき御馬は畜類いかなる荒凡夫も。畜類には劣るまじ怨
 めしの我が君やと。スエテ怨み。涙は頻なり。○いやとよ馬は觀首の部衆。雜阿含經にも四種の
 馬を説かれ。六波羅密の功德にて。畜類なれども菩薩の行。悉多太子の初發心舍匿童子をかへ
 されし。例は音にもフシ聞かざるや△地いや。舍匿は舍匿調使は調使。昔は昔今は今背かば背け
 御心にと。歸らん氣色風吹く。フシ山路に座を組み居たりけり。○地汝愚かにして天上人界の隔
 を知らず。目を閉ぢて東に向ひ禮拜せよと。御身も共に觀念あれば。△地御方便を誠ぞと東に

向ひ合掌の。隙を御覽じ一鞭くれ。あふりを打てば飛ぶ駒の數千丈の谷を越え。松にかゝれる浮
 雲にオクリ法の。威徳ぞ不思議なる。△地眼を開き大聲上げ。スエテ前後不覺に歎きしが。地太子に
 捨てられ獨歸りて何かせん。此の谷に捨身しせて未來の御供と。既に斯うよと見えければ。
 ○地御手を上げて待て暫し。不便さよいとほしさよ。愚かなり汝太子ある事を知りて都に后
 ある事を知らず。調守屋が蜂起五畿内なかば同意して。覺束なきは是一つ。地とくく歸り緋
 の衣を印にて后をみつぎいたはらば。今の供には勝るべしそれとても聞入れずば。太子と思ふ
 な調使とも思はぬと。威しの詞御涙初秋中の五日には和州太峯蘇莫闍が嶽に出向へ。主従の縁
 は朽すまじ暫しが程のさらばぞや。さらばくの御名殘。△やうく耳にとどまりて形見の御
 衣を太刀にかけ。御返事はなくく見返り見送り振りかへり。嘶く馬の聲も涙の雨に。音そ
 ひてオクリ歩み。○も峯ふりし。フシ松の梢に。地御馬をひかへ。願はくは五乘三乘七方便。
 諸天諸神加被を垂れ。我が大願をなし給へと一心不亂に合掌あり。時に孤雲に茜さす日輪月輪
 耀々と照りわたり。光明も塵にまじはる和光をひらき。△日輪には珊瑚の樓閣。月輪には水晶
 の樓臺現然と。二人かつらの夫婦形を現し。あら珍しの御幸やな。我々は朝な夕なく禮

拜法味を受けたりし。日天子月天子見覚えすや在すらん。大伽藍建立の念願天に通じ。誘ひ参れと天帝の勅によつて。我々迎ひに。フシ來りたり。地此の白雲のあなたこそめでたき梵天王宮なり。されば梵天には。諸天の宮殿樓閣を一々に繪に寫せし。二萬由旬の卷物あり。是を拜してよく覚えば伽藍建立すみやかに成就せん。疑はず誤たず信心功を積むべしと。宣ふ御聲の芳しく薫じ渡れる嵐となりて白雲さつ。くくくと吹拂へばあれ見よ梵天。宮とぞ三層

梵宮伽藍の卷

あらはれしフシ添くも。梵天王。玉の冠玉の杳。瓔珞細軟の御衣芳しく。二人の侍者に圍繞せられ。詞此の一卷は二萬由旬諸天の伽藍を寫したり。地是へくと翻へし招く袂や卷物の紐。左に解廻る天の形のありくと。迦陵嚩迦の聲音を並べエテ繪解あるこそ。殊勝なれ。地先づ地形は東に摩尼山。六度萬行波羅密山。前に法性無漏の海。カカリ隨緣眞如の。波は打つとも騒がば騒げ。彼の岸に。寄せ來る船は。フシ絶えせじな。萬歳四方の四門は四王天の樓門にて。多聞持國。增長廣目。降魔利劍のたる木端。佛法擁護のうつばり。斷惡。修善の四足を。つきかためく。世界國土を。フシ守らせ給ふ。地切利天にくわくと。時の鐘鳴る六時堂。生滅々已

に日は出でて寂滅爲樂に入る日影。フシ八色五色の大蓮華。石の舞臺や舞人のかざしの舞樂樂變化。諸天の中に兜率天内院の講堂は。摩耶夫人の淨土ぞかし。されば女人の五障のこほり消えてながれて。フシたえずたうたり。つがひの龜の。すむ水は阿耨達池の流れと知れ。流れ流れて。フシ雲水の。塔の高さ五十丈。黄金の寶鐸白銀の風鈴の聲は。罪障懺悔のひゞきあり。フシ九輪九曜九會曼陀羅。非想天の廻廊非非想天の廻廊は。ア、くくくめぐりくくして百八十間。煩惱のねぶりなければ夢も破れてさつくと。雲ふき。拂ふ。フシ無雲天。大金堂は是にあり。誰かは色に移りそめ。色界慾界愛着。戀慕の。フシ愛染堂。萬の願ひ庚申。帝釋天梵のう天。海の寶。山の寶。珍菓珍寶二つの御藏にこめて。只何事も。フシ世の中を。心に任す自在天ネクリ四禪。天には四石あり。其の外是より四十九院の別所にて。普門輪藏多寶堂引聲堂萬燈院。三光天には日の本の神の本地千早振る。十五社の宮殿あり。凡三十三天。天人天上の宮殿樓閣。玉の階瑠璃の扉。地珊瑚の欄干瑠璃のこじり。金銀水晶いろえたて。くたる大伽藍見るとも。聞くとも盡きすまじ。本土に歸り法華經の三の卷。化城喻品を拜せよと教へ給へる御聲につれて。たちまち金字金泥の。偈頌の文とあらはれて。フシ光明天にみちくとたり。地太子

歡喜隨喜の淚潤す肩におひ給ふ。コハリ大乘一軸拔出でてくるくくくと紐とけて。卷頭卷軸大空にさらくく。天の浮橋鳥鵲の橋ナホス末世に是を經橋と三重夕日に向ふ虹のはし。コハリ即神即佛經一體。駒の蹄紫磨黄金。神通如意の駒に手綱をくりかけ。ノノゆるがぬ天の經橋をオクリしづくしつと乗りさけ。乗上げフシ乗りおろし。晨朝の會に入り給ふ。コハリさてこそ攝州難波津の四天王寺は。これ。此の。大梵天の伽藍を寫し。末代濁世の今日迄も。日夜の參詣朝暮の勤行。老若男女諸共に梵天宮に入る心。神明佛陀は水波のナホス隔て謹上。再拜。再拜と。かざしの雲をふりわくれれば。異香薰じ花降りて。又くりかへし卷きかへす天の。告こそくもりなき。

第五

62 地雪霜も消えし昨日は昔にて。今日は音をふる鶯の。聲も嵐も勝絶に調べかへたる調使丸。太子の形見取持ちて芹摘の御行方尋ねん方のしるべきへ。フシなくく迷ふ山傳ひ。地白雲は月に映じ霞は松を友として。知る人得たる其の中に。露のあたひも消え果て。フシあしたは草の原淋し。地此の景色前は川水は緑に詩を釣るべく。後は歌人の風雅の山。見て居て腹もふと

63 るまい。いざ行かう向ふを見れば椎柴の。隙も垣に世を隔て。東受けたる明り窓軒に干菜の風そよぎ。見るノ食もありけなり。なんでもしかけて今の疲れを晴らさんと。門にたすみ片岡山の飯に飢ゑ。行き惱みたる旅の者。御茶一つの御無心と。いへども更に答なし。留守か但しは寢て居るか。戸を押せば開けたり不思議ながら内に入り。差覗けは半櫃二合。佛壇に無量壽佛の白毫の。スエテ光とがむる人もなし。ム、主は他參か珍重々々。したみして立ちのかんと内より門の戸はたと締め。心やすやと飯櫃かへあたりを見廻し。いかに人がなければとて青蓮華の眼より。盗喰ひしをるわと佛の御覽も面目なし。アレ頻婆果の唇が動くは。人に告げる氣か見ぬが佛告けぬも佛。だまつてござれと蓋押取り。調ヤアさつぱりと洗うてある。地エ、面倒なと櫃投げほり。詞是は又あんまりな何時人が來うも知れず。用意もせず何國へうせた。地外には何もない事かと。繰返し見廻せば。なまめく女の染小袖。フシ片襖もれて色めいたり。心得ず賤が家に斯る衣裳のあることは。調ム、讀めたく盗賊の住家よな。地用意には行きつまる。幸ひの事取りためた物あらばしてやらんと。蓋引きあくれればア、悲しと。叫ぶ女の聲につれ又半櫃を押明けて。出づる女のかひくしく調使丸にしがみつき。調お姫様を

何とする。地むざくとは渡さじと顔を見合せ。詞ヤアそなたは舍人の調使丸お前は玉鶴。あなは尋ねる芹摘様。地ナウ嬉しやと飛びしされば。スエテ二人は左右に取付いて。地そなたは權輿もなく人音がするならば。此の半櫃へ隠れよと。詞主の僧のいひ教へ。最前表に茶を一つと聲を聞くと逃隠れ。地探しやつたも見てるたが。見つけられずばよい物か。地太子様にも逢はせてたもと。悦び給へば調使も嬉しさ腹ふくれ。八杯やつたる心地して。自慢張肱高楊枝のフシ太子の下人とあらはなり。地おなつかしいは御尤太子は御願満足とて。詞梵天宮へ御参向たつて御供と願ひしかど。姫君に宮仕へは我に付添ふ同然。來る文月中旬に和州大峯。蘇莫閣が嶽にて迎ひ奉る御契約。地それ迄の御形見と御衣に取添へ。御はかせを差出せば。追付け御目にはかゝらうが待ちびさし懐かしと。わりなき涙。フシしみくと御衣の袂を絞らる。地調使丸さし寄つて。詞御家の亭主はどうした所縁。御介抱いぶかしと問ひければ。不審は尤誰に所縁はなけれども。佛のまねをする墨に衣をそめし人なるが。太子の御歸りあるまでは爰に忍べと。夕な朝な何から何迄世話にして。まそつと先に出られたが。追付けて歸られう念頃に禮いうてたも。地疲れもさごと落葉たく茶釜の沸り汲みかはし。色も花香も主従のフシ盡きぬ縁

こそたぐひなき。地群鳥の梢を立ち四方にはつと羽打つ音。驚き耳をすまして聞けば。五合無菜の下部ども門外につゝ立ち。中にも弓削の廣海大音上げ。詞此の家の主は居をらぬか。太子が一族芹摘の後。隠し置く旨注進によつて守屋公の仰を蒙り。我々討手に向うたり踏込んで召捕らうか。但し縛つて引渡すか返答次第と呼ばはつたり。地内にははつと立騒ぐ玉鶴あせつて。詞ナウ調使殿よい所へござつた。鐵の楯ぢやけな人ぢや。あそこへ行て切つてござれ。強い男と嚇つれども。あら勿體なやあつちは香のものがつちは糟味噌。切らるゝは膳の箸外に道はあるまいか。お供して逃けんといへば。いや〜道はない地どうせうと。三人よれどない時は文珠の智恵も徒に。フシ顔を見合すばかりなり。地門外より聲々に。詞返答せぬは曲者。地亭主め共に打殺せと。戸を打ちめがんとする所へ。主の僧かけ戻り。詞此の體をきつと見。一物もなき禪僧の庵室。盗みしに來う様はない。聞えた〜。己れらは死に來たか。地いで引導して取らせんと柱杖取りのべ打つてかゝる。詞いやさ守屋公の御意によつて芹摘を取りに來た。慮外せば捨坊主め。おのれが爲にもなるまいとわめき立つれば。ヤアやかましい主の威光を吠え廻る犬侍。棒をくらへと打つてかゝる。調使丸も力を得跡につゞいて薙立つる。そりや地調

使丸が出るからは太子も居るに極つた。注進申せと討手の勢。フシ跡をも見ずして逃散りける。地長追せそと立歸り。詞聞及ぶ調使丸とは和殿の事か。此の庵に長居は無益。聖徳太子も天上より歸洛あり。河州高淵にて天皇諸共。守屋退治の評議眞最中。地二人の女を誘引して駈付けよと。水に緑の影映る。蘆引きちぎつて水に浮め。とくく是に乗られよといひければ。詞ア、つがもない此の蘆の葉にどう乗られう。危い事をと斟酌顔。地知らずや人の世を渡る一生の危きこと。此の蘆舟に劣らんや。人々はつと感心し。眼を閉ぢて乗移れどゆらず沈まず大船を。フシ陸に置きたる如くなり。地芹摘御衣を手に捧げ此の一重の夫の形見。煩惱の手に垢づけども菩提の水にすけよと。被け給へば御殊勝。此の衣を身にふるれば聖徳太子に逢ふ心。さらばくと人々は川を半渡る所へ。詞守屋の大臣どつとかけよせ。アレく芹摘が川を渡るは射とれくと下知すれども。地矢の一本もあらばこそ皆立騒いでひしめく間に。逆まき落つる山川に糸もて引くやさ、がにの。くもの昔は柳の葉。あしは陸地を行く如く。フシ次第々々に隔り行く。詞守屋あせつて。芹摘を隠し置いたる削廻しはおのれよな。言語道斷不屈奴。睨み殺してくれんと立ちよれば身がまへし。御無用く。おのれが我を睨む中此の目をふさいで

見ずに居ようか。上を欺き下を虐げ。地世を亂す天罰地思ひ知れとはつたと睨む。兩眼はかくかくたり。地守屋ちつとも臆せず。イヤ詞此奴慮外者。犬めに睨みまけうかと大眼をくわつと見開く。法師からくと笑ひ。ヤア雛の様な目を持つていらぬ事おしやるな。地我は觀念際惜しと明心達理の眼を閉ぢ。御衣を被いで坐を組めば守屋の大臣齒がみをなし。地納め過ぎたる捨坊主め踏殺さんと駈寄つて。衣引きのくれば天地俄に震動して。コハリ半身丈六達摩の像。眼の光は射る矢に等しく。金色世界を寫すが如く。照り耀けばナホスさしもの守屋眼くらみ。わつとわな、き馬は大地に四足を踏込み惱亂し。焦け付けらる、有様は照りに照りたる大早魘。草の萎む如くにて。見かへれば又びつかり。命からく、三重逃けて行く地斯くて守屋の大臣は。稻村が城に立歸り士卒を集め。詞此の度の一戦我が首を太子にやるか。きやつが首諸共に一天下を我取るか。勝負は時の運なれども一つは士卒の勵みにあり。思ふ任せに近付けもらさず餘さず打殺せと。地頻つて下知をなす折ふし寄手の軍兵一同に。ゑい、わつと鬨の聲花を。散らして三重、戦ひける。地城中より弓削の廣海躍り出で。詞太子の方にてさる人と聞及ぶ跡見の赤檣秦の川勝はあらざるか。見参やつと呼ばはつたり。地川勝是にとす、み出でちやう

ど切るを受け外して。廣海が弓手の肩より馬手の肋へ打込まれ。のつけにそるを飛びかゝり首
 かき落し。事始めよしいざかゝれと引きかへさんとする所に。守屋遙かに此の體を見て丈餘の
 鐵棒片手に提げ。川勝めがけ馳せ來る。望む所と近々と立ちむかひ。一別以後久しう存する
 守屋殿。以前の好み人手にはかけ申さじ。觀念あれと嘲れば。守屋くわん／＼と打領づき。
 主に隙くれたる慮外者人手にはこつちも残念。サア地來い／＼と呼びかくる。跡見の赤擣南無
 三寶。川勝に先越されしと逸散に駈來り。守屋が鐵棒しつかと取り。御邊が首はそも／＼よ
 り入札は此の赤擣外へはやらぬと捻ぢ合うたり。守屋きつと見もうよいかと棒引寄せ。赤擣が
 腹帯ひつつかみ目より高くさし上げ。大地へどうど投付くれば。地宙にてくるりとはねかへし
 足踏み直してつゝと入る。川勝も後れじと。兩方より取付くをしつかとしめ。蠅虫めらを一
 疋や二疋捻殺しても何にせん。地生け置いて守屋が腰ひねらせて使はんと。すんど立てば政若
 都賀若調使丸。後よりしつかと取付く。守屋から／＼と笑ひ。サア取付いたかもうよいかと
 身をもぢつて引き寄せどうど押へ。入らぬうぬらが腕立一々暇取らせんと。既に危く見えけ
 る所に。聖德太子弓と矢つがひ棕の木の小蔭より。ひやうふつと放ち給へばあやまたず。守屋

が眉間うらをかいてはつしと立つ。智者は惑はず勇者は恐れず守屋二人をかはと投げ。矢を逆
 手に引抜いてきつと見草原にどうど坐し。詞コリヤ兩人。云ひのべたき事あり。地つゝとよれ。
 是へと招けば川勝赤擣何事ざうと立寄れば。詞ヲ、我が運命も是迄。此の矢は正しく太子が射
 たると覺えたり。矢幹短く鐵なく。殺さずして人を鎮むる。神通の鎗矢とは此の事。矢の根な
 ければ甲を越して我が身に立つべき道理もなし。地然るを斯様に裏をかゝせ心身甚だ混亂して。
 人の面も見事なし神武不殺の威におされ。神の冥慮に背く印。佛法を破却せんと思ひ立つた
 る五逆の科。積惡遁るゝ所なし此の詞を太子に傳へ。佛を敬ひ神を尊み寶祚を守れ方々と。太
 刀引抜いて我と我が首エイ。／＼とかき落し。怨敵亡び失せにける。コハリ時に不思議や音楽
 聞え守屋が骸の内より青赤の玉顯れ出で。空中に漂ひしが。諸惡莫作諸善奉行と金色四方にナホス
 輝いて。俄に降り來る法の花敵は味方に降下る。七珍萬寶地に敷いて國土安全民繁昌。佛法繁
 昌。伽藍を建つる壽命はのぶるいつ迄も。のべて盡させぬ君が代は萬々。歳とぞ祝ひける。

(奥書缺)

山崎與次兵衛壽の門松

(七行四十三丁本)

作者近松門左衛門

上卷

歌筑波根の峯より。落つる。龍の白玉。一二三四。五六七八。ナホス。フシ九軒の町に。地羽かはす。比翼の羽子板木藥子も磨入れては色になる。戀の二葉の禿松。フシ枝と枝とを遣羽子も。地三四いつも末ながき。返事に馴る、門の松。抱への松あり客も待つ先づ新町の初子の日。松澤山に深翠。千代も根引はフシ絶えすまじ。詞コレく新助。いやといふ物無理に突きやつてそれ見やの。羽子を松へ突きとめやつた。地元の様にして返しやと袖に取付く禿ども。ナウ詞取付きやんな男に突かすりや留るとは。頭から知れた事。地珍しさうにと振放し。手を拍いてはつほらほこちや知らぬ。あべかこの新介と走つて内へ駈込めば。そりやく、逃すな捉へよと。羽子から起る諍は。フシ飛ぶが如くに追うて行く。ハルフシ情口説の。萌出づる。雪間に素足伽羅薫る。霞の袂虹の帯。冷泉雲の。上着を。ゆりかけて。新艘突出し出立榮え。歌紺に鬘金に薄

染淺黄。織物縫物染物盡し。小紋三重染。二重染淺黄。鹿の子に彌鹿の子。紫鹿の子に經る年の憂さを。芥子の紅鹿の子。極彩色のフシ越後町。三筋に三つの。春立てば。松若綠梅時節。やりが前垂茜さす天も酔うたり人も酔ふ。初盃の内祝ひ。過ぎて諸禮の妓揃へ。フシ雪駄の音のしやらくと。地春めくうちに紫は色の司や藤屋が内。文地吾妻といへる名木の。松には續く花もなき。戀と惻發を目の張に。情こほる、道中は。往來の人もフシ立留り。地花を見捨つる雁金も。歸り廓の晴れ處。身にも年にも恥もせず。七十ばかりの古婆の古綿帽子の頼冠り。春知り顔に七つ屋の藏の戸出づる鶯茶の。布子の袖を摺れ縫れ附纏ひ行く足許。遣手のかやが聲高に。詞是爰な婆様。此の廣い道を何ぞいの。高砂の尉と姥が離別したやうななりで。太夫さんに見えぬ此方の連か。地とつと、退いてもらはうと押しやれども腹立てず。詞ヲ、御道理様や御免なりませ。音に聞えた吾妻様お慮外ながらしみくと。お話し申したい事御座りまして廓をぶらぶら致します。どうぞお聞入れなされてお情に預かれば。地婆が後生も助かります大事のく、の太夫様に。鹽の辛い梅干婆がすいな奴と思召そ。フシお聴かしやといひければ。詞

ナ、いや。口合をやらるゝ。是女郎様たちの全盛を見掛けて。姨の祖母のといふ騙りことは古い古い其の爲の遣手。是目が黒い見ておきや。ナウ怖い事いうて下されな。騙り事いふ様に見えますか。ア、貧乏はせまいもの。連合は船場で隠れもない。千貫目の廻しもした難波屋の與左衛門。爲換の金が滞り。大阪を仕舞うて八幡へ引込み果てられた。其の難波屋の婆でござる。地あの頼冠りは獨り息子。千貫目の大釜の湯気で育つた奴なれど。今では錢一貫の廻しもならず。難與平くくと。其の日過の日傭取り騙りと見ゆるもお道理と。老の繰言目に涙。問はず語りに古を、フシ思出したる風情なり。地引舟禿遠慮なく。ム、踊歌に謠ふは婆の事か。踊歌ゑいゝ山崎ナ。八幡山崎難與平の老婆。ヤア此の誠に金を出せさ。フシ盆にござれと笑ひける。地吾妻は始終貫泣き皆の衆は何笑ふぞ。詞戀であらうがあるまいが勤めする身の習ひ。おちめと聞けば見捨てられぬ吾妻を見込んで頼むとは。愛らしい婆さん傾城冥加聞く氣でござる。地爰は人立繁山。ちよつと横町の小店をかりの揚屋町。爰へくと手を取れば涙を流し。忝やく。詞お咄申す事とても此の祖母が此の年で。何の願ひござりましたよ。月とも星とも思ふはあの與平め。日外や人に雇はれ此の新町へ文の使の序に。吾妻様を見染めてホ、

ホ、く。親の口からア、おはもじ。戀病に煩ひます。家主隣の聞えもあり。御器提げる瑞相かと。叱つてく追出しても退けうかと存じたれども。ア、昔の身ならば若い者の手かけ妾のといふ最中。申しにくいが太夫様たち一年二年買詰めても。何處の痛みにもならぬ身代其の氣で育つた奴の事。地ア、可愛やどうぞしてやりたいと。母が瘦我も子の望みも金銀といふ強者には。又してもへしつけられ見殺しにする子の命。詞氣遣ひするな情を商賣になさるゝ吾妻様。歎き申してお盃戴かしよそれで思ひ切りをれと。地彼奴を連れ附纏ふも子の可愛さ。母が命の一夜さの傾城代にもなるならば。今でも死んで見せませう。押付けがましい事なれど。ちよつとばかりのお盃是で上つて下されと。袖から出す小半入りの徳利に餘る親心。かけ盃の蒔繪の狸々笑ひかうじて涙の種。泣く事知らぬ遣手さへ。フシ彼方向くこそ哀れなれ。地聞く程吾妻押俯向き。粹な婆さんわたしがいはう詞がない。與平様は何處にぞ顔が見たいござりやせと。呼ばれて祖母も一時に千年を延ぶる門松の。影に隠るゝ難與平。フシ指を喰へて這出づる。詞袖口取つて引寄せ惚れたく人と人ごとに。誠もない口癖さへ勤めする身は先づ譽。公平の様な男を煩はしたは此の吾妻。嬉しうござんす忝い。命にも代へ身にも代へ逢ひ通したい物なれ

ど。戀というてはちよつとの詞もかはされぬ深い男があるわいな。山崎の與次兵衛様と申して新艘の初床より。面白いと悲しいと譯のありたけしつくして。勤めは名ばかり夫婦というて今一人と。外には漏す水もなし。というて母御様の御眞實。せつにお前のお心入れ立ちながらの盃に。酌流さんも本意でなし。詞これ重山預けた物それ爰へ。地あいと答へて引舟が袂の内ふくさの袂紗物。色こそいはね山吹の十兩ばかり一包。是も可愛い山様ゆる譯のある金なれど。母御様へ進ぜます。詞與平様の身の廻り立派な大盡に仕立て、下さんせ。渡り並の客に身を賣るは傾城の習ひ。地枕をこそかはさずとも年月の物思ひ。酒で流して下さんせと渡す小判を難與平。吾妻が膝へどうと投付け。詞胴慾にござる曲がないおりや金にや惚れぬ。貧な者と侮つて金で口を塞ぐのか。我等が宿は庭かけて七疊半。貪乏神のお旅所といひさうな住居。師走正月も同じ布子一枚なれど。傾城に金貰うて揚屋へ往たといはれては。此の難與平人中へ面が出されうか。地戀にかこつけ物取りとは目利が違うた吾妻様。七十に餘る母迄各に顔まぶらせ。無念にござる。許して下され母者人と聲を。忍びて泣きけるが。アア地よう思へば恨みしは不調法。詞追付け與次兵衛殿に請出され奥様に備はるお身。我等は日備取内方へ雇はれて。沙汰でもすれば

お身の爲に悪いと。後を大事になさるゝは尤々。氣遣ひなされなふつつりと思ひ切りました。地鼻の先ばかりで戀せぬ證據は是なりと。腰の小刀ひんぬいて既に小指に押しあつれば。吾妻取付き待つて下され誤つたと。ステエやうく押し留め。詞金進ぜたは過りなれど。身の納りを思ふなどとさうしたさもしい吾妻ぢやない。地與次兵衛様には稚馴染の本妻あり。父御様は隠れもないいしんぢよなり。妾から起るお宿のもやく格氣やら御意見やら。跡の極月の二十日前ちよつと逢うてそれから。不首尾くの文ばかり昇夫揚屋の付届。初紋日の買論もわしが獨の胸算用。年のある上年きりまし男の恥を包む程。身脱のならぬ此の苦患。廓で婆になる吾妻。可愛いと思うて下されと。恥も哀れも打ちあけて。つがなく翻す正月の涙も。顔に憎からず。絞る袂の上一重襦袢脱いで帯解く。逢ふ夜の床の温まり又逢ふまでは冷まさじと。深い中着は烏羽玉の黒羽二重の蛇の目の紋。與次兵衛様のお小袖暫しも身は放さねど。是がわしが心一ぱい是を着て。詞表向の客になつて下んせと。地小袖渡せば難與平是が誠のお情。私戀は叶うたとステエ押戴いて泣くばかり。地母は始終つゝくりと。のうお傾城の詰開は。むつかしさうな事やとて、ッ耳を澄ますぞ殊勝なる。地與平涙押拭ひお前に逢うて眞實の。涙といふ物覺

えました。金の草鞋で尋ねても。二人とない女郎に思はる。地與次兵衛殿はあやかりもの着物を戻しませう。代りには以前の小判貰ひましたと。取る手を母がはつたと打ち。詞ヤイ卑怯者。今の詞がはや違ふ難波屋の家に瑕付けるか。下卑た奴めと叱られて頭掉り。いやく身の儘に致すにこそ。吾妻様と與次兵衛殿是程の深い中。聞捨て、は男が立たぬ。此の金を此の儘置けば揚屋の庭錢埃になつてすたります。地小判と見れば小判吾妻様の身の油。金をおれが預つて此方も身から油商ひ。どか儲すればどか損するついと江戸へ下つて。十兩を百兩百兩から貳百兩。貳百兩から五百兩段々儲の商ひ拍子。千兩にするは三つ羽の征矢。關東廻しの商の筋道は我等が家。吾妻様根引にし與次兵衛殿とお二人悦びの顔を見て。今日の情の御厚恩を送らねば。此の難與平立たぬ。常々金がなくは是を買つてかう賣つてと。心當の事どもあり。江戸の道中二歩では高砂野宮。母じや人は横堀の妹婿に預けりや緩り。其の内金も上しましよ難與平が立身。吾妻様の御出世。與次兵衛殿の本望。千里一飛び一拍子。フシ一器量ある男なり。地聞けば聞く程頼もしい御心底此の吾妻に戀ある身で。與次兵衛様に末長う添はせうとて俄に江戸の思ひ立ち。二人が中の結ぶの神さん。門出の盃しみるお禮申したし井筒屋へ伴ひまし

よ。地母御様はどうぢやへ。イヤ與平が望み叶へば此の世からの生佛。太夫様おさらば。地いよいよ頼み上げますと與平が脊中しと、打ち。こりやあやかりもの嬉いかくと興を持たせてやはらぐる。母は幫間子は大盡はつと打ちたる露よりも。太夫が情いたゞいて。オクリ歸るさ。急ぐ。フシ長持急ぐ。いそぐ。賑々揚屋町。遣引舟がアレ。太夫さん。阿波座からうるさい和郎が見えるぞ。地ほんに。贅吐きの彦さん。しかもづぶ。酔うた足許。見咎められ。猶惡口とオクリたぐり。寄邊の井筒が本。内證花車に吹込めば。こんだとはかり與次兵衛が小袖をかりの難與平。見馴れぬ揚屋の大騒ぎスエテ戀ぶるひして見すほらし。地足はどれても目角は強き袴肩衣横筋かひ。町一ぱいをひよろくと直にどれ込む井筒が座敷。吾妻は煙管の吸口閉ぢ物もいはずにあら向く。與平は人に見られじと炬燵の内へ顔さし入れ。被く蒲團の緞子より。フシむりやりの事ぞ思はる。彦介花車を引捉へ。詞コリヤ花車様め聞き給へ。正月は新春の御慶目出度申納め候。このく。此の鼻は新酒の酔紛れ積る恨みを申し始め候。ナなんと。否か。面白い。其處な遣手め能う聞け。いかな吾妻殿でも。太夫様でも。畢竟直段の高い總嫁ぢやないか。何と。いやか。いやとは申されまい。それに山崎與次兵衛には賣つて。此の葉屋

彦介には何故賣らぬ。一文一錢値切らぬ拙者を。如何なる者とか思ふらん。忝くも桓武天皇無體の後胤。攝州津の國服部の住人葉屋の彦介。大阪に五間口の店も所持仕る。貸藏も持參つかまへさ。大金持を知らぬカナ。ア、慮外乍ら。否とはいはれまい。都島原上林の高橋に金遣うて髪切らせた。伏見撞木町榭屋の高尾に。又したゝか遣うて。心中に生爪を放してくれた。まだ鼻もそいでくれた。耳をそいでくれた。大々盡の彦介。山崎の與次兵衛に仕負けて藤屋の吾妻に。三度四度ふられては此の彦介一分立たぬ。半分も立たぬ今日から三日ひこする擱んだ。相場の高い總嫁の買初仕り。金銀米錢ぐわらりゝと撒散したら吾妻がくるりゝと廻らざ賭ぢや。サアゝゝ買うた地フシとしなだれ寄れば。吾妻むつと頬がまちひつしやりとみしらせ。詞エイあた贅ばつた聞きともない。其の高橋とやら高尾とやらは。其方の様なうつそりでも。金さへ遣へば髪も斷る爪も放そ。京や伏見は知らぬが此の。新町の傾城は魂が違うた。恐らく此の吾妻はいかなゝ。一生身揚り仕暮しても。其方の様な意地腐りに。小判の概でも動く女郎ぢやないぞや。がやゝ口きく男の。地意地ならば手柄に吾妻を廻して見やとすんど立つ。詞ム、張の強いに猶惚れた。此の彦介は吾妻を廻して見しよ。廻るはゝ。遣手めが面がぐるゝ廻るは。

爰の家も廻るぞよ。廻るはゝ山姥が。山又山に山廻。面白い。地どうでもかうでも吾妻殿をフン奥へ連れてと引立つる。地どれに下地の無意氣力はどうぞと引退くる。引舟に向ふ風花車は彼方へ押込んで。遣手も取つて鏝梅の落花狼藉。昔懐えぬ難與平齒切りをしても堪忍ならず。彦介が足首を炬燵の内より確と取り。うんとしむれはあいたゝたゝ。詞ヤレ足首が地ぢぎるゝわと目は鑿むれど口減らず。詞此の炬燵には狼があるさうなど。地蹴もぢるを引倒し蒲團押退けつゝと出で。熟柿臭い彦介が。鼻の先に溢柿のフシ溢い顔して立跨かる。詞ヤ此奴何ぢや。何者とは眼明け人ぢや。男ぢや。男といふ物見て置け。うぬは何者。葉屋の彦介といふ男見ておけ。ヤ生臭い男呼ばはり。おけゝ置いてくれ。額に毛抜もあてる者が。いとほげに女郎衆苛つて何の男。サア男が定なら俺とせい。サアせぬかい。いやせぬかい。地男どしの喧嘩といふ物教へてやろとつゝと入り。小腕捻上げ引擔いで逆どんぶり。ぎやつといはせづでんどう腹這にはつたと反めらせ。腰骨を七つ八つうんと云ふ程踏付けて。鼻唄に懐手吾妻つきん可笑しさ味へ。笑を殺す笑止顔。地彦介漸う起上り。詞聞えたゝ。與次兵衛が間諜者彦介を踏んだぞよ。山崎與次兵衛覚えて居れ。したが踏まれても此方に七歩の勝。正月早々俺が身代。踏廣けて

くれたな。殊に今年は戌の年。犬は土に寝るもの年八卦に叶うたコリヤ。地人の巳午が恵方ぞと肱を張つて立ち歸れば。踏まれてさへあの願。人を踏んだらどうあるとオクリ跡は笑ひの賑ひや。歌正月買の騒初め飾の下では三味弾き。梯子の陰では寶引節分豆撒年男。槌の子抱いて稻積んで若恵比壽にかけ鯛。蜜柑柑子橘。橙と祝うてどこも吉野。榎搗栗噓でござらぬ。フシ穂俵。喰摘に土器。さすぞ盃ちよつと押へて去年より今年はみづくくく。若みんづりの井筒屋とフシわきて賑々。賑へり。地粹の粹を越えたる戀の山崎與次兵衛。駕籠を飛ばせて西口より。昇夫がいきつて旦那お出といふより家内。こりや目出度いと跣足で飛んで門口迄。福の神のお迎ひ。ちやうさやようさや千歳樂萬歳樂。地奥の座敷にフシ設けの炬燵。亭主蓬來内儀は銚子娘は土器。牛蒡も身祝ひ太夫様も御全盛。お庇で我等も仕舞は緩るり罐子で。先づ大福の口明に變つた咄がごんすると。吾妻は與平を與次兵衛に引合せ。ありし有様一々を語る詞に與次兵衛。調豫て意趣ある葉屋の彦介。どうがなと存する折節忝い與平殿。此の以後は何時迄も心安う御意得ませう。地お手上げられいと一禮す見馴れ言馴れ聞きなれぬ。詞遣ひも第一は。足の痺に難與平只。フシあいくくとばかりなり。調御律義で重疊々々。江戸へとの思立ち尤々。

吾妻が事は苦になされず。地一廉の儲して仕合の上洛。門出に夜もすがら歌飲めや謠へや一寸先は闇の地夜ととも母が案じて居りませう。いかい御造作與次兵衛様。吾妻様皆様つらりと遣立てたお暇申すと立出づる。餘りといへばけたたまし。今宵一夜は苦しがるまい。いやく一分は寸の始まり。油断は稼ぎの大毒と帯引解けば吾妻取付き。寒い折から御遠慮無う矢張り小袖を召しませい。道中も大井川とやらいふ川は。いかう危い事ぢやけな。地御無事で吉左右待ちまする。やがてと別れ與次兵衛も見送つて與平殿。調山崎には兄弟ありと此の與次兵衛御心便りに思召せ。慮外ながら江戸にも兄弟ありと思召し。互の無事は狀通と。地フシ別れて跡は戸障子しめ。月も雲井に寢靜まり。フシ松に。嵐は。駈して。地與平は九軒を一足二足三番太鼓打ちやみて。廓淋しき折こそあれ。待伏せしたる葉屋の彦介。蛇の目の紋を知るべにて與次兵衛と見るよりも。瞞し賺してはたと切る。ひらりと外し難與平。扱は宵の白痴者意趣返しの待伏せかと。つと入つて跳倒し小刀を逆手に滅多突き。眉間を突かれのた打つて。ヤレ人殺しと聲立つる。見付けられては出世の邪魔と。おくれを見せぬ難與平。フシ風を追うてぞ逃げ失せける。地町中俄に騒出し棒よ熊手よ提灯出せ。大門灯とひしめけば彦介はうろくと。調相手は山

崎與次兵衛。井筒屋の客めぢやと地喚き立つれば與次兵衛。聞くより胸にはつしと應へ與次兵衛是にと立出づる。聲を知るべに彦介は後よりしつかと抱留め。調相手は捕へた組伏せた。騒ぐまいといひければ。地吾妻引舟遣手まで。狂ひ出づれど放さばこそ。ハアはつとばかりの涙さへ何と。なる身の三重

中 卷

覺束な。フシ罪なくて。地配所の月を見んといふ。古人の物好如何なれや。日影も見せぬ座敷牢九軒町の喧嘩は。葉屋の彦介手負ひし事。代官所の沙汰となり。相手山崎與次兵衛と訴ふれば。與次兵衛も男の義理難與平とは顯さず。我が身の科に引受け親淨閑に預けられ。相手の疵は養生し死ぬるか本腹か。二つ一つの左右次第我も生きる瀬死ぬる瀬を。定めかねたる飛鳥フシ川。明日が日知らぬぞ力なき。地一家の内に取分けて女房お菊の物思ひ。一日も氣をつめぬ人煩も出ようが何がな心慰みと。炙餅も我が胸も。共に焦る。フシ庭傳ひ。障子明くれば與次兵衛。色も青ざめうつとりとフシ氣あひ。悪氣に俯向けり。調二三日はお食も進まぬ。何處ぞ悪くば藥でも参りませ。地體お前の短氣が妾が明暮苦になつた。若し私にいたづらあらば。先の

相手を切りも殺しもなさる。筈。ハテ傾城は賣物幾人にも賣らいでは。よしない法界悟氣から此の難儀も起つた。但其の吾妻と私と一つに思つて下さんすか。地こんな事知つたらば一寸も出すまい物。倍氣せいで今では悔しうござんすと。スエテ恨みまじりのうろく涙。調いうてたもるな。一天下の人よりも和女一人に恥かしい。さりながら石清水八幡宮も照覽あれ身は斬らぬ。なれども彦介めが與次兵衛やらぬ覺えたかと仕懸けた喧嘩。身が斬つたも同然。殊に其の切手とは男同士の義理ある中。地奈落の底まで此の與次兵衛が切つたになつて。相手が死んだら切らるゝ覺悟。とはいへ彦介め左程の疵ではなけれども。強請つて金にする奸計とは鏡にかけた事。見すゝ金で買はるゝ命。此方の藏の金銀では買はれぬさうな。預けられたは母の命日。皆是親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。調されば私が父様も夫をいうて淨閑が聞えぬ。客も事による。千兩二千兩いれればとて獨子の命にかへらるか。地慾をさへ離るればつい埒の明くこと。口惜しい此の治部右衛門浪人の身でなくばと。くい〜いうて恨言。多分今日も見えませう父様の袖引いて。恥しめて言はせたら何程客い親父様も得心なうて何とせう。アレ父様の聲がする。やがて能い事聞かせましょ。調もう往にやるか又後に見舞うてたも。地い

としや寂しからうのと夫婦の顔も打萎れスエテ涙隔て、引立つる。明くる障子の明りにも、フシ暗む心ぞ哀れなる。地、與次兵衛見舞として毎日淀の渡し舟。梶田治部右衛門は相親家の聲を思ふも娘の爲。老の心を惱ませども父淨閑はさもなく。調、治部殿お出で。昨日のさしかけの將、碁勝負付けましょ。サアござれ是は餘りな淨閑老。拙者が毎日老足を運ぶも。與次兵衛事氣遣ひさ。將碁さしには參らね。地、昨日の勝負は何方へなりとつけてお仕舞〜といへども。いやいや馬鹿めが事は運次第。昨日の駒動かせず置きました。調、サアござれ〜。然らば勝つても負けても一番。昨夕から盤の上とつくと見定め。工夫した相手とさすはこはもの。お手は此方かサア遊ばせ。先づ飛車先の歩を突きませう。ヤ此の成金してやらうでの。かう寄りませう。淨閑頭を叩いて。ハア、南無三。此の馬落ちた。深田に馬を駈落し。引けども上らず打てども行かぬ望月の。駒の頭も見えばこそナホス難しのなつたと、フシ案じける。地、お菊盤の側に寄り、是は父様。調、彼方の方が落ちれば此方も落ちる。兩方の睨合で何時迄も埒明かぬ。迷惑する駒はたつた一枚。淨閑様のお手には金銀がたんとある。慾を離れて金銀さへお打ちなさるれば。是此の父様の向ふの淨閑様の此の馬は助かる。地、どうぞ手にある金銀を打出させます様に。思案

して見さしやんせ。合點か〜と袖を引けば治部右衛門打首肯。調、チ、ノ、ノ、ノ、能う智恵付けた飲み込んだと。地、いへども淨閑氣も付かず。調、親ぢやと思つて助言いふまい〜。又ちよつこりと歩で相致そ。ム、シテお手に何々。淨閑が手には金三枚銀三枚。歩もござる。此の歩で廻したら未だ金銀が殖ましょ。いかい金持羨しいか。金持とは此の角が睨んで居る。斯う寄つたらば金銀出して打たすばなるまいぞ。でも金銀は放さぬ。桂馬をあがる。治部右衛門堪へ兼ね。ハテいかい吝嗇坊。澤山な金銀握りつめて何になさる。來世へ持つて往かる。か。是御覽なされ。此の飛車を斯う引けば。天にも地にもたつた一枚の此方の此の王が。片隅へ座敷牢の如く追籠められ。今の中に落つるが金でも銀でも打散らして。圍うで見る氣はござらぬか。我等が吝いは知れたこと。座敷牢へ入らうが都詰にならうが。金銀は手放さぬ。歩あしらひで見しらせう。此方も歩を以て歩に首を提げらるが悔みはないか。構はぬ〜。先づ逃けて居ませう。コレ其の内に香車の鑓を以つて鑓玉に上げらるが。それでも金銀出すまいか。勿體ない事鑓玉に上げられうが。獄門に上らうが。手前の金銀は放さぬ〜と。地、兩馬強き慾の皮側でお菊は氣を揉みて。包む涙も手見せ禁。フシ命手詰と見えにける。地、治部右衛門腹立ち顔盤中の

駒搔寄せ引摺み淨閑が肩間にぐわらりつと投付けたり。お菊はつと驚けども淨閑はびくともせ
ず。治部右衛門膝立直し。詞恥を知れ淨閑。相親家はもと他人駒を頼へ投付けられ。咎めも
せぬ恥しらすにいふも國土の費えながら。將基にことよせ金銀出して扱ひ。與次兵衛命助けよ
といふあてこと。合點せぬお主でなし。歩に首を提げられ鑓玉に上げられても。金銀とては出
さぬとは。治部右衛門に氣を焦らせ面白い可笑しいか。其方も獨子此方も獨娘。兩方共に懸替
なし。聲を子と思つて居るが嫁を娘と思はずか。與次兵衛が切られたら可愛やお菊が歎かうと
思ひやつてたもらぬは。エ、さりとは恨めしい。縁組の時婆がとめて小身なりとも侍に縁
組みたい。何ほう分限者金持でも。町人とは馬が合ふまいとくれぐれ留めた。否々名に觸れた
山崎淨閑。武士交りもする仁と。地我一人情ばつて此の頃婆が恨ごと。お主が吝い無慈悲から
五十年添ふ爺婆の夫婦合迄不和に成り。我が子の命に替へぬ金銀さぞや親類縁者が飢死すると
も構ふまい。我こそ浪人主人持つた一家もあり。物知らずと縁を組み一門の名を汚す。無念至
極と許りにて喘上げ。くく泣きければ。淨閑もしばく目。地侍の親が育て。武士の道を教
ゆる故に武士となり。町人の子は町人の親が育て、商賣の道を教ゆる故に商人となる。侍は利

徳を捨て、名を求め。町人は名を捨て、利徳を取り金銀をためる。是が道と申すもの。地如何
なる大病難病も病には療治さまぐある。國法で取らる、命には人蔘で行水させてもいかない
かな助からねど。金銀では助かる命の買はる、金銀。調大事の寶といふことを與次兵衛めが知
つたれば。此の難儀は仕出さぬ。何ほう惜み貯へても死んでは帷子一枚とは。此の淨閑も知つ
たれども。地死ぬるまで金銀を神佛と尊ぶ。是が町人の天の道。金の罰の當つた奴まだ此の上
に惜氣もなう。金出して如何なる天罰大難にがな遭ひ居ろかと。可愛い程猶出しかねる。吝い
名を取る此の淨閑金銀ばかり惜むでなし。塵灰まで惜しい物。たつた獨の世倅の命。惜しうな
うて何とせうと。坊主頭を將基盤スエテとんと投伏し泣きけるが。地治部右殿のお恨みも聲可愛
さとは存すれども。左程に思召すならば。なぜ日頃ッ引寄せて。異見もして下さつたら斯様
の事は出来まい物と。我が子の痴氣は思はず脇かかりの恨みが出る。子故には愚鈍になり不調
法申すも存ぜぬ。奥へ參る治部右殿。ア、死んだ婆は果報ぢやと。涙に咽び立ちければ舅も恨み
いふこともスエテ泣くくく表へ立出づる。ッ跡にはお菊。地將基盤どこへ取付く島もなき。淨
閑様のお詞の道理は聞えた様なけれど。金銀なければお命ない。あの内藏の金箱も用に立てねば

將棊の駒も同じ事。ア、慈悲のない親御やと浮世の頼み涙にくれ。無常心や入相の鐘物。凄く三重へ暮れ渡る。フシ雁の數讀む。朧月。地泊り鳥の寄る邊なき。藤屋吾妻がわくせきの。思ひを乗せて在所駕籠。スエテ淀の川水流れの身。海道行くも山崎。歸るも山崎。霞が内の。畦傳ひ。フシそりや打渡す。丸木橋。地見なれぬ目には恐しく。長地駕籠を留めて下り立ちて所體作るも町風に。譯なき夜半の松の風。裾吹返し呼びかはし。戀の山崎そんじよう其處と人の教へし家並も。所稀なる家造りの裏門塀のかゝりまで。フシ扱は爰ぞと知られける。詞駕籠の衆此處が與次兵衛様のお屋敷。塀越に見ゆるがお部屋さうな。地いとしやあれに押籠められてこそわしや彼處へ往くぞや。詞ちつと隙が入らうとも必ず待つてや。戻りも頼むぞや。烟草がなくば進ぜうか。地つい往てこうと裾軽く。フシ寄る程塀の高ければ。仲上りく。仲上りても燈火の影も通さず隙間なき。用心厳しき内の體。嵐と共に路次の戸を敲いて吾が胸踊る。耳を壁に押當て。聞けどひつそと音もせず何時迄斯うして居たととも。誰が知らせの便りもなし。吾妻が來たと呼ばうかと。佇む足は釘氷身も。フシ冷え渡り冴えかへる。地炬燵さへなき座敷牢いとしや寢てか起きてかと。お菊が見舞ふ駒下駄に。フシ飛石傳ふ足音の。サア是ぢやと飛立つばかり。詞與

次さんぢやないかいな。あるにもあらねず吾妻が見舞に來たわいなと。地聞くよりお菊はつとして。扱も太い傾城め。どうする事ぞ試みんと内より壁を懐かしげに。ほとく敲けば。ムウ聞えたり。詞定めし何處も締つて入る事もなるまいと。妾が心に思ふ事こまなくと此の文にあり。篤くと讀んで自筆の返事見ますれば。地今生の本望と塀越に投込んだり。ア、誰が拾はうも知らないで女房のある男の屋敷。遠慮もないと開けば見知つたり。朧月にも見違へぬ吾妻が筆。仔細らしい一つ書。詞此の剃刀は妾が研ぐ心の刃。もしもの折は必ずくさもししい者の手にかゝらず。潔い御最期。時は違ふと日は同じ日。最期所はかはるとも來世は一つ蓮葉に。永き契りを目出度しと。地エ、此の剃刀の入れざまは。何うぞお命助けたさ。女房舅が泣きしみづき。父御様とも争ふ程の大事の命。澤山さうに死ねと書いた此の文に。目出度しは何ぢやの。詞男どもにいひつけ叩き出してくれうか。イヤそれ程夫の名が立つ。地直に逢うて言うて退けうと。フシ路次の戸開き立出づれば。ナウ與州様か懐かしやと。繩り寄る手を確と取り。詞音に聞えた吾妻殿か。今の文も見ました。わしや與次兵衛殿の女房菊といふ者。遙々の所能うござつたの。定めて主に逢ひたかろの。知らしやる通りの難儀でアレ。あの座敷

に押込められてはござれども。おれが逢はせぬ。ア、此の菊が逢はせぬ。吾妻殿には疾うに逢うて禮いふ筈。此方故に大事の家業も餘所になり。地内は野となれ山となれ夜を日についての里通ひ。親御の不機嫌世上の悪口。此の度の難儀それ見たかと。いよく人の嘲り。我とても女の身腹が立たいである物か。調夫の恥辱さがない女房といはれまいと。嗜んで居ればお菊は奇特な。格氣せぬ賢女々と。賢女ごかしの拜み倒しに逢うて。吾妻殿に睡讀まれ居るわいの。此方を女郎かと思へば鬼か天魔か。此の剃刀で人の男に死ねとは。死んでよくば此方一人死んだがよい。大事の男の膚は荒され。地心の底は見探され。世間に悪う謠はせ。生きる死ぬの難儀も誰ゆるぢや。調傾城殿和女ゆる。地生傾城の恥知らずと積る恨みの高聲に。與次兵衛も障子そつと明け。彼方も此方も道理詰。道理のないは我ばかり二人の心思ひやり。顔は焚火の冷汗に。フシ消えも失せたきばかりなり。地いか程お恨みお叱りもお前に逢うて此の吾妻が。申し上げう詞はない。引く手数多の身の上さへ。格氣妬みは女の常。お心堅い。フシ町育ち。地誠なき傾城めが瞞しての賺しての。憎やくはお道理ながら。調與次兵衛様に逢ひましたは女房にならうとも。手かけ妾にならうとも申し交した事もなく。勤めばかりも馴染だけ夜を日に

91
ますお愛しさ。女子のなづむ風俗。よい殿御持たしやんした奥様。お世話はお前お一人。此の度の騒動も人違を頼もしづくで。お身の難儀もわしから起る相手もやがて死にそなけな。地悲しいは我が身一つ知らせて覺悟もさせましたく。廓を忍んで此の有様。見付けらるれば見せしめに逢ふも合點。調相手が死んだら自害させまし。妾もお供と剃刀も用意しました。お主の名も流さず妾も情の御恩に。地命捨てる心ざしお前の御縁は妨げぬ。たつたま一度お顔見せて下さんせ。其の目を直に塞ぎます。ナウお慈悲ぞやと懐中の。剃刀咽に押當て。娑婆の名残りも涙さへ。フシ思ひ切つたる哀れさに。地お菊はやうく胸開け。袖引きとめて是吾妻殿。調義理にも命捨てうとは偽りにはならぬ事。心底がいとしい主も定めし逢ひたからう。沙汰なしにそつと逢はせましょ。地ア、有難い料簡深いお菊様。大事の殿御を澤山に抱いて寝ました堪へてや。調ハテ取返へされはせまいしそれだけ此方の仕合せと。心とけたる路次の中。地お菊くと呼ぶ聲は舅の淨閑。鼠取の榊落し手に持つて嫁は何處にと立出づる。アレ爰へ親仁様折がわるい先づ暫しと。吾妻を扉の小蔭に隠し。調まだお寢も遊ばさず夜更けて何でござります。イヤ別の用はない是見やお菊。若い奴等が仕掛けて置いた榊落し。ばつたりと響いた故明けて見

たれば。鼠は逃げて往んだと見え、柵の内には何にもない。是でつくづく世の中の悟り開いた。中の餌食を頼みにして油断すれば。落しにかかつてつい殺さる。思ひ切つて餌を捨て。逃げて退けば其の鼠が命を助かるばかりか。親鼠舅鼠女房鼠もあるであらう。此の一家一門の鼠どもが悦び。別して老鼠の親鼠が心の体まりはいかばかり嬉しからうぞ。地若し若鼠の分別なしに。逃けた跡で親鼠が又落しにからうかと。よしない意地を立てをらうが。いかなく親鼠は老功で落しにかかる事ぢやない。詞定めて伯父鼠もあらう。其の巢へ屈んで此處らさへ影を見せねば鼠落しも音なしになつてすむ。此の度の柵落しに能う懲りて夜毎に柵走り。盃嚙つたり親の小判咬へて盗んだり。暴れ廻る事ふつと止め。後には白鼠の富貴と榮えるを。親鼠が見る嬉しさどうあらう。詞痴氣鼠の狼狽鼠。此の合點が往かぬかと。地おりや此の頃夜が寝られぬと。スエテ涙に聲をふくませば。如何にも。詞お慈悲な鼠算用成程私しが逃しませう。チヲ満足々々ざつと胸が開いた。此の頃心に此の事ばかり持佛へ參つても佛の顔も見えなんだ。地嬉しや今宵から心靜かに看經せうと。念佛力の後姿オクリ見るに。心ぞ遺瀨なき。地與次兵衛走り出で聲を知るべのかたじけ涙。おきくは舅の足跡を手に戴いて吾妻様與次兵衛様。詞

今のお慈悲を聞かしやつたか。早う爰を退く程がお心安め孝行。地淨閑様の起臥は此の菊が居るからは今迄より猶氣をつける。跡に氣遣ひ遊ばすなお前に誰ぞつけたいが。エどうかたと案ずれば。詞はお菊様それには此の吾妻が居る。命を捨て、出た廓二度歸る心はなし。地お前さへ御料簡お供せよとあるなればわしや忝い。廓へは歸らぬとスエテ思ひ詰めたる詞の末。地チ、そんなりや跡先首尾がよいサア更けぬ先にと引立つれば。與次兵衛袖を打拂ひさうでないさうでない。詞人の父としては慈にとまり。人の子としては孝にとまりといふ。預り者が駈落し先の相手が死ぬれば。忽ち親は下手人に挿られ首刎ねらる。假令先が無事でも取逃したる咎めにて。それ程の罪は親父様の身にかゝる。其の難を厭はぬ慈悲心親父は親の道が立つ。地與次兵衛は今日迄始終親の氣に違ひ。剩親を身代りに逃げて命助かり。百年千年生きるとて人交りもならねば。天地の内には生まれぬ。詞お心をもどくでなく歎きをかくるが面白うはなけれど。地矢張此の儘死なせてくれ命を捨て、一生の孝行がして死にたいと。スエテ聲を上げて泣きければ。是も亦お道理と二人も、フシ心破りかね、フシ泣くより外の事ぞなき。地淨閑内より聲を上げ。お菊ノ。詞不孝者めが落ちまいといふさうな。エ、ノ、情ない哀れ知らず。七十

になる淨閑が。もがられたといふ外聞ぐわいぶんわるさ。人にこそ知らせね。内證手を入れ二百兩迄扱あつかうても。足元見て千兩でも聞かぬといふ。淺疵あざとは聞いたれども人の生身いぢみどうあらうかと。親の案じはどう思ふ。地地將基しやうきで心を紛まらせば結句むすび側はたから氣を付けて。思ひ出す程ほどフシ胸むね苦しい。地地宵よから心粉こころこにはたいた樹落きりぎりし。量はかつても量はかられぬ。親の歎なげきを思ひやれ一生子いっしよでも居まるまい。一度は親にもなりをらう。胸むねの中なかが知らせたい落おつるか落ちぬかはや吐はかせと。聲こゑあられても泣顔なみだは壁かべより。外そとに洩あれにけり。地地與次兵衛よじべゑ涙なみだに平伏ひらふして。詞ことば有あり難がたいお詞ことばどうも此こゝの與次兵衛よじべゑ。爰こゝが立つて落ちられぬ地地眞平御免まへらへと伏ひ沈しむ。詞ことばム、よい。年寄としよつた親おやを持つ者は一日も親おやを先立まて。其そのの身み息災いきさいで年忌追善としよ。弔なぐさひたいと願ねがふぞや。地地汝おのれは親おやに弔なぐさはれ歎なげきがかけて見たいか。サア此こゝの比ひ首くち皺しわ腹はらへ突つ込んで。望のぞみの通りとおりにしてやるぞ。南無阿彌陀佛なんむあみだぶつといふ聲こゑに申し申し落ちませう。待つて下くだされ親おや仁に様さまとスエテどうと臥ふしてぞ泣なきるたる。詞ことばム、しかと落おつるか。何なにの偽いつはりり申まさうぞ。ヤレ嬉うれしや落お付ついた今迄いまの不孝ふこう皆許みなゆるし。三十年の孝行こうぎやうをたつた一度に受取うけとつた。地地死しんだ婆はも嬉うれしからうお菊きくには親おやがある。淨閑じやうかんにはお菊きくがある。跡あとには少しも氣遣きぢひすな。詞連ことばづれの女中にやぢゆうがありさうな嫌いやがるとも灸やす忍しのませ。酒さけ吞のませて下くださるな。馬うまでは人が面おも

を見る高くとも駕籠かごに乗のれ。地地頼たのみまするとそこへ心こゝろは千筋百筋せんしんひゃくしんの。縞しろの財布さいふを投出なしさらばとばかりフシ言いひさして跡あとは。涙なみだに咽むせびけり。地地與次兵衛よじべゑ猶なほもあり難がたき親おやの恩おんと妻つまの思おもひ別わかれの辛あつさに恍惚うつつと氣き拔ひけの如ごとくよろくとスエテ前後ぜんごも分わかす見みえければ。詞ことば是こゝは吾妻あづまぢや合あ點てんか。あれは奥様おくさまお菊きく様さま。さらばとせめて言いはんせ。地地エ、氣きの弱よわいお人ひとやと力ちからをつくる我が身みも。人目ひとめを深く忍しのぶ夜のいざ相あ駕籠かごとさゝやきて。袖打そでうち拂はらふ春はるの霜しも。フシ駕籠かごの衆しゆうおじやと招まきけり。△地地お菊きくの聲こゑもうらがれて。なう何方いづかたに落お付ついても其そのの儘まま御無事ごむじの便べんりを待つ。泊とどりくの朝あ晩ばんに冷ひやえぬ様さまに頼たのむぞや。何なにやらいひたい事ことどもが胸むねにはあれど口くちへ出でぬ。只ただ御無事ごむじで息災いきさいでといふより外ほかは泣なくばかり。フシ誠まことをいはず。我われこそは。夫おつとを連れて退のくが道みち。何なにぢや妬ねたみ憎にくんだ人ひと。相あ駕籠かごでやる妬ねたましさ羨うらやましさ悲かなしさ。涙なみだの筋すぢは多おほけれど。愛いとしいばかり一道いっだうに。見送みおくる駕籠かごも遙々はるかと。さらば。くうさらばの聲こゑを紛まらす後夜ごやの鐘かね。跡あとへ戻かへるは雲くもの足あし。先まへ急いそぐは駕籠かごの足あし。せめて肩かたして留とどめもせず。戀こゝろの重荷おもに小附こづして親子おやこの哀あはれ打うち乗のせて別わかれ。行方ゆきかたや三重じゆう

歌春に育つも花誘ふ。蝶は菜種の味知らず。菜種の蝶は花知らず。知られず知らぬ中ならば。浮れ初めまい。狂ふまい物ナホス味氣なや。△地吾妻立寄りヲ、嬉しやお心も鎮まつたか。詞アレ御覽ぜよ蟲でさへ番ひ離れぬ揚羽の蝶。我々も二人づれ粹な同士の中々に。お心弱やと勇むれば。○歌吾妻請出せ山崎與次兵衛。キン請出せく山崎與次兵衛。何時か思ひのナ下紐解けて。昔思へば憂や辛や。憂や辛や忍ぶ昔も憂や辛や。△地情なや誰あらう山崎與次兵衛様とて人々に。後れぬ髪おの亂れ心吾妻が顔も見忘れて。スエテ現なやと制すれば。○歌其方は藤屋の吾妻かの。與次兵衛に揉まれて。色のキン悪さよいとしさよ。オクリ近い内には必ずとフシ請けて。樂さしよ世帯して。地子供儲けて二人が連れて。小オクリお乳が。肩くまおて、が日傘。肩で風切る山崎に。親の御恩を振捨て、其方の世話になりふりも。ホフシ昔には似ぬ男山今では人も秋篠や。長地外山の松よ事問はん待つが辛い別れが憂いか待つも別れもせぬ様に。親の許した女房は。義理と情の二面。スエテかけて思へどかひもなく。半太夫今は野末の放れ駒。昨日は吾妻に戀を乗せ。今日は故郷のフシ焦れ泣き。我から狂ふ秋の葉の。亂れて袖に置きもせず。ハルフシ寝もせで露の。たま〜も待たる、とも待つ身になるな親と子の。便りを凌ぐ山崎の妻もさこそは亂れ

髪。いうた詞が力ぞや。フシわしが馴染は。三重の帯。長い夜すがら引きしめて妬み格氣の心なく。預かる物は半分の主は忘れて居さんすか。過ぎし月見は井筒屋で底意限なき夜と共に。踊り明かした面白さわしや百迄も忘りやせぬ。○歌忘れぬ物よ。見あかぬ君が。外八文字の道中姿。目つきで。ギン殺す所體になづむ。キン傾城こまめにたらひが女房。請出したらひのフシ底脱けて。影も宿らぬ。きぬくの親を悲み妻を戀ひ。心一つを二しなに。名乗りて過ぐる。杜鵑。フシしやが父に似て。父に似ず。子は色里に初音ふる。○タ、冠は被ねど大盡と。△花車が轟く口舌の門。○遣手が叩く。△禿が睡り。二人皆夢の間の境界と。フシ破ればぐわちもなかりけり。フシかくは知れども。柳の絲の。蓬を亂す山嵐。烈しき親の諫めの詞。妻が別れの一言葉身にしみくと戀しやと。互に手に手を取りかはし。フシ聲も惜まず泣きくるたる。地夕陽岫に程もなく。西北に風起り東南に向ふ雲の足。コハリ梢木の間もはら〜。小川の水音さら〜。さら雲の羽袖もひら〜と。彼方へ靡き。此方へ靡きくるり〜くるり〜とハツミ廻り廻るや。月は行けども。果てしなき思は目前親の罰。當つて碎くる男の姿走れば走り留まれば留まり。狂はぬ袖も亂れ心命。つれなき流れの身。ギン流れ渡りの世の中に。暫し留まる賤が家の軒

を。尋ねて三門へ惱みけり。フシ難波湯梅に。名を取り松繁り。地紅葉の錦盡さへや夜見世を新にお許しと。疾しや遅しと見に廊四筋の町の軒深く。燈火星の如くにて。三五以上の月の顔オクリさす汐影のわけもよき局。くの手拭は濡れぬ隙こそ。フシなかりけり。地太鼓は打たて大門に轟く馬の高嘶き。井筒が許へ乗懸の客は八幡の難與平。威勢美々しく飛下るれば亭主迎ひの槌で庭。はくまい九郎左見忘れか。調當正月には造作の上。地貴殿が世話に難與平。以前は金銀内大臣今日参るは内証に。様子も金もある大臣罷通るとずつと入る。誠にさうよお珍し先づお茶烟草と輕薄に。油載せたる燈臺もはや立ちかはり蠟燭の。フシ流れの里ぞ氣散じなる。九郎左近うと招き寄せ。調知らるゝ如く此の正月藤屋の太夫に貰うた金。直に東に芽を出して人いためずのどが儲け。馬の脊骨も折りかひあつて此の度罷歸る所。太夫吾妻は廓を逃出し。關を破りし科人と行方を求め捜さる由。道中すがら承る。恩を受け詞を番ひし此の與平捨置いては男立たず。地彼を請出し世を廣うしてやらん。吾妻が年期の證文あらん此方へ貰ひたし。金に換へて今宵の中に首尾する様九郎左御差配々々と。ちよつとの露もしつほりと。フシ家内潤ふばかりなり。調お目出度い。御聞きとあるからは申すに及ばずさりながら。不思議な事がご

ざります。今日暮方に田舎めいたる浪人衆。吾妻は爰に居られずとも手形なりとも身請がしたい。地金はなけれど一腰の宇多の國行。二尺許りの大刀物折紙共に引換へと。奥の座敷に居られます親方へはまだ知らさず。お前と一所に親方へ。フシいうて見ましょと立出づる。表の騒ぎは葉屋の彦介どか。と入り来る。調コリヤ珍しい旦那。とれたか。果報な九郎左金儲けうなら我等に廻れ。輕いお出が身請の談合強いか。知つた通り此の春早々。山崎の與次兵衛めに小鬢先をちよつられた。弓矢八幡堪忍せぬ氣。代官所へも訴へ親淨閑に御預け。内証から手を入れて段々と詫言する。金銀で扱へば百萬兩でも聞かぬ男。コレ見よ疵も平癒した。與次兵衛めは憎けれども。親めが心が不便さに許してやつた。其の禮とて目くさり金樽代としてよこした。酒戻しはせぬ物ゆゑまあ受取つて置いたぢや。吾妻めが關破りも。與次兵衛が喰しお預けの内を連れて逃けた。淨閑は其の崇りに吾妻與次兵衛尋ね出す迄。道具諸色に封印付け殿しい閉門。聞けば與次兵衛めは野倒死したけな。出れば其の儘切らるゝ首仕合者ぢやあるまいか。扱談合は吾妻が事。關破りの科人こいつが命も助からぬ。佛性に生れ付いたが彦介が病ぢやわ。是も助けて取らせたい。先づ吾妻めが手形を請出し。跡では緩々行方を尋ね飯でも

焚かせ。すゞぎ洗濯。手足擦らせ一生は養ひ殺しにする覺悟。地彦介なりやこそ斯うもいへ相談して埒明けい。コリヤ現銀ちやと五十兩亭主が前へ投出す。與平始終を聞きすまし御免と襖押開き亭主々々。詞吾妻が身請は身が先ぢや。地金子は是ごと持せたる。千兩包みの木地の臺前にすつしり飾らせたり。前後の争ひなされるれば此の浪人者は一番と呼ばはつて座敷に出で。身請の代金此の一腰三千貫の折紙と。共に投出す態恰好中身は見ねど與次兵衛が。物語の治部右衛門。擬なしと難與平。フシ口を閉ちて窺ひ居る。地亭主九郎左は福徳の三方論議に行當り。兎角は親方料簡次第呼びにやらうか身が參らう。それは御九郎左くと。フシ獨語して駈出す。地跡は互の睨み合ひ彦介は手懲した。與平が顔の氣味悪く心も心ならねども。見つきはきつい服部育ち。烟草盆引寄せて烟吹出す佛頂面。烟管ぞ迷惑灰吹を。フシ叩いて返事を待ち居たる。地吾妻が親方勸右衛門亭主に連れて座敷に出で。詞様子は九郎左物語り吾妻が手形を身請とは。遂に廓にない格にて。兎角のお返事申しがたし。何れへ手形上げましても。此の事世間に流布あつて駈落させた跡にても。金さへやれば濟む事と悪い性根を吹きこまれ。地そこにも駈落爰にも逃げた又しては關破りと。廓の騒動親方仲間の難儀なり。此の相談はなりませんまい。一旦

吾妻が顔を見て其の跡では能い様にと。聞きもあへず聞えたく。詞餘人は知らず此の彦介早速吾妻を尋ね出し。地身請はおれぢや詞を番うた罷歸るとすんど立つ。さうはさせぬと難與平小腕取り引かづいてどうと投げ。脊骨にしつかと打跨り。詞逃足も往に足も達者に生れ付いた男。動かば頭撲碎く合點か。藤屋の勘右尤千萬今の詞は聞き處。吾妻が顔を一目見たらば其の座で身請は違ひないか。何の虚言申ませう。末に年期の少ない吾妻。今迄金は儲けてくれる偽は申しませぬ。ム、面白い代官所の首尾も別條ないか。其の段も此方より申しおろせば相濟ます。珍重々々。下々ども其の草葛籠持つて来い。亭主二つを開かれよ。地あつと葛籠の紐とくとく。中より吾妻與次兵衛。フシ正氣になつて立出づる。地彦介はびつくりし親方亭主も興覺め顔。治部右衛門は包みかねヤレ與次兵衛か治部ぢや。無事な顔見て。フシ嬉しやと跡はいはずの悦び涙。與次兵衛も頭を下け何事も御免あれ。親淨閑へお託言。詞頼むに及ばぬ淨閑の心入れも聞いてゐる。吾妻もいかい苦勞めさつた。ナウ親方殿此の一腰に引換へて。地吾妻を身どもに下されと手をつけば。吾妻も久しい九郎左様。旦那様へお託言スエテ頼みますると泣き居たり。詞與平勇んで彦介を取つて引立て。おのれよう聞け此の與平が江戸へ稼ぎの根本は。吾

妻殿を請出して廓の苦患を助けんと。思ひ込んだる一商ひ。五百貫目に間のない金手間隙入らず儲け蓄め。立歸る道すがら與次兵衛殿にもお目にかゝり様子は段々聞届けた。おのれを切つたは此の與平。與次兵衛殿に難儀を見せ金銀大分取つたな。地打ちのめしても腹癒ねど。目出度き時節ぢやとつと、歸れと突放せば。調ア、有難や正月も此の座敷で取つて投げられ。跡は切られて今日ひふは又。殺さるゝかと思つたがお助けは忝い。地三度敷が合ひましたと逃出づるを治部右衛門。腕かぢ挫なぎに取つて投げ。調おのれはどうも往なされぬ。淨閑が言譯させ。閉門御免請けねばならぬと手ばしかく縛り上げ。身請は濟んだか與平殿。地いやまだ濟まぬ。金子は千兩一枚の。手形に換へてと難與平親方が前に置く。調勘右衛門頭かぶら掉り。來二月には年も明き身任せになる吾妻。千兩といふ金取つては人の思はく男が立たぬ。金取らずとは申したけれどよもや左様さうはなされまい。跡六月をば三百兩残りはいらぬと突戻す。地與平素より氣散じ者出来た出来た。手形は取つた金取つた吾妻が身請濟みました。其處で請出す三百兩打つておけ。しやんしやん。ま一つせい。しやんく。すつとせい。調コリヤ亭主。此の千兩は始めより身請に當てた。一錢でも残しては本意ならず。三百兩は亭主にはづむ。コリヤ忝い。二口合して六百

兩。打つておけ。しやんく。四百兩残つて氣にかゝる地寄つて祝へとばらくく。ッシ金は座敷に色かへたり。揚屋かひやの男女別ちなく。押合ひへし合ひ拾ひ取り皆取り込んだか目出度い目出度い。祝うて三度しやんくくと手拍子に口拍子。仕合せ拍子の三々九度。末は千秋萬年も變らぬ。妹脊を重ねける。

(奥書缺)

日本振袖始

(七行八十三丁本)

作者近松門左衛門

序詞天照大神に奉る。四月九月の神御衣は。和妙の御衣廣さ一尺五寸。荒妙の御衣廣さ一尺六寸長。各四丈。髻糸頸玉手足玉の緒のくり返し。神代の遺風末の世に恵をおほふ秋津民。千早振袖廣戈の國平けく御す。天照大神の御孫。天津彦火瓊杵尊と申すこそオロシ代々に王たる。始なれ。地久方の日の神の御影映りし八咫の鏡。是を見る事吾を見るが如くせよとの神勅にて。民恤みの仁の道。百王の後迄も内侍所と崇めらる。地さて又御先祖伊弉諾尊より御相傳の十握の寶劍。是勇の形義の理。御叔父素盞鳴尊猛く勇める御器量とて。此の寶劍を預り王を後見ましますば。神聖に不思議の禮智あり三種の寶の神徳に。家に樂み野に耕し。手拍つて謠ふ土民迄。式を越えざる玉垣のフシ内つ。御國ぞ道廣き。三十二臣の棟梁藤原の大祖天璋兒屋根の臣。御前に正笏し。天王既に寶祚の御位。天下萬民の父母たる御身。夫婦妹脊の道缺けては王道いか行はれん。御心に入り御目につきたる女あらば。夜の御座に召入れられ然る



べしと奏聞あれば。地恥かしげに御顔を打赤め。二柱の御神始め給ひし夫婦の道。色を好むは癖事ながら。詞去年の冬豊の明の燎の影。垣間見し面影の身に立添ひて忘れず。地露のかごとに名を聞けば大山祇の臣が娘とや。深山の立木野邊の草靡かぬ方はなけれども。引くにひかれぬ。フシ戀草の種を誰かは植初めしと。貴き賤しき戀の癖スエテ浮世。恨みの御詞。兒屋根の臣を始め伺候の群臣一同に。詞こは勿體なき御啣ち。何事か御心に叶はぬ事や候べき。折しも大山祇御前にあるこそ幸ひ。御分の息女御宮仕へに參らせ。叡慮を慰め申されよはやくお受けとありければ。大山祇謹んで臣娘二人持ち候へども。姉岩長姫は容貌醜く不束にて。心まで拗々しく。親の目にさへ疎ましき生れつき宮仕へは思ひもよらず。妹木花開耶姫容貌心ざま姉と變はり。地女の數にも入るべき者。宣旨違背候はじと勅答も終らぬに。鰐香背の臣といふ奸曲の佞臣。高遣戸荒らかに引明けて大山祇の前にどうと坐し。詞これ山祇。御邊が性根はあるかないか胸の中を搜して見よ。開耶姫には忝くも。素盞鳴尊御心をかけられ。此の鰐香背の臣がお使にて御所望ありしは何とく。娘を天子へ上げたくば上げて見よ。又素盞鳴尊へも上げさせて見せんす。地度性根を定めよと御前とも憚らず。袴の裾けはらかし禮儀をくづして責めか

くる。調大山祇ちつとも臆せず。いはれぬ人の性根穿鑿。先づ御邊が性根あるかないか腸を
 搜して見よ。尤娘御所望のお使は得たれども。素盞鳴尊に契約は申さず。其の時御邊が辯舌御
 身に深き大願あり。御本望達すれば舅君と仰がる。後の果報を思へなどと勧めしかど。兎角
 娘は進ずまじと申し切つたを忘れたか。但し御邊と契約せしか。其の時の魂あるやいかに。ナ
 ラ契約した程ならば口でいうて置かうか。よし契約はありともなくとも一旦答へはある筈。天
 子の叔父君後見たる。素盞鳴尊を侮るか。此の鰐香背の臣を侮るか。地あなづる太刀の刃鐵を
 見るかと既に柄に手をかくれば。兒屋根の臣聲をかけ。調ヤア〜恐れを知らぬ鰐香背。理非
 はともあれ宮中にて。太刀に手をかけ無禮の振舞。上を輕しめ奉る其の料據なし。地刃を以
 て人の肌斷ち傷つけ殺さば。國津罪科にしづめよと天照神の御制法。中臣の家に承つて此の兒
 屋根の臣がきつと罪に行はん。誰かあるあれ儼ひ出せと棟梁の臣の凛々たる。威勢の聲に吃驚
 して。流石の鰐香背大口すほめ。蛭にしを〜退出す。フシ面目なうぞ見えにける。地かゝる所
 に美濃の國の造早馬に汗かゝせ。蹄をとばせ庭上に大息つき。調さても本國殲山の巖窟に。三
 熊野大人と申す惡鬼隠れ棲み。百千の眷屬村里にあふれ。青山を枯山にして人民に毒氣を吹き

かけ。惱まし苦め人の命をとる事毎日千首餘り。早く討手を下されずば。人種は候まじと奏す
 れば。地上下の男女驚き。恐るゝばかりなり。地王宸襟を惱され。天照御神高天原にて。も
 ろもろの惡鬼惡神を誡め給ひ。長く我が國に仇をなさじと誓ひの手形を顯して。鬼神に横道
 なしと聞く。今國民に害をなすこそ不思議なれと。地神璽の御箱を開き給へば。天津兒屋根進
 み寄り。繡印の一卷八座の机にさら〜と。フシ線披けてぞ叡覽ある。地異類異形の鬼神の手
 形鳥の足蛇の爪。或は人に似たるもあり螢火のかゝやく惡神。蠅聲疫神邪神。鳩繁茶夜叉神藍
 婆神。此の神國に害をなさじと惡鬼惡魔の手形の中。三熊野大人といふ手形更にあらざれば。
 いかなる變化の所爲ならんと。フシ疑ひ恐れ給ひけり。地天津兒屋根につこと笑ひ。調恐るゝに
 たらす此の手形に洩れたるは。必定新羅百濟の異國の邪神蘆原國を窺ふなんめり。武勇に猛き
 素盞鳴尊を以て。平け鎮められんに何事か候べきと。速日の臣を勅使として素盞鳴尊に宣旨あ
 り。惡鬼退治の大將の印に賜はる御旗に。照輝ける月と日も。おなじ胤なる皇の御代に。住む
 身ぞ。三重かけまくも。フシ忝くも。地日の神の御弟素盞鳴尊御身の長八尺。力千人引の岩を轉ば
 し猛く烈しき勢ひに。邪を碎き仇を討つこと暮秋の嵐木枯の。フシ草木を破るに異ならず。地

悪鬼退治の宣旨に任せ。軍慮をめぐらす小車の錦の着長銀の心葉。角髪に取つて付け韓勤の御佩刀。大手襪に白木綿かけて千箭の簾。樟の弓を弓弭高にふりたて。天の斑駒白泡嚙ませオクリゆらりと召せば馬の背も。たわむばかりのコハリ御骨柄。侍従のわらは天稚彦十八歳。主君に劣らぬ不敵者。御馬の左に引添うて三千餘騎が隊伍をみださず。日月の御旗真先に八十縫の白楯つき立て。く。しつとりしとく打つたるは花待つ雲に雨を帯び。暮山を出でたる御勢事も愚や出雲の國大社。むすぶの御神又は祇園牛頭天王。厄神拂の荒神と。末世に顯れ地給ひしは今此の。フシ尊の御事なり。地後陣の方よりなう御馬暫くと聲をかけ。鰐香背の臣一文字に駈來り。韃取つて引きとめ。詞扱々不覺の御出陣。知召さずや兒屋根の臣威勢にほこり大山祇をたらし込み。木花開耶姫を天子の女御に供へ。君に鼻あかせ萬民の笑ひ草として。天下の後見叔父君の威勢を落さん謀。御預りの國の寶。十握の劔も取上げられ給はん遠馳の御留守。地開耶姫を内裏へ入れては君御一生の御恥辱。臍を嚙ともかひあるまじ。是非御歸りと鞆攔んで二三間引返す。左に立つたる天稚彦轡にすがつて待てく。こりや不吉者。悪鬼退治の軍の門出。一寸でも返すとはおくびにも出さぬ忌詞。忌々しい聞きたくない。兒屋根の

臣が權柄に。我が君の威を落さんかとはそりや其の時。地なんぞ今から海も見えぬ舟用意。悪魔もひしぐ素蓋鳴尊。臆病神にひかされ道より逃げて歸りしと。末代の嘲り煮ても焼いても遁るるか。詞殊に宣旨を背く誤り叔父君とて御免はない。地分別過ぐれば愚にかへる初一念に御進みと。轡の承較ゑいと攔んで四五間引いて引出せば。詞こりやく。こりや天稚彦。汝が腹中せばい。此の鰐香背が大腹中。地宣旨を背く御咎めあるこそ幸ひ。それを次手に御謀叛す。め瓊々杵尊の御位をほつ下し。此の君を天子と仰ぎ開耶姫を后妃に立て。天津兒屋根を流罪に沈め某棟梁の臣下となり。政道を施さば天下にくらき事あるまじ。是非お歸りと馬引立て引返す。詞いや君を討つておのれが名利をむさほるか。地さうはさせぬと又引出せばコハリ又引戻す。兩方腕骨かぎりぞと。引いつひかる。梓弓弓杖三杖。四杖の間野邊の若草ふみしたき。駒嘶ふ聲ゑい。聲人馬の足音どろ。ひけば返し返せば引き。寄る方わかぬ蟹小舟。汐の落合逆波に。ゆられもまる。ナホス如くにて。フシ駒も四足を立てかねたり。地尊大きに御氣色かはり。馬上より天稚彦をはつたと睨み。詞天も響く御聲にて推參なりわつば。丸が心も伺はず惻し過ぎたる利口だて。瓊々杵尊は帝王なれども天照神の御孫。我は弟先祖に近

き此の素盞鳴尊。秋津島において肩を並べん者誰かある。心をかけたる女一人。地望みかなへず何と我が身の思ひ出にせん。宣旨を背くなんぞとは外の事。戀路は縁の物何の咎めあるべき。今夜悪鬼降伏の爲八咫の鏡の秘封を解き。御戸を開き諸人の參詣許さる。開耶姫が詣でぬ事よもあらじ密に内裏に忍入り。ばひ取つて本懐遂げんそこを放せと鏡の鳩胸踏みそらし。靶取つたる腕首はたと蹴放し。いさうれ小童と馬立て。なほし手綱も戀に紅のみに揉うてぞ三重へ暮急ぐ。フシ月も眞澄の。神鏡惡魔降伏の御祈り。今夜始めて御戸開き籌輝く瑞籬に。御神樂探物うたひ物御魂の鏡世を照す。磐戸開けし始め迄爰に覺えて君と臣。心も合に大山祇の妹姫。姿容貌は名に顯れて是ぞ木花開耶姫。此の日の本の寶物拜むといふも稀の事。心の障りない様に姉様へは沙汰なしに。いざとて局腰元や中居なんどをお供にて。賢所に參詣あり。スエテ忝しと正直の。其の一筋を御注連繩。フシ神も受けさせ給ふべし。心しづかに姫君。幣奉り再拜し。詞なういづれも能う拜みや。あの眞中に月日の如く。照輝かせ給ふこそ御鏡と申す物さうな。地右は神聖の御箱左の箱は十握の御劍。則ち三種のお寶物。詞中にも八咫のお鏡は正眞の天照太神様。萬の願も叶ふと聞く。地いかなる御縁か帝様より。自りに度々の御玉章我

とても恐れながら。貴なる君がおいとしよう思ひ沈みし戀の海。天津兒屋根の奏聞にて内裏へ召さる。筈なれども。姉岩長姫様の法界格氣が邪魔となり。地何のかのとて遅なはる姉様の氣が和らげば。自らが戀も成就する邪見なお心やむ様に。立願頼むと宣へば。早苗の局が御尤御尤。詞岩長姫様のお根性のわるさと申し。私はじめ眉目のわるい女子も多けれと。扱もく念頃に見度もない。お顔ならとりなりなら交りなしの本惡女とはあのこと。惚れて進げる男はなし滅多腹が立てのわんざん。どなたの御意見でも聞入れの有る氣質でない。地頼むは神様サア。腰元衆も願かけやと力をつくれれば姫君も。猶伏拜みく顔ふり上げて。詞ヤア是は不思議なあれあれ。地御神體の中に此の世にござらぬ母上様。年月経てもお顔は忘れぬお年もよらずみづみづと若やいで。唇は動けどもお聲は聞えぬ。自らをあはれみ神の恵みで見え給ふか。胸慾な姉君に意見してたべ母上なう懐しや床しやと。鏡とは名を聞けばかり世にひろまらねば見始めの。向ふ我が影映るとも。白木綿かけし神前はフシ涙はかかる哀れさよ。地御拜も終り瓊々杵尊若し彼の人や詣でしと。高殿の御簾押しやり御覽あり。姫はそれとも瑞籬に打ちかたむきし後姿。御覽もあへず御心騒ぎとんく轟く御胸は。神樂太鼓の現なき形は八咫の鏡の中。爰

にといはぬばかりにて映りむかひし御佛。あれ戀しき君よと飛立つばかり抱付かんも手はと
 かず。折られぬ花の開耶姫あるにもあられず是申し。詞及ばぬ雲の上人様恨みと申すも恐れな
 がら。姉に妬まれ責められ憂き目辛き目地神を祈り歎くをも。憐みの御心なくなま中にお姿は
 かり。お詞もかけられぬはしたゝるいがお嫌ひ。あつさりがお好きならどうなりと御意次第。
 いとし可愛のお文は。誠かほんか覺えてかいのとの給へば。君も憧れほくくくと首肯き給ふ鏡
 の影。詞ム、其の御心底なれば。忝うて猶戀しいのびくくなはこちやいやく。地今宵は館へ
 歸らず夜の寢殿に只一夜。枕もいらぬお褥のはしに宿かりたいとさゝめけば。君もせがる、御
 心穂に顯れて聲たてぬ。繪に書く柳糸櫻。うなづき合ひつ招き合ふ戀は。ッ昔もなまめかし。
 地早苗の局もどかしくア、辛氣。詞口でばかり濟む事かお側へ寄つて抱付いて。地仕様模様も
 ありそな事と氣をもめば。地いや待ちやくく合點がゆかぬ。あれが誠の我が君ならば。召した
 る衣の襟付が右前の筈。左前に見ゆるは外より映る影ぢやもの。エ、ほんにだまされた。地抜
 かれてのけたと氣も脱けて。人々とほんと月夜に釜の二度恨む後より。爰にノと勅諭の。御
 聲をしるべにふり返りハア是ぞ我が戀我が思ひと。走寄りすがり付き。言の葉もなく。科もな

く。互につこりにこくく瓊々杵尊。笑顔と笑顔打ちかさね引きよせだきよせ締寄せて。ッ几
 帳にまつはれ入り給ふ。地局を始め腰元下婢。こほれかゝり乗りかゝり覗きさゝやき羨むも。
 女心の珠すだれ物見だけきが。ッ色ぞかし。誰が斯くとも。岩長姫。我に隠れて妹が内裏へ参
 るは曲者と。衣打ち被き只一人。御殿を見れば女房達奥を覗きひそめく體。扱は妹めと帝と寢
 くさつたエ、妬ましい羨しい。見届けておのれ引裂いてくれうものと。うつほ柱に身を隠し聞
 くとも知らず女房達。詞此の事構へて姉御へ隠しや。もし耳へ入つて怖い顔に噴きもやさばな
 うこはやく。地さりととは違つた御兄弟。妹君は天下の美人姉御の面は何に似た。詞鹽口に蓮
 切鼻。さる眼に鉢額。耳は木くらけ願は蝶螺殻。春尻に鰐足あるきぶりは家鴨の所知入。物ご
 しは破れ鍋あのような悪女と。夫婦になる男はよくくくの運のつき。それでも枕をならべて側に
 がさりと寝たらば。地毬栗頬髭いばら髭。どさ打ちおろしの荒蕪。雁木鱧鮫肌。突く様で。刺
 す様でしつくりほつくりがつくりしやつくり寝返り。ッ打つたら寝られまいと。地どつと笑へ
 ば岩長姫。詞ヤイそりや誰が事ぢや。ま一度ぬかせ。地願蹴てく蹴放さうと御殿もゆるぐ
 雷鳴聲。わつと平伏し女房達。世直しく桑原と。ッ生きたる心地はなかりけり。詞うぬらは

暇な任せに人の顔の講釋か。よう妹を連れて来て姉の戀の上荷はねさせたなあ。地わらはが大
 事の戀君とぬく／＼寝させて置かうかと。走廻るを早苗の局いだきとめ引据ゑる。詞是岩長様た
 とへ賤しき土民でも。身を慎み世を恥づるは女の嗜み。大山祇の臣の姉姫爰はどこぞ大内。人
 の訕りを思召さぬかあさましや。人のいふが誠かうそか偽りのない天照大神の。御魂に顔の映
 るを見給へと。地各取付き押立て／＼八咫の鏡にさしむけたり。コハッあら恐ろしや虚靈不昧の
 徳に照らされ。内心如夜刃の相顯れナホス鏡に映る悪鬼の面。眼は酸醬牛の角上下の牙は劔の如
 く。見る人はつと氣を失ひ、フシ暫し。絶え入るばかりなり。地我と我が身の鏡の影始めて驚く
 氣色にて。あきれ果て、見えけるが。詞ヤイ局。鏡に映るわらはが顔は何と見た。ア、形ばか
 りは人なれども心の鬼のしるしには。悪鬼に見えしといふより早く飛びかゝり。地髻を掴んで
 膝にひつしき。エ、口惜しや神明の幣に。詞四大五臟を探され正體見られし腹立や。地生け置
 いて己れら人に語れば我が身の仇と。兩の腕ゑいと引きあけ。二つにさつと引裂きしは、フッ薄
 紙裂くが如くなり。地なう怖やと腰元下婢身の毛を立てて逃げ惑ふ。ヤア逃ぐるると逃がさう
 かと。大手を擴けて追廻はず。フシすさましかりける勢なり。地折しも天津兒屋根の臣奉幣に



参りかかつて。此の有様見るよりつと距離隔て。ヤア心きたなし岩長姫。妹なれども開耶姫は后妃の位恨み妬むも恐れなるに。剩宮中といひ三種の神器の尊前にて。神も君も憚からず法を知らぬは畜類同然。汝も大山祇の娘ならずや。恥を見ぬさき罷出でよとはつたと睨んで怒り給へば。岩長けらくと嘲笑ひ棟梁の臣何ともない。討たれうが斬られうが。本望遂けずば動かぬと睨みかへす瞳の光。人間ならぬ鬼畜の相扱こそ變化ごさんなれ。いで物見せんと掛巻も。賢所に駈上り神鏡抱き奉り。頭に捧げ口には天津太祝詞。悪女が眉間に差向け差當て。千早振る。く和光の稻妻閃き渡つて。岩長姫の瞋志の巖も碎くるばかり。五體を締め身をふるはし。驕慢我慢の勢ひ絶えてよろくと。足弱車の廻り歸れば追立てられ。追廻しく。又立戻ればおうく大床。フシさして追下す。地かゝる騒ぎのあるぞとも。知らでや素盞鳴おのづから。戀にフシ揉まるゝ御姿。開耶姫を奪取る迄と人目を包む通路の。門も築地も飛越えて恐るゝ關は恐れなく。もしもや我を咎むかと驚く物は風の音。忍ぶにつらき月影のさしにも猛き御心も。わりなき思ひにかきくれて爰よりや入るべき。彼處よりや入るべきと前後に迷ひ立ち給ふ。殿上臺盤の方に叫ぶ聲しきりにて。恐ろしや凄しやと。逃出づる上臈を袖に控へて是

是。同いかなる騒動氣遣ひさよとの給へば。なう申し岩長姫は變化にて。誠は鬼の正體顯れ早苗の局を引裂き。御座の間近く入らんとせしを。兒屋根の臣様御鏡を以て追拂ひ。地御殿の騒ぎなう怖やといひ捨て散りく。フシばらくにこそ逃出でけれ。詞ム、ウ扱はきやつ丸が討手を蒙りし。美濃の國の惡鬼が化身よな。退治延引の間を窺ひ十握の寶劍を盗み。此の日の本に劍の威徳を削らん爲の惡魔の所爲。丸が預る寶劍を盗まれては末代の不覺。蘆原國の武勇の破滅我が恥辱と。地寶殿に駈上がり御箱の秘封ふいと捻切り。御劍を御身にしつかと携へ。サア神通自在もなさばなせ寶劍は渡さじと。獨りごととして在す處に。思ひもよらぬ籠中より天稚彦つゝと出で。詞内裏に惡鬼顯れしと承り。御跡慕ひ駈付け方々尋ね申したりいざ還御と申しける。ヲ、出來したく。一大事は此の寶劍。汝供奉し館に納め油斷なく守護し奉れ。地丸は此の紛れに開耶姫を奪取り。追付け伴ひ歸らんと。うたてや御劍をやすくと渡し給へば押戴き。詞君しろし召さすや彼の惡鬼と申すは。天にあつては雲の八衢に住み。地にあつては八方八隅に遍滿し八色八面の惡蛇。此の寶劍を奪はん爲。大山祇が娘と生れとつくに取るは易けれども。相殿にまします鏡の威光におされたり。地八萬年が其の間念をかけたる此の寶

劍。望み叶ひし嬉しやな岩長姫は我なりと。いふ聲も山彦の鬼女と顯れつゝ立ちたり。尊いらつて牙を嚙みエ、口惜ししたばかられし。八萬年の望なりとも半時持たせ置くべきかと。御怒りに顔色もあらくすさまじや荒神の。天の蠅切抜きそばめ。禁裏雲井の樓閣の。神殿本殿廊下渡殿御階のもと。切りかけくほつ詰められて通力の。電光石火水の月。前に顯れ後に消え。震動雷電頻りにて。内裏も虚空に廻るかと兒屋根の臣を始として。雄走の臣速日の臣。三十二臣四方を堅めもらさじ物をと詰めかけたり。惡鬼が身より火焰を放せば尊の劍の稲光。恐れて虚空に飛上り。其の高さ七多羅樹たとへ天地は覆るとも。取つたる劍は返すまじと。逆手にとつて柄頭より。ナホス地鬼一口に吞むぞと見えし。コハリ朝拜殿に尊あれは齋機殿に惡鬼あり。齋機殿に駈入り給へば新嘗殿に惡鬼あり。新嘗殿を追詰め給へば。殿上晝の御座ナホス夜の寢殿を行違ひ追廻し。惡鬼の叫喚尊の雄詰。太刀音足音ゑいや聲大地も裂くる。三重ばかりなり。地惡鬼が飛鳥の翺りをなせば。尊は射る矢の早業猛く。爰に追詰め兩腕切り。彼處の詰りに兩脇薙ぎ。踏伏せて首打落し。太腹胸骨五體を八段に切碎き。腸をすたくに切りさばき見給へども。呑んだる寶劍あらざれば勇みに勇む素蓋鳴の。彌猛心の力もつき。フシあきれ。はて

まします處に。コハリ魔風どつと梢をならし。切離れたる八つの死體うごめき出でて集り寄り。一團の火焰となり寶劍をひつ包み。響渡り鳴渡り。ナホス車輪の如く舞上り。フシはためき閃めき飛んで行く。地尊は身をもみ拳を握り翅なれば飛行なき。虚空を睨んで立つ空に。雲を巻込む魔風さらさらくくくくくくくくくくく。四大海のあら波の。天にさか参、如くにて其の行く方は天さがる。カカリ國の果島の果海龍王の棲家まで。探し求めず置くべきかと無念の涙。はら／＼はら／＼。兄弟の月讀日讀も照覽あれ。寶劍を取らずんば都に歸らじ地は踏むまじと。誓ひを堅め踏堅め。踏んだる土や粗金の金鐵の徳備つて。強きを破り剛きを割り。硬きを砕く午頭天王。末世の惡魔疫神を防ぐ。神威ぞ有りがたき。

第二

118 地萬古目前の境界懸河渺々として巖岬々たり。山復山何れの工か青巖の形を削り成せる。水復水誰が家にか碧潭の色を染出せし。天より降りし殞山見上ぐる峯も森々と。萬木雲を貫けば月日の影も目に見えぬ。フシ鬼栖む山ぞ恐しき。地厄神の首領三熊野大人眷屬部類の惡鬼邪神に圍繞せられ。黒雲に跨り坐し。猛虎の吼ゆる如き大聲にて語つて曰く。調扱も蘆原國の始め天照

大神に責付けられ。我等が類人民に仇をなさじと。手形の誓ひなしけるに。地我其の時は八重の汐合に隠れ住み。彼の手形に外れし故。此の度當國山に住居し。風水山嵐霧霞と變じ。人民に邪氣を吹きかけ惱まし煩はしめ。氣をのみ血を啜るに日本人肥えて血の味あまく。眷屬の汝等まで腹を膨らす事唐土天竺に勝る。調然るに素盞鳴尊といふえせ者。討手を蒙りあれ／＼あれを見よ。麓に數萬の軍兵鐵を揃へ。鉾襖を作つて攻上る。そも素盞鳴なればとて何程の事あらん。地通力自在は此の度水を卷上げ火焰を降らし。身を隠さば芥子に入り。顯れば天に跨がり。軍兵蹴殺し踏殺し。力立する天稚彦が細首引き拔手足をもぎ。尊を捕つて八ツに引裂き梢に曝し。日本を魔國にせん。勇めや進め眷屬ども。怨々やつと喚く聲。雲に笈の木の葉を鳴し。麓に響く関の聲。石を降らせて雨交り土風山風。三重一セイ、尊の昵近天稚彦。拔斷の功名し目を覺まさんと夕闇に。地物の具取つて肩にかけ。同じ毛の甲の緒をしめ。コハリ丈なる駒に鞭くられて。舍人も連れず只一騎。陣所を出でて鬼神の棲む繁みを目がけ歩ませたり。春雨の足もしどろに雲深き。地嶮岨巖壁九十九折。詭俄に吹來る風の音に。駒は頻りに高嘶きし。地フシ身顛ひしてぞ立つたりけれ。調ヤア怪しからぬ空の雨風。鬼殿そびをかはるゝな。ム、それ好い

た面白いと。地鏡ふんばり鞍かさに突立ち上がり大音上げ。詞只今先陣の若者を誰とか思ふ。忝くも天地同體の御神。伊弉諾伊弉册の尊の御子。天照太神の御弟武勇力の譽れある。素盞鳴尊の膝下去らず。天稚彦とは我が事。手形外れか手形を背くか。三熊野大人蟲とやらんに見參せん出合へやつと呼ばはつて。地山を睨んで控へしは。如何なる天魔疫神も、フシ恐れつべうぞ見えてけり。地山はひつそと靜つて答ふる物は嵐の音。エ、聞いた程もない鬼ども。一疋も面出しせぬは天稚彦が怖いか。出でよくと乘廻しく、乗据ゑてひらりと飛下り。詞折角寄せても先陣の證據なくては後日の不覺と。地指添抜いて松の荒皮押削り。腰指の石筆嚙濕し。今月今日當山に先陣をかくるといへども。詞臆病の鬼ども一疋も出合はず。近頃弱味憎鬼味憎の汁かけ鬼、喰残す残念々々。地素盞鳴尊の御内。天稚彦十八歳と、フシ大文字にぞ書いたりける。地時に山谷鳴動し。コハリ古木を吹折る一嵐頭の上に落ちかゝり。一丈餘りの鬼の腕朱ぬりの熊手といひつべく。毛は金銀の針ばりく。甲の鉢をナホスむんすと攔んで引上げたり。ヤアしほらしい引かれはせじと兩足しつかと踏みしめて。鐵に手をかけうんと留ればゑいやと引く。ゑいやくおうくわんと引いつ留つ、人力魔力。暫し勝負は粗金の。土を離れて引上

けしは、フシ釣瓶を釣つたる如くなり。地太刀を逆手につけども斬れども手答へなし。さしつたりと取直し切つて放す忍びの緒。主は大地へどうと落ち。甲は雲間に引入て。虚空にどつと笑ふ聲、フシ山も。崩るゝばかりなり。地臆病の癖高慢者。鰐香背大きに腹を立て。天稚に先陣越されし奇怪と。軍勢引具し一散に馳來り。詞軍大將を出し抜き制法を破り。拔断せんとは推參と聲を荒らけ罵れば。いやさ手柄は仕勝ち。味方同士の廣言いふ手間で。鬼に向つて一句も出るか聞きたい。地ヲ、覺えがなうて大將がなるものかと壹越調をかすりあけ。詞抑惡鬼追討の勇將、素盞鳴尊の執權。軍大將鰐香背の臣とは我が事なり。名を聞いてさへびつくりせう。顯れ出でて怪我せうより。怖くば何奴も出をるなといかめしけに呼ばはれども。フシ胸はわなく顛ひけり。地諸卒を下知して天稚彦。さしつめ引きつめ射かくる矢先。惡鬼も堪へず爰の梢かしこの雲間。異類異形に身を變じ。土石を飛ばせ火焰をはなち。人畜兩陣入亂れ火水を散らして。三重へ挑み合ふ。地寄手は大軍四方八面に切立てられ。鬼だまいにくわつくとフシため息ついてぞ控へたる。地其の中より犢牛の二疋づれ。鐵杖提げ三熊の分身隠れなき。詞滅鬼積鬼といふ早業。鰐香背が名乗りやうしやらくさく人臭く。鼻がひこく香し。サア

出て勝負せい。地汝等が世話にいふ如く我等が煎餅嚙む様に。がり／＼嚙んで呑まんすと大口あいてぞかゝりける。詞に似ぬ鰐香背がた／＼ふるうて逃けんとす。天稚彦草摺とつて引戻し。詞敵に聲をかけらるゝは弓矢とる身の好む所。軍大將のお働き見物せん所望々々。地一いくさと突出されてふるひ／＼抜合せ。二打三打うつと見えしが。滅鬼積鬼がちらつく早業。打立て／＼ほつ立てられ。エ、血醒い鬼どもむさい／＼とかいふつて。味方の陣へ逃入りしをフシ笑はぬ者こそなかりけれ。地勝に乗つて追かけ来るを天稚隔て渡り合ひ。上段下段に斬結び。飛鳥の翹の手を碎き。弓手馬手へ切散らしをめいてかゝる眷屬ども。得たりやおうと聲をかけ。當る者を幸に落花微塵に。三重へ斬散らす。フシ大將三熊。地三尖二刀の鋒かる／＼と横たへ。づしり／＼と搖ぎ来る。鰐香背きつと見るより何でも爰は思案所。彼奴を討つて天稚に鼻あかせ。今の面目雪がんものと。鬨をすゑても齒の根が合はず。間近く来ればびつくり狼狽。ア、／＼待ちや／＼草鞋の緒が解けたと。屈むる弱腰むづと取り。うんと差上ける／＼と振廻し。大地へどうと打付け既にかうよと見えるが。天稚すかさず飛びかり只一討と振上ぐる。太刀の柄むすと掴んで引寄せ兩の膝に引敷いたり。ヤアどつこいおのれにしかれうかと。跳返

さん／＼と揉合へども。大盤石を負ふ如く。フシ眼も飛出るばかりなり。地素蓋鳴遙かに御覽じ百獸の洞の内。獅子のたける如くにて一文字に駈付け。三熊が頂を掴んで軽々と差上げ。岩壁にどうと打付け胴骨をしつかと踏んで突立ちあがり。怒れる御聲にて。詞汝いかなれば我が國に溢れ出で。岩長姫と生をかへ。丸が預り奉る寶劍を奪取り。神國の寶を失ふは國を傾げん爲か。丸が勢を押へんためか。庭上にて呑んだる寶劍。地何國にか隠せし出せや出せとはつたと睨み。退散魔軍の御足にかけ。寶劍出せと踏付け給へば。通力自在の三熊も天孫自然の威力におされ。苦しげなる息をつぎ。詞あゝら畏れあり何故にか。此の國の神寶を奪ひ奉るべき様更になし。彼の寶劍と申すは出雲の國簸の川上。鳥上の嶺に億萬劫を隠れ棲む八岐の大蛇と申し。一身八頭の大蛇奪ひとり。鱗の皮肉に隠し置く。彼の大蛇を滅し給はば寶劍再び神寶となり給はんこと疑なし。地全く我等が奪ふにあらず命を助け給はれと。はら／＼と溢す血の涙。鬼の泣くのは人よりも。フシどうすけなうて哀れなり。地尊あざ笑はせ給ひ。詞當座の命を遁れん爲。丸を欺く愚か／＼。汝が奪はぬ證據を出せと踏付け給へばア、申し／＼御疑ひ御尤さりながら。天地の間の惡鬼惡蛇。同類同性とは申せども司る役々に變りあり。我等は疫神の首領四

百四人の眷屬ども。人間に四百四病をあたへ。業の盡きる命は取り。非業の者は殺し申さず。神は正直鬼神には横道なし。世界の人が無病で死なぬ例もあれ。微塵も偽り申さず末世末代の人間。尊の御名を稱する者守護神となり申さん。地今の一命お助けと首領が頭を下付ければ。在合ふ眷屬一同に。御免々々と泣く聲は。數千疋の犬狼。フシ一度に吼ゆるが如くなり。地尊得心まし／＼ヲ、いしくも申したり。助くべき物ならねど。寶劔は八岐の大蛇が取りたると。告知らせし恩賞に依つて眷屬に至る迄。此の度の命を助け置く。重ねて我が國に仇をなさじと誓ひの手形。地天照神の御神制に任すべしと。肩骨つかんで投退け給へば。有難し／＼命助かる手形なら千枚でも致さんと。眷屬どもも活々と喜び勇み跳ね廻る。フシ鬼踊とも云つづけし。地鰐香背天稚聲をかけ。詞ヤア／＼御前なるわ静まれと。地一紙の巻物着到。硯一疋づつ罷出で。名乗つて手形仕れ。あつと答へて歩みくる。オクリしらが。交りの蓬の髪。杖に縋つてフシ屈み腰。地彼奴は鬼のコハリ家老かや。いかなる病の神やらん。さん候某は冬の雪の夜秋の霜。寒氣の折々蟲となり。鰐香背殿の腰の廻り。御見舞申せしお馴染の痲氣の神。御見忘れは曲もなし。當代人間賢しくして胸へ上れば橙の實足へ下ればふじ三里炙と鍼とに行方なく。

近頃慮外なナホス小袋に屈みますると顔しかめ。手形捺してぞフシ入りにける。フシ△次に出でしは目の内まで。眞黄に染まる朽葉色。木の葉衣のうらぶれて黄なる涙に袖濡れしを。天稚きつと目利して。疑もなき黄痘神。汝の手では判の色も違ふべし。念を入れて手形おせコハリ〇扱も見脈お見立の奇なるかな妙なるかな。別けてはどうも口なし色。只御推量お吸物。我等が禁物名を聞いても蜆汁。殻も怖いあら怖やと手形捺し／＼押分けて。ぶり／＼慄ひ出でたるを△鰐香背早く聲をかけ。我も目利は劣るまじ。邪氣瘡の眞最中と。見た目は三寸ナホス違はせぬ。フシいかに／＼と問ひかくるコハリ〇いや／＼大きな薬違ひ。某は中風の神名は半身と申す者。桑の箸さへナホス左の手フシ口をゆがめて入りにける。地△續いて見えしは水膨れはつたり／＼腹の皮。可笑しさこらへて天稚彦。言はねど水腫脹満神。二人申すに及ばぬ鬼の口とつてかも瓜山牛蒡。薬喰の其の印おせばおす手に水たりて。判も薄墨片隅から亂れ髪にして切りかけ。氣へん／＼と咳上げて。鉢巻水鼻誰やらん。地〇されば候某は。暑や寒やの風の神。手療治の生薑酒敗毒散に追出され。一汗さつと流れかゝりし橋杭の。悔の八千度百度も。フシ送られましたとコハリ捺しにける。其の外癰疔腫物の一統。虚癆陰去火動神。腹痛頭痛の頭神。急難急病内損外損。

既内瘴癘の神に至るまで残らず手形を顯せば。巻軸は首領の三熊。左右の大手をしつかと捺し
 葦原國の人民は。無病息災延命と。ナホスイふ聲ばかり一紙に残り。立舞ふ霧の嶺山惡鬼は。フシ
 消てえ失せにけり。地尊は猶も御威勢の。慶賀の聲や勝鬨の。謠聲に打添ふ松の風。く辟く
 草木や日月のナホス簇を。なびかせ 三重へ歸洛ある。フシ尊の御威勢。地隠れなく天津兒屋根の
 臣勅詭蒙り。梓川原に平張打たせ。文武の下司左右に従へ棟梁の臣下の預り。天の逆矛屋形紋
 の錦に恭しく。其の身は床几に悠々と。フシ尊を迎へ待ち給ふ。地先陣の天稚彦いきりきつて走
 り付き。詞ハア兒屋根の臣の御出かと棧敷の前に膝をつき。君此の度惡鬼を鎮め御凱陣隠れな
 く。悦びの御迎へと相見え。御念入る段御苦勞千萬。いやはや近國の悦び。お通りの道筋。土
 民嬉喚童。までが御恩のため道を清める。箒よ土よと足を空に駈廻り。所々の領主郡主が出迎
 ひく。一樽を捧げ御馳走。御内の我々迄行先の御酒で道抄參らず。此の棧敷尊あれより御覽
 じ。又隙取つては都入延引す。先へ走りて斷り申せとの仰せ。兎角御隙のとれぬ様に。一刻も
 早く御歸洛あるが御馳走。さつと御悦のお盃ばかり。お吸物など御無用。諸軍勢も認めよし。
 何にもお構ひなさるゝな。はれやれ大きなお心遣ひ。地はや御旗の手の見えたれば御馬も近

付き候。聲もはやり雄素蓋鳴のお馬も進む轡の音。凛々たる威風。フシあたりを拂つて見えにけ
 る。地天稚かくと坡露申せば手綱を控へ。詞是迄の出迎ひ過分々々。思ふ儘に惡鬼を鎮め國靜
 謐推量せられよ。片時も歸洛急ぎたく殊に凱陣の路次。馬上用捨に預らんと。乗出し給へば天
 津兒屋根飛んでおり。端出の注連繩渡して道の真中を遮り。尊に向つて大音上げ。詞和君も二
 柱の御子。天照神の御弟なれば御存じの事ながら此の注連繩は日の神窟を出で給ひし時。我等
 が先祖此の繩を引廻し。又な窟へ入り給ふなと奏せし故。神も此の繩越え給はず。長く此の國
 に留り給ふ御注連繩。地サアならば越えて見給へ都の方へは一足も叶ふまじ。日月の御旗を渡
 し遠き韓國根の國へも。逐電あれと案に相違の顔色。尊を始め諸軍勢。フシ呆れ果てたるばかりな
 り。尊馬より下り立ち給ひ心得ぬ事を聞くものかな。詞誤りあつて越ゆるならば。法を越え制
 を背くとも謂つつべし。宣旨に任せ惡鬼を鎮め手形をせさせ。凱陣する素蓋鳴何事か誤る。踏
 越えて入洛せんサア來れ軍兵と。既に御足を上げ給へば兒屋根の臣太刀に手をかけ。詞ヤア是
 是。誤りなしとは猿の頬笑ひ身の上知らず。美濃の國の惡鬼退治を功に立てられんとは愚か
 愚か。其の爲にこそ日月の御旗を預け軍勢を付けられし上は。それ程の手柄はなうて叶はぬ

筈。シテ葦原國三の寶の其の一つ。十握の寶劍和君の好色戀慕より。化生に奪はれ給はずや。地既に出陣の時此の寶劍取らずんば。帝都の土は踏むまじと。天に仰ぎ地に向つての誓言はサア。覺えてか忘れてか。誓ひを背き手ぶりで歸つて神の式を越えんとや。僅か細き繩なれども一筋是を引く時は。内あり外あり上あり下あり四方あり。繩を取れば内外上下の別ちなく。闇も同然是。一心を表する繩。心に注連を引く時は。主従親子忠孝禮義の別ちを知る。是を別つを神ともいひ人ともいふ。分ち知らぬを鳥類。畜類とフシ名付けたり。今畜生の數に入つて越えたくば越えられよと言四海を覆ふの詞。ことわりかな末代日本文武の政を司る。攝政關白の元祖。春日大明神と顯れ給ふは。フシ兒屋根の臣の御事なり。地誠の道理にせめられてさしもに猛き素盞鳴も。雲を放れし雷の桑の立木に挟まれて。苦しむ形も斯くやらんしをくとして詞なくスエテ差俯。向いておはします。詞鰐香背旗竿取つて搔込み。ア、正直過ぎたり我が君。常々申すは爰の事。帝の爲に親同然の御身がら。開耶姫の戀慕少女一人さへ御手に入れず。剩へ御命を的にかけ。惡鬼退治の討手過分とも御太儀ともいふことか。息もつかせず未だ寶劍が足らぬとは。悉皆帝の使ひがらし。地下郎下人を雇うても禮をいひ賃を出す。徳もなき

無駄働き同じ手間では此の御旗を押立て。棟梁顔する兒屋根の臣を討つて捨て。直に都へ斬入り瓊々杵帝を追下し。君御位に即き給は。后も寶劍も居ながら天下は御心の儘ならずや。エ、言ひがひなき御所存や。御謀叛思し立ち給へと鰐が魅入りし惡性根。尊殆ど打領き。馬引寄せよ旗上げよと御謀叛の。フシ氣ざし顯れたり。地天稚彦鰐香背が持つたる旗竿ひつたり。御膝元につゝかかり大地を叩いて。詞エ、く口惜しの御所存やな。厄神どもに手形をせさせ給ひしは昨日今日。其の手形は何の爲。日本の人民を惱まさじ。國の妨致すまじとの手形ならずや。今御謀叛の思ひ立。天下を覆すは國の妨民の煩ひ。鬼畜に劣りし御心。地甚深不識の了智を具へし兒屋根の臣を輕んじ。愚同然の鰐香背風情に言廻され。天孫の御身を危ぶめ給はんあさましさよ。御爲大事と存するゆゑ。慮外の詞御免あれとスエテ涙を。浮め申しけり。地尊大きに御氣色損じ。詞ヤア諫言だて聞きにくし。鰐香背は命にかへての忠節。己れは命を惜み軍を恐れ。忠節に托け身を遁れんとの諫言。地卑怯者臆病者と御足にはつたと蹴散らし給へば。起直つて鰐香背が襟髪摺んで引きよせ胸板に乗りかゝり。心元を三刀四刀刺通し。返す刀を其の身が鎧の引合せ。肋をかけて突込んだり。士卒あわて、駈寄るを。詞ア、寄るなくと押留め。假屋

の方を後目しりめにかけ。愚人千人萬人より兒屋根の臣の思召。黄泉よみの底迄恥かし。地命を惜み軍を恐る、臆病とは。餘りなる仰やな。十一歳の春より片時お側を離れず。宮仕へ申せども斯く情なき御詞。遂に耳に觸れもせず。非道の御謀叛に討死せば。なんほう命ヲ惜しかるべき。うぬが身を立てん爲悪事を勸むる鰐香背を。君忠臣と御覽あり。我等は不忠佞人と見て討つて捨て。腹搔破り命を捨て諫言申す。臆病者の所爲を御覽ぜ。我が君なうと諫言は磐石の。詞は重く一命は、フシ露より軽く消えにけり。天津兒屋根も兩眼に感涙をかけながら。尊の前に突立ち。此の御矛と申すは。女神男神の御代を治め給ひし天の逆矛の御形。執權の家に預り傳へ。國の賞罰是にあり。地尊の科を今打つ杖。姉御神の御手を貸し給ふぞと追取りのべ。丁々磔々打つや現とも。夢とも分かず茫然と、フシ忽ち御心翻へり。地しさつて逆矛頂戴あり返し捧ぐる御旗の印。輝く日月と。共に晴行く御心を、フシ諸卒もあつとぞ感じける。地尊盡きせぬ御落涙。兒屋根の臣の誠の杖。天稚彦が忠義の死骸。我が父母の教も此の上のあるべきか。寶劍を取返し身の誤りを解くまでは。供も連も頼まじ只我一人身を懲らし。形を苦しめ心を痛め。雨に打たれ嵐に臥し天地の責を受けてこそ。罪も少しは、フシ晴れやせん。暇申すと出で給へ

ば。兒屋根の臣も悼はしき破れし賤の蓑笠を。旅の舎と參らすれば。スエテ共に涙の雨よりも。天を恐る、竹の笠。昨日の冠引替り國を憚る菅蓑は。今朝の錦の移り果て。高き位は時の間に賤の奴と窶れ行く。猛くさとしき力にも。押すに歪まぬ逆矛に。うたる、君が非をあらため。臣は諫めて打つ杖の盡きぬ。名残や溢る、涙包むにあまる雨雲の。立ち別れても天地の。まことの道の末直に引く。注連繩や永き代の人。掟となりけり。

第三 三

葦原や天地人も開け初め。榮えにけりな逆矛の。雫の玉水のかゝる時しも生れ來て。民も豊に耕せば稻は八握にナホス粟。賑ひ優る、フシ秋津洲や。地吉備の國の百姓食保の長が總領。巨且將來近郷一の田地持ち數多の家子下男。まだ東雲の暗がりより引出す牛に犂や。擔けて出づる鋤鎌の苦は人間も變らめや。巨且將來養子宇賀石いざなひ。油断させぬ人使ひ。詞やイ〜男ども。田も畠もくひさいた様で抄がいかぬ。樋の口通りの八反田今日晝までに鋤きしまひ。山つゞきの麥畠水溜めるな。畦々へ蹴入れ随分水に油断すな。地麻も追付け蒔き時分東の岡に蹴の刃を絶すな。茶園の草引け大豆小豆の芽を雉子に喰はすな。苗代の鳥追へ。童郎ど

もは牛の食物事か、ぬ様に堤縁の草刈れ。是宇賀石百姓の子は小さうても、ぞべ／＼と旦那顔して埒明かぬ。地尻引寒け籠籠け大根引いて持ち習へと。何の用捨も七つ子の裾ねぢ上げ。蹴でつき出す太股は、フシ引く大根より細からめ。妻の五百機走り出で。何程大事の大根にて彼の子が引かねば叶はぬか。地五年以來夜泣して色悪う瘠せる子を。風に當て露を踏ませて好いものか。内との者ども早う往けいとし者を何の鳥へやりましよ。これ奥へいて暖かにして遊びややいのと押し遣れば。詞いやく／＼育てが甘さに病者になる。只養ひしようより鳥に立たせ。鳥威しにでもしてのけたが、地よいわいと。愛敬なき夫の顔見る目の中は涙ぐみ。ア、今更いふではなけれどもつれないさもしい心かな。夫婦の中の子ならば囀寵愛を見るやうな。弟御蘇民將來様の獨子を養うて。胤腹はかはれども水いらすの甥子ぞや。育てに物が入る事の。父御様の養ひのと。弟御の田地も上田残らずなだれとり。詞其の上に奪者榮耀者。讓の田畑も失うたと。耳も聞えぬ父御様へ弟御を讒訴し。地親子中を割きながら。さらばこなたが孝行でもある事か。着類食物不自由な目を見せまして。罰も冥加も思はずか。地殊に我が身此の如く懷妊身持ちになりしより。人とも水とも知れぬものを總領に立てたさ。詞宇賀わが疎ましく科ない子

を憎みたて。生けうが死なうがあるなしに育て、は。地人は愚か草も木も雨風を防がねば。色よいフシ花は咲かぬ物。地蘇民様は兄親と蟲を殺し給ふとも。婬の恨世間の口夫の慙毀包むゆる共に邪見の浮名をとる迷惑は我ひとり。詞田地も返し弟御の身代立てば。父御の孝行其の身の威勢であるまいか。地眞實の意見する者は女房ならで外にない。少しは聞入れあれかしと諫め。かねてぞ泣き居たる。ヤア詞聞きともない又しては同じこと。人に褒められ兄弟思へば損がい。弟の蘇民將來が道だてひろいて貧乏かはく。此の巨且は人が憎み譏つても持ったが病。仕合せと親父は豊何がどうやら聞かすにすむ。地内儀の御意見聞く手間に野を見廻し。一寸なりとも地を廣けうと立出づる門口。弟嫁の賤機。莞爾はやく／＼會釋こほして。御機嫌取りの追従顔。詞ムウ、是は御夫婦ながら内方にかちと御見舞とやすらへば。ようこそ／＼餘所他人でもある事か。遠慮なしにサア爰へ。蘇民様はおまめなか。こつちに父御様始め變ることはなければども。只宇賀石の夜泣が今において止らぬ。ア、おまへのいかい御苦勞。ア、何のいの。腹痛まずに此方に産んで貰うた子。地それ程の苦をせいではと。婬中のむつまじき巨且將來鼻に皺よせ仔細顔。詞是賤機。百姓の忙しい最中。爰らへ來てべらく／＼と隙入れて貰ふまい。地いふ

事濟んだらお歸りやれと、フシ愛相なき詞付。調いかにも御意の通り人の手も我が手にしたい時分。此方の蘇民殿作るべき田畑はおまへに取らるゝ。残つて半畝か一反に足らぬ所。一日か半日にはつひ鋤きしまひ。永の日を遊んで居て行末の詰らぬ事。どうぞお情に半分ならずば。せめて三分の一田地戻して下さる様に。五百機様まで申せとの事。まだ此の上に添へて進上と申さば御機嫌もよい筈。地取返すと申すは御氣に入らぬと知りつゝも。言はねばならず申すも迷惑。我が物故に骨を折るとは我々夫婦。調ヤ何がなのお土産と思ひ寄る珍しき物もなし。此のお守は聞きも及びなされたか。素蓋鳴尊様寶劔とやらを失ひ。大内を追出され流浪のお姿で。二三日此方にお宿を召され。明日か明後日出雲の國へお立との事。則ち是は尊様のお寶疫神の誓紙の手形。地是を頂戴せし人は。惡病難病を遁れ。萬の災難を拂ふお守。宇賀石の夜泣御老體の父御様。御夫婦も戴きて息災延命なる様に。暫しが中申し下し借受けて参りしと差出す錦の袋。巨且將來悦び三度戴き。是ぞ内裏に傳はる三つの神寶の其の一つ。神璽と申す天下の寶。調四五日以前雨風烈しき夕暮。養笠惜れし旅人一夜の宿と頼みしを。非人か又は盗人の引入れかと思ひ。叩かぬ許に叱りこくつて追出した。エ、残り多い。聞けば素蓋鳴尊蘇民が方に泊めた

けな。蘇民の癡者。此の寶を奪ひとり。帝へ上ぐれば御褒美恩賞方圖は知れぬ。是をぬつくりと持たせて置く其の律義から貧乏する。今巨且が手に入れば招かぬ福德。此の寶を以て我も巨且大王と呼ばれ。大國所領の主となる時。薙二三枚敷の田地は。地裾分しようとして歸つていへとつゝと立ち。入らんとするを五百機驚きわゝり付き。あんまりな無理無體。きたない慾心持たうより。いつそ綺麗に盗みしたがよいわいの。サア返しやるかサア如何ぞ。エ、男をもどく出過者とはつたと蹴のめし入りければ。チ、踏まれうが撲たれうが非道をさせて見ては居ぬ。賤機様恥かしい常住我儘ぼつかり。明けても暮れても言合つてゐるわいの。待つて下され。取返しで遣らうぞやと續いて、フシ奥に入りけり。地賤機あきれ氣も上り。エ、悔しい事をした。心を宥め田地を取る輕薄に。大事のく天下に、一つの御寶を借り参らせ。ふかなくと手に渡せしは何事ぞ。調此の身をすんぐに刻まれうが微塵に碎かれうが。取りもどして尊様へ差上げいで置く物か。多年の恨夫婦が胸に積れども。獅子を養はれ慘う辛う當らうかと。無念を押へ打過ぎしは宇賀石といふ質を取られ居るゆゑ。地其の無得心からは定めて宇賀石も殺してがな棄てつらう。サア其の守りもどしや。但それへ踏込んで聊爾をするが合點かと。思ひ切つたる面

色にも我が子は如何にと四邊にッレ目をぞ配りける。地巨且將來宇賀石小脇に提け。詞こりや。此のがきめ養ふも田地取らう爲。女房の腹に總領が芽づくつた。彼奴はいらぬ連れて歸れと投出す。ヲ、返さずとも連れて行く。此の子を取れば氣が廣い最う樂ぢや。是巨且殿兄御殿。蘇民將來を弟と思ひ侮つても魂があるぞや。今の寶は申すに及ばず。田も畑も藪も林も。今の間に取り返して見せう。地待つていやと駈出づる。五百機走出で宇賀石が兩足しつかと抱き。待つて下され賤機様。總領に立てんと契約で貰うた子。今戻して二人の親世間へ顔が出されうか。身によどりし子胤を湯水と流し捨つるとも。世繼は此の子其の儘置いて我々が。一分立て、下され守りも何も呑みこんだ。此の五百機が返さずと引留むれば。なう恐ろしや大事の子。火焔の中から拾ひ上げたと思ふ物。片時も爰に置かうか。サアそこを放しや。イヤ放さぬと兩方義理と恩愛に。涙手詰の宇賀石がステテ母様なうと歎く聲。地巨且將來守刀提け。詞ヤイ女め。胎内に總領持ちながら彼奴をとめて何にする。地放してやらすば此の餓鬼奴胸中より切放す。サア何とこりや〜〜と閃かす。刃も危し放しもやらす只はあ〜〜とッ身身を冷す。地エ、あた面倒なと振上ぐる刃の影。流星は生みの母心我が子を悲しみ堪へかねて。放す拍子きる拍子二

つ拍子の間違ひに。跡を切つたる切先椽框に切込んで。抜かん〜と閃く間に母どつこいと掻潜り。嫂の手をもぎ放し頭の堅き宇賀石と。抱きしめ〜。こけつ轉んづ走り行く心。嬉しや三重。歌在所女郎衆は皆よい聲で一に麥唄ナ二に茶摘唄。三に早苗唄四に仕事唄。歌で石臼かろがろとサンヤレ。ナホスッさかろ〜と。地鋤蹴の柄や長き日に畑打つ賤も肩脱ぎて。暖かけなる春の水井出の。樋の口ッせき入れて。爰にかしこに小田返す。東田も五反田。西田も五反田。ッ中の畦道。来る人は。地巨且蘇民兄弟の父食保の長。齡も今年米麥の田畑見んとて鳩の杖まだ足許は若草に。上る雲雀の水鏡顔は。老いても目性よく。耳こそちと遠山松の。霜雪経ても膝腰は。根張強なる柳蔭四方を。ッ詠めてやすらへば。地嫂五百機敷物かたけ。詞おういおうい。是はまあ〜お年寄のいつの間にもやら。人も連れず危なや〜。地爰で少しお休み酒はあがらすお慰みにせんじ茶でも。茶辨當云付ましよといへども耳の餘所に吹く。詞ヲ、風もなうて長閑な。去年のいつからか久しう田畠を見ぬ故に。よろり〜と出たれば又わつさりと氣が晴れた。堤の芝が青々と躑躅杜鵑花が早や咲いたの。されば〜梅櫻が散れば菫蒲公英花は絶えぬ。氣の養生になります。ヤア〜なんといやる。ア、しんきやの。是梅や桃や櫻が

散れば菫蒲公英花は絶えず。氣の養生と申す事。ヲ、く、よう知つてぢや。梅干を酒鹽で喰へば痰の藥さりながら。もう此の年で養生して何にしよ。腰膝抜けず心面白い時。ころりとやれば果報々々。イヤく、まだ十七八年も置きまし。腰膝立たず抱いて歩きます。ヤ何ぢや十七八の腰元置いて抱いて寝さしよ。ハテ譯もない途でもないこといやんな。いかな蟲強い腰元も此の爺と寝たらば。破れ障子で骨ばかり味もしややりもおじやるまい。地なう恥かしやくくと笑へば嫁も嘖き出し。畑うつ賤も蹴を捨て、フシ腹をかへて笑ひけり。詞やれく、をかしい親父様。あんまり笑うて胸さきも晝さがり。地休み時いざこいとオクリ皆々打連れ立歸る。地四邊を見廻はしア、思はぬ笑に老の憂を忘れしぞ。なう面は笑へど心の底はをかしうない。詞此の堤の四方八町に五町。家に傳はる我が田地隠居の時三つに割り。二分は總領役そなたの夫巨且將來に譲り。三分一は弟の蘇民將來。あの樋の口から向ふの松迄一霞譲りし上田。口に榮耀身に奢り皆他人の手に渡し。身代ちんふらりと聞くより内へも寄せ付けず。田地を見るも情なく此の邊足はむけねども。地今日ぶらくと是へ來て。ア、重代の田地餘所の物になしたよな。此の地の底にまします埴安地神にも見放され參らせしと。歩み來る。地釘針を踏むごとく。一入

瞞もよろめきて。無念におじやる悲しいと。涙に老を噛みまぜてスエテ聲をも咽に詰らせり。地五百機ひつしと身に響き。おいとしや道理や夫の慾心一つより。弟御の憂目親御の歎き。いへば夫の悪名包むが道か云ふが道か。誰に語りて智恵をかる。フシ人も涙にくれけるが。地いやいや夫を世上にそしらせ女の道はよも立つまじと。思ひ定めて是申し。詞蘇民様の譲りの田地一寸も他人へ渡らず。親御様の御意見にて兄御より弟御へ。憐みあれば御一家素直に睦じし。地是ようお讀みなされやと地をかきならし指を筆。書付く砂のこまくは磨る墨よりもありくと。一字残さぬありのま、オクリ盡きぬ。眞砂もフシ讀盡し。父は驚く鳥の跡。誰が呼子鳥何時の間にかは巨且將來。後の畔の柵に突立ち。きつと見付ける眼は更にそれとも知らぬ嫁舅が。鼻の先ついたる蹴追取のべ。がはと打立て土砂かきませる土煙り。はつと飛びのく顔に砂。かゝる子を持ち男持つ。フシ嫁舅こそ笑止なれ。地怵へ情なき無法者。女房の頬先張りこかし。詞何も知らぬ聲に男の身の上よう告口ひろいだなあ。砂に書いて見せうとは其の悪智恵を身が持てば。まだ分限になるわい。地物書くほど打折つてくれんと飛付く所を父攔みつき。元首押へてこりや畜生め。詞たつた今聞いて驚いた。數年ぬつほりと親をよう瞞したなあ。女房を恨みず

ともうぬが大悪大慾の。魂はなぜ恨みぬ。弟の田畑食り取り。養ふとはどの親。此の親を養ふに何程の田畑がいる。着せる着物の中入は薄蘆の穂さもしい事ながら。朝夕の膳部も五穀はあるかなし。皆椽の實野老の根。地親にさへ是なれば身の始末さぞあらめ。若い者のよい合點と。苦い口を甘い顔して見せつるは、己れを人と思ひし故。可愛や弟の蘇民を裸にし。生きる間もない親に疎ませ中を斷つ。さぞや蘇民が親を恨みん不便さよ。詞宇賀石を返さばねだれ取つた大分の田島。地何故付けては返さぬぞ。人を損ひ獨世に立ちたいとて立たれうか。地神の鳥居の二柱一人は立たぬ。教とかや。地天子の御寶八咫の鏡と申すは。詞善惡を照し給ふ神の御心。地内裏にばかりあると思ふか八咫の鏡は面々が戴く。あの天にましくて。善惡を明らめ聞も利生も頭の上に。忽ち來るとは知らざるか。詞我が背中の垢穢れ我は見ねども人は見る。地心の内も其の通り根性を直してくれ。親は他人の善人より子の悪人が可愛いと。怒つ、泣いつ氣を揉上げ、口説き歎きの親心思ひやられて哀れなり。地巨且眉を蹙め。詞女めよう頼けたを叩いたなめ。是親父。かう生れ付いた巨且今更産みもなほされまい。よしない子の世話やまうより驥を苦にめされと。地叫んでも喚いても耳へはとう／＼瀧の音。急逆せば猶聞えず。何ちや其の

面つき待つてをれ。蘇民に知らせ一國に生恥か、せんとよろほひ出づる畦道。サア通つて見やと蹴よこたへ立塞がる。詞己れが遣らぬとて往くまいか。地此の道からと立戻れば又行く先を立塞ぎ。ならば手柄に通つて見やと振廻す蹴の先。父が胸骨はつたと打たれて畔の崖よりとうと落ち。絶え／＼喘ぐ息つかひ。女房蹴に縋り付き。詞狂亂か巨且殿。親御に疵でもついたらば雲の裏でも言譯はあるまい。地放しや／＼と捻合ふ間に。父起きなほり箆を便りに取付き這ひ上らん。／＼とする所を女奴放せと突退け。打つて威すも不孝の罰の腕先狂ひ。父が耳の根がはと打込む蹴のかねや冴えたりけん。覺えずゑいと引く力水も溜らず親の首。ずんばと切れて飛んだるは、フシ劔にかけたる如くなり。地女房夢の心地にてはあとばかりに絶え入れば。傍若無人の巨且も呆れて顔の色違へ。わな／＼顔ひうつとりと氣もフシうろ。たへて見えてけり。詞エ、恨めしい罰も咎めもない物と。女房の意見を餘所に聞き今思ひ當つてか。地双もない劔で人の首が落ちるとは。日頃の惡業惡心が積つて蹴も劔となり。親殺しの科人とは天道よりなし給ふ。又此の罪が胎内の。子に報はんあさましやと口説き。泣くこそ無殘なれ。地巨且すと立つて裾捻ぢからけ腳踏みしめ。詞よい／＼胸がすわつた。皆女奴が口ばしからと取つて押

伏せ。地腰の手拭口に捻込み押込み。願かけて引括り。帯引つ解き後手に縛り上げ。伺こりやとても悪人の名を取つた此の巨旦。父の死骸を蘇民奴が畠に埋め。地科を弟にぬつてくれうと蹴ひつさけ。善悪二つの畦境。果は我が身の敵石地を掘返し。ほるより深き罪科の。土も砂も身にかゝる後の報いぞ。フシ恐ろしき。土搔上ぐる向ふの道。牛追うて来る人は弟の蘇民將來。ヤア是はならぬと胸騒ぎ。骸を取つて引きすり寄せ。血性が脱けて早い骨の硬りやうと手足押しまけ骨打折り。首投入るる苦の下。やうく埋み踏付け。掻きならし。足跡かくす畠土。是悪業の種蒔と。フシ思ひ知らぬぞ愚かなる。地猶も近付く牛の聲素振りでも見られては。身の一大事何處に隠れん木蔭はなし。道は一筋行くも行かれずいぬるにも稻叢の藁引退け女房引立て押入れて。上には藁を引繕ひ我も木蔭を狩場の雉子のオクリ命。大事と身を忍ぶ。フシ忍ばぬ世さへ。貧しきに。地蘇民夫婦が情深く。素蓋鳴尊に假の御宿参らせ。フシ今日出雲路に八雲立つ。道も野飼の牛の鞍。お腰を暫し掛巻も。冥加の爲とナホス。フシ送り行く。地夫が牛の綱とれば。賤機御笠箆を持ち。主君の如く敬ひし。オクリ心の内ぞ。フシ頼もしき。地蘇民牛を引きとめ。伺見え渡りたる此の野邊は残らず親の譲りの我が地にて候ひしを。兄巨旦に掠められ



我等の地とは是限り。兄の地を我が牛に踏ませんも如何なり。地是よりは御徒歩にて何國迄も御供と存ずれども。兄に取られし惡鬼の手形を取返し。跡より追付き奉らん。詞出雲の國簸の川手摩乳が妻足摩乳は此の賤機が叔母なれば。かくと告げて御宿召され候べし。地誓しも別れ奉る御名残こそ盡きせねと。スエテ夫婦頭を地につくれば。地尊牛より下御成つて。ア、扱も世の人の心には品々あり。過ぎし雨の夜旅づかれ巨旦に宿を求めしに。つれなくも追出せし其の恨み。如何なればお事夫婦。斯くまで深き志。何時の世にフシ忘るべき。我寶劔を取返し三種の神寶揃ひなば。此の恩は報すべし。それ迄の契約一つの祕事を傳へんと。詞畔の柳を手折らせ給ひ是を削り小札となし。紅の房を付け蘇民將來子孫なりと書付け。幼き者の襟につけよ。疫病瘡病疱瘡麻疹。一切の惡病を免るべし。地無道の巨旦が掠取つたる疫神の手形。彼等が爲には守りとならず。其の身に災難來る事三日は過ぎまじき。正直の人にこそ守りの驗もフシあるとしれ。地百姓をさして天の下の御寶とは天照神の御神託。農業耕作怠るな。さらばさらばと蓑笠携へ出で給へば。夫婦は盡きぬ御名残り。御機嫌よく御本望やがてノと見送るも聲も。霞に別れけり。詞何と女房。有難い不思議に高位のお宿を申し。蘇民將來子孫とあら

ば悪病難病拂ふとお詞。末代の寶とは此の事。殊に百姓を御寶と大神宮の御託宣。耕作怠る
 かと結構な教へ。地稼ぐに追付く貧乏なし。サア〜油断ならぬと耒耜の。牛と思ふな牛の
 尾もべらつきや遅い。牛の角文字急げは急ぐさせいほうせい出せば。野らの荒地も上田と
 オクリ妻の賤機立寄りて。地身の上に引く田の草も茂る菜種の畦合を。一蹴かへす土の下これな
 うこちの人。詞それ其の島に人の手足が生出た。やれ龜相いふな女房と。地ふり返つて横手を
 打ち。詞こりやどうぢや。大事の島何者の仕業と。地鋤蹴入れて反返す瘦體。我が親ごとも白
 髮首働にはねられ蘇民が身に。はたと當つて落ちけるをよく〜見れば我が父なり。地ハアはあ
 とばかりに鋤蹴捨て。體に抱付きわつと泣き。顔を見てはわつと泣き如何なる奴が手につけし
 と。駈出しては立戻り走出てはとうと伏し。夫婦足すり身を悶え。島の土に轉び打ち大聲。
 あけてぞ歎きける。地巨旦將來驚いたる顔付きにて。詞ヤア〜蘇民。昨夜より父が見えず人
 を配つて尋ねしに。見付けた〜親殺しの大悪人後日の罪科あらがふなとぞ韓いたる。ムウ兄
 じや人。我殺して我が島へ晝中に埋まうか。世話やきやるな其の五音で殺手は知れた〜。知
 れたとは誰が殺した。ヲ、殺手はわごりよぢや。ヤア孝行第一の巨旦に塗つたとて塗らせうか

と。地争ふ中稻叢搖ぎ。積んだる薬はどさ〜と。崩る、中に嫂が聲立てられぬ身の筋。賤機
 是はと走寄り口の轡も縛目も。かなぐり捨つれば片息に。詞是蘇民様の所爲でなし夫の不孝惡
 逆。證據は連添ふ女房。是は大事の寶の守り是を戻せば心にかゝる事もない。地さぞ憎からう
 巨旦殿。人を恨むる事はない。詞皆此方の慾心から。身にも及ばぬ帝の寶を押取つて。巨旦大
 王といはれうなどは口ずさみにもいふ事か。寢覺にも思ふ事かいの。地其の慾心の報いが。
 積り積つて切れまい蹴で親を切る。詞其の慾心のもとはいへば胎内の此の子ゆる。地此の子
 は如何なる悪人ぞ。手を出して殺さねど腹の内から親殺し祖父殺し。恨めしい子を宿したと。
 思へば搔き破つても捨てたい物。まだ〜と月日を待ち産落して嬉しからうか目出度からう
 か。詞此方の敵は此の子ぢやが合點か。折しも稻叢に鎌のありしは。連なつた親子夫婦が罪滅
 せとの神の教天のあてがひ。死んで見せる是で心あらためて。親子の者に無駄死させて下さる
 など。地腹に突立て引廻す。母が誠の左鎌賤機是はと駈寄りて。留むるかひも涙の玉。草葉
 の露と消えにける。地蘇民も鋤横たへ是女房。詞命にかへぬ御守り持つてのけと聲かくれば。
 地賤機心得身に引つ添へフシ宿所をさしてぞ走りける。詞エ、辛い憐い曲もない兄ぢや人。とつく

恨みいふ事は此の蘇民も知つたれども。兄弟の禮といひ父に苦をかけまいと。地我が身一人誤つて送る月日に時節も来て。一度父の機嫌よい顔見よう／＼の。頼みもけふにふつゝときれ。今日から赤の他人。眞劍で出合はうか但鋤の刃を喰ふかと詞を荒して罵つたり。詞ヤ汝に先をせられうかと。打ちかくる鎌の柄からりと受けて打拂ひ。地ひらりと廻つて打つ鋤に。巨且が小鬢打裂かれ崖より下にどうと落つ。上手より重ねかけ打たんとする弟が。向隅くわらりと打裂き。小膝を突いて下り様に。兄が太股貌の口程切りさけられ。のつけに返せば突懸り。白搗打に打つ鋤が餘つて向ふへ越す所を。起直つて弟が頬先より。肩口まで引つかけて引く鎌に。よろよろ／＼とッシよろめきながら。地兄が天邊を打裂けば弟も臍を打破られ。兩方數ヶ所の手疵を受け。兩眼に血は入りたり。コハリ眼は暗闇身は紅。畦の筋踏み崩し。ッシ堤を下りにころどうと落ちかさなり。敲合ひ摺合ひ這上れば轉び落ち。ナホス他人ませずの挑合ひ命限りと三重見えけるが。地兄はやう／＼這上れば弟も息づく堤の原。躑躅の花を引筆り／＼。口に嚙んで咽濕し命を繋ぐ花の露。兄は片息草に喰付き息吐いだり。詞おのれ親殺し子殺し女房殺しやらぬ／＼と這上るを。地畠の土砂摺みかくるを事ともせず。箆に手をかけ眞砂交りの塊を兩

方摺んで打合ひしは雨か霞の三重如くなり。地賤機あるにもあられず走り来て。業人めまだ死なぬかと打ちかくる。鋤に恐れ堤をさして這下る。蘇民もすかさず這ひおりて。堤の原を西東逃ぐるも追ふも深手に弱る。上には賤機鋤を横たへ待ちかくれば。地逃ぐるに側平水なき井出の小川を越えて逃げんとす。地蘇民聲をかけ。詞やれ樋の口ぬけ女房樋をぬけ／＼。ヲ、合點と地走廻つて女力も一世一代。貫の木に兩手をかけ。ゑいや／＼と引く程に樋の口さつとさつさつ／＼。ッシ逆巻落つる。地水どう／＼川は狭し水は高し餘つて瀬枕波枕オクリ岩も。劈く早瀬川。地渡らん様もあら悲しやともの畠に這上る。地蘇民追付き這上り取つて引伏せ敲きふせ吭に留めの鎌。則ち己れが妻子の敵ッシ神罰の程ぞあらたなる。地蘇民夫婦は泣く／＼も悲みは親恨みは兄。二つの涙に五百機が。哀も共に持ちこもる。三つのうつせを一つ野に。残す形見や残りてもかひなき。夫婦が立歸る道は涙に迷へども。身は正直の道作る鋤と鎌とは耕作の家の寶劍御寶の。手形を尊の御土産と跡を。慕ひて出雲路や。神の心も忠孝の二つを守る十寸鏡。扱こそ蘇民將來の子孫と。めぐみ給ひける。

第四 素盞鳴尊道行

舞詞さる程に素蓋鳴尊。蘇民が宿を御出あり。旅より旅に出雲路や。地昨日の八重の白雲を。今日の山路と踏分くる。人目の關の關守も。咎むとしもはなけれども。心と忍ぶ。御有様。ナホス オクリ恐れながらも。哀れなり。フシ月日の嵐の。御身にて。其の影宿す露だにも漏りて溜らぬ破れ蓑。着て見よとてや。フシ酒折の。山は霞の海深く。嵐漕行く落葉船水に。皺寄る翁川年は経れども色替へぬ黒髪。山とはあれとかや老の。鶯名に恥ぢて。聲な惜みそ眞金吹く吉備の。中山。なか／＼に散らせし。花を春風の。フシ又吹きためて。石崎や。いや高山の松が枝もオクリ二たび。花の盛り見すらん。フシ見上ぐれば。久方の。高天が原は。高くとも今の心を見行し。願ひを三つの御寶の。一つを守れ二柱天の浮橋。何時の間に。フシ我が爲辛き。途絶えして。思ひ渡らん便りさへ。長地涙干す間を暫しとて脱ぎても元の菅蓑や姿ばかりはますらをが。やたけ心を力なるオクリ梓が。袖に行きくれて見おろせば。白露江に横たはり。水光天に接はれり。スエテ子を呼ぶ猿斑鳩の聲。岸の小笹に。刈藻搔く伏猪の騒ぐ音迄も。御心を碎く端となり。柁の葛青つゝら。フシ歩み亂れて行末に巖の鼎。江戸古木を焚き。青山雲を煎するに。咽を潤す便りもなく。猶人里は遠ざかり。何故急ぐ雲の脚。嵐山風松風がばらん。／＼と吹き音信る

れば峰の。木の葉が。ハツミざら／＼と。ちり／＼。ちり／＼。水の音にさへ。假寝の夢を驚かし寝ぬ夜寝る夜を重ね来て。苔に片敷く袖師の浦磯に寄來る浮藻玉藻を。打混ぜてまだ。みるめ和布を打混ぜ。／＼いろ／＼の。フシ波や錦を疊むらん。眞砂交りの濱傳ひ。沙のされ貝空背貝。置惑はせる春の霜。フシさながら双の如くにて歩み疲る。玉鉦の。矛先に向ひては。悪魔も恐れ鬼神も拉ぐ勢ひにも。御身一つの雪をさへ拂ひ。かねたる蓑笠や。身の憂き事を繰返し數へ。／＼て思ふにも。理は持ちながら心から簾の川。上にぞ。三重へ着き給ふ歌蝶鳥の花を尋ねて時。求むるしほらしや。蝶鳥も。花には濡るゝに。我が身は。何と櫛の葉の。ナホス露にも濡れぬ獨り寝や。彈きすさみ手を盡したる。フシ大和琴。音に聞えし。地出雲の國手摩乳長者が獨子。稻田姫は此の頃熱の差引き冷め口は。お風邪召すなと花見幕。簾の川岸の櫻狩見らるゝ花も見る君が。姿の花に。フシ恥ぢぬべし。地旅の疲れのふら／＼と居睡りこけし岩が根の。枕が上の物の音に尊は御目は覺めながら。スエテまだ寝た顔の笠の下。地騒ぐ眼許石叩く鶴鶴の鳥飛び來り。埤の芝に羽を休め足も尾先もせはしなく。はつと立つては又飛下り。日蔭に餐るとりどりに。詞女房達美しい優しい鳥。彼の尾使ひのせはしなさ。地あれ程に尾を動かしては。フシ

鳴きそな物ぢやと笑ひける。物をも言はず稻田姫つくろ見惚れおはせしが。調いやく笑ふことになし。忝くも女神男神天の浮橋に立ち給へば。あの鶴鶴の鳥來り妹背の道を教へしより。地夫婦契りをなし初め此の葦原を産み給ひ。それより世の中の父母夫婦の道顯れ。自らや方々が。生れ出でしも、フシ此のいはれ。扱こそあの鶴鶴を庭來鳴庭叩。戀教鳥ともいふぞとよ。調教へても習うても殿御持たぬ自らが。地習ふかひもないわいのとても師匠になるからは。男持たしや今捕へて籠に入れ。たいじよ立して放さんと心詞もしどけなく。そろりくと手を上げて。押ゆればふはと立ち又押ゆればつと立つ。ア、辛氣やとて尊の召されし笠押取り。彼方へ押へ此方へ押へ逐はへ。逐はゆる笠の羽風に恐るゝ鳥は。行き方知らず思はず知らず尊の上へ。轉びかゝれば驚き起きて。ぢつと見交す顔と顔互に顔く花薄。ほの字を中に籠らせて鳥の教へし縁のはし。爰にも天の浮橋の。夫婦の始めとなりける。地戀にこりたる尊の心又惚れくとなり給ひ。調御覽の如く卑しき旅人。やんごとなき上臈の人目もある其處退き給へと宣へども。地姫はとかうの應答もなく。ぞつと寒氣も忽ちに顔色は朱を注ぎ五體に大熱ほとほり出で。尊にひつしと抱きつき悶え苦しむ其の有様。女房達も立騒ぎ尊も見捨てがたけ

れば。手を引きかゝへ漸うとオクリ幕の内にぞ入り給ふフシ母は驚き。地屏風押退け今日はやもやと思ひしに。又もや熱のさしけるよと。スエテ様々に看病し。調何方かは存せねども。旅の方の御介抱身にも餘りて忝し。問ひとはるゝも値遇の縁粗忽に申す事ならねど。此の國此處に八岐の大蛇とて大蛇あり。地何時の世よりか年毎に。色よき娘を人身御供に取らざれば。一在所崇りをなす。調其の印には。山宇津木の折枝が。鳴渡つて棟木に立ち。家の柱より血潮流れ出で。其の瑞相には前方に。必ず取らるべき娘が熱病を病む知らせあり。地それ故に一在所娘持つたる者ごと。風邪でも引いて熱させば。若し家の棟へ山宇津木が立たうかと。親々の心遣ひはいかばかり。それに此の子が熱のさし引様々の看病驗もなし。若しもそれに極つて大蛇が餌食となるならば。二人の親はいかならん行方も知らぬ旅人に。語るも云ふも悲しさの。心に餘る故ぞとてスエテかつはと伏して。泣きわたる。地八岐の大蛇が物語尊とつくと聞召し。調若しや方々は。手摩乳長者の一家の人にてはなきか。吉備の國蘇民將來が教にて。手摩乳夫婦を尋ぬる者よと宣へば。地ナウ其の手摩乳とは夫の事。妾が名は足摩乳此の娘は稻田姫。蘇民がしるべのお方とあれば外ならぬ所縁もあり。憐み給へ旅人と又さめ。くくと泣く涙。地娘が

苦しむ玉の汗。時雨村雨夕立の一度に降り来る如くにて。尊の旅の蓑笠も、フシ重ねて濡るゝばかりなり。地尊包むに包まれず名は聞きも知つたらん。詞素蓋鳴とは我がことよ。身を焼き骨を焦す大熱なりとも。忽ち退け得させんと宣へば。地母は恐れて飛びしさり。スエテ頭を下けて敬ひける。地尊枕に立寄りて腰の御劔をすりと抜き。詞抑此の日本は日の神の御國にて。陽氣盛んにして暖かなること。天地の内に並ぶ方なき國土なり。地されば伊弉諾尊、軻遇突智といふ火の神を御誕生ありし時。其の軻遇突智が火焰に焼かれて神逝りませしも。内に大熱の火を包みし故なり。詞故に日本に生るゝ者は。十六の夏迄は。兩袖の下を鬨腋の脇明にして熱を漏し。涼しみを受けざれば國と人と相應せず。地然るを父母愛に溺れ。さなきだに實熱深き稚子を絹に包み綿に巻き。熱に熱を添ゆる故。寵愛却つて愁の種と、フシなるぞかし。地今より日本の貴賤男女我が詞を式となし。鬨腋を着せさせば。見よ、無病延命疑ひあるべからず。いで其の證を見せんすと熱氣冷す氷の御劔。閉ぢたる左右の袖下さらり、とたつ所に。わきあけより燻り出で半天に煙満ち、渦巻き去ると見えけるが。顔色さめて白々と心地涼しく見えにける。末代和國鬨腋は、フシ此の。御神の教なり。地母は悦び浮き、いそぐ前後を忘

れ。ハア、有難や忝や。此の稻田姫夫もなし恐れながら尊様。御逗留のお寢間のお宮仕に参らすべし。早う歸り夫に知らせ悦ばせん。娘は道の知邊にと立寄れば立寄つて。一首の御製にかくばかり八雲立つ。出雲八重垣。妻籠に。八重垣つくる其の八重垣を。是こそ三十一文字の歌の始や。鬨腋の袖と袖とや。三重、重ぬらん。フシ宜も富みけり三枝の。三つ葉四つ葉の殿づくり築地大門つき、しく。庭は自然の植込に。海を見晴らし山請けて居ながら風情を奥座敷。手摩乳長者が屋形には。尊の御入り稻田姫の病氣本服悦びに。猶悦びの響應は。フシ毎日酒宴に暮らさるゝ。地主の長者も微醉ながら蘇民將來が来りしとや。珍しや。案内所か是へ是へと請じける。詞先づ息災で目出度いが親兄のこと間及び。日頃の巨旦が悪心。さうあらうと思ひし事。和殿が正直天にかなひ。尊のお宿申されしは子孫の譽。尊も度々の御噂先づ御目見得えとありければ。地されば我等も數ヶ所の手疵あひしかども。預り奉る手形守りの威徳によつて。跡方もなく平癒し。御恩の尊御行末も氣遣ひ御跡より参らんと。御契約申せし故本國を打立たんとせし折節。帝都より大山祇と申す臣尊を慕ひ奉り。我等に案内申せとの御頼み是迄お供仕る。是は又御預りの手形守り。共に御披露頼み奉るといひも敢へぬに長者悦び。詞何

大山祇の臣のお出とや。天下に誰あらう瓊々杵尊の舅君。斯る邊土の我等が宅へお尋ねも。尊の御威光さぞ御悦び。地此方へ請じ奉れと。フシいさんで奥へ入りにける。フシ蘇民が案内に。大山祇。家は長者が宿なれど。尊を敬ふ心にや。スエテ下座に控へておはします。地勇みいさめる手摩乳長者始めの顔色引きかへて。溢々顔にて立出で。調ナウ蘇民。大山祇とは彼方の事な。我等は手摩乳と申す者。遙々の御出で尊へ申し上ぐる所。如何なる事にや散々の御機嫌。大山祇の臣ならば詞もかはさぬ顔も見ぬ。戻せくとの仰せ。我等もはつと存じ。同道の蘇民に御憎しみばし候かと。押返し問ひ申せば。情をかけし蘇民に何の恨みのあるべきぞ。丸を輕んずる大山祇何の對面追返せ。年寄つて諄いくくと却つて我等を御叱り。お歸りと申すも迷惑。同道の蘇民も嘿迷惑。エ、近頃地氣の毒と頭かく手摩乳長者が白髪より。フシ座は白けてぞ見えにける。地大山祇手を打つて。調ハア御恨み思ひ當つたり。我が娘木花開耶姫に尊御心を寄せられしを。其のかひもなく帝の后に奉る。是は勅説詮方なし。地又寶劍の失ひ給ひしも化生の業とは申し乍ら。我が娘岩長と生れ出でての災。御加勢申し此の寶劍を取返さでは末代迄の身の恥辱。此の所に骸は埋むとも一たび御目にかゝらでは。都へとても歸るまじ今一應申してたべ

と。思ひ込んだる兩眼に涙を。スエテはらくくとぞ浮めける。地洩聞えてや女房達尊の御出と呼ばはつて。仔細は何と白綾の歩障の中に押し立つれば。大山祇力を得。主手摩乳蘇民將來スエテあつと頭を傾くる。始めて着なす。鬘腋の田舎めかずも。フシ稻田姫。尊の仰を蒙りて。スエテ歩障の陰より聲作り。調ナウ大山祇。丸は素蓋鳴尊ぢやぞ。寶劍を取返す力にならんとて遙々の下りか。言はれぬ事の。人頼みする程なれば流浪の身にはならぬ。丸が一人の力にて取りかへし。此の寶劍は素蓋鳴尊の手から出たと。末代に名を残して見せう。それ迄は都の人に逢ふまいと。天照神に誓を立てたれば逢ふ事はならぬ。殊に后にも立つ開耶姫に心を懸け。上への恐れ今での後悔。其の開耶姫が親に逢うても。どうやら心が残るやうでいな物。其の上開耶姫よりは。手近いに折りよい蕾の花があつて。寢ても起きても詠めて居る。此の蕾が恪氣深くて。外の花とは一つ瓶にも活けさせぬ。蘇民は情を受けた者。其の外は舅の長者ならでは對面せう所縁がない。早う往にや。くくと。地形も見せず顔見せず詞で人に鸚鵡の鳥。梅の鶯山鳥。フシ眞似びかねたる如くなり。地母足摩乳銚子盃携へ出で。調大山祇様とや妾こそ足摩乳。お心の本意なさ推量致し。地思ふ仔細の候へば先づ御酒一つとすむれば。猶心得ぬ事かなと思

ひながらも長柄の銚子。一つ受けたる盃に、フシ人の心を汲みにけり。詞申し山祇様。ふたりが中に稲田姫とて獨娘の候が。地尊様へ御寢間の御伽に參らせて御不便は蒙れども、我々が娘尊の後と申さんも恐れあり。是を養子に參らすれば山祇様は舅君。是に増したる所縁なし。御本意遂けられて後親しき御對面も有るやうにと存するが。長者殿如何思召す。詞尤々。親子の盃地善は急げと立寄つて明くる。フシ歩障の。さやかなる。雲井の人の盃に。蘇民も顔は色付きてフシ。お目出度やとぞ祝しける。大山祇大きに悦び。詞稲田姫を我が子にして差上ぐれば勅諭も背かず。尊にも背かず此の上の本望なし。地御對面取りなしは夫婦の人に任せ置く。暫く旅宿に逗留し。吉左右を待ち申すと蘇民誘ひ立ち歸れば。稲田姫は親子の禮儀長者夫婦も式代し。オクリ別れて、旅宿に歸りける。フシ時刻吹巻く。夕嵐音も崩る、山宇津木。一枝虚空に鳴渡り。棟木はつしと血煙立ち。フシ柱を朱に染めてけり。地夫婦はあつと動顛し。悲しや知らせの山宇津木が立つたわと。母も姫も絶え入れば長者も騒ぎ狼狽へなく。詞ヤレ男ども。女子ども。早う彼の木を取つて棄て柱を拭へ。ヤレ梯子よ次足よ。地フシ棒よ杵よと袴きける。地幣帛提け村中擧つて數十人どかくと入り來り。詞コレノ、毎年の人身御供。何處に印立つべきと地下中

手分けし窺ふ所。此の家に知らせの宇津木がお立ちなされた。例の如く人身御供へ同道し用意せん。地サア稲田姫を御渡しと呼ははる聲々。夫婦も姫も力落ち。前に知らせの大熱は尊のお蔭で助かれども。どうも通れぬ命よなア。所の衆頼みます。どうぞ助けて下されとスエテ抱き付いて。泣きるたり。詞ハテ悪い合點な長者殿。誰が惨い目が見たからう。斯ういふ我々から來年は誰が身の上であらうやら。地合點づくでは渡されまい。サアござれと押分くる手摩乳押留め。詞粗忽せられな。我が子ならば所の法を我一人破らうか。此の子は別に親がある。たつた今大山祇といふ人に養子娘にやつた。おれが娘でないからは人身御供に立てう筈がない。地爰に置く故やかましい養子親に手渡ししよ。娘よ來いと手を取つて断出づれば百姓ども何處へ何處へ。詞それではそつちの勝手はよかる。其の様な事で濟むなれば大蛇に娘を取らるゝ者は一人もあるまい。存じの通り遅うてさへ在所中へ祟りが來る。長者殿でも手摩乳様でも。地是ばかりは除けられぬとあらけなく引立つる。夫婦は煩悶え絶りつき誤つた在所の衆。待つて下され人身御供に立てませうと。漸うに引留め娘を中に取廻し。顔つくくんと詞なくせき上げく、歎きしが。足摩乳髮搔撫で。地毎年人身御供の時分になれば。若しやこちの娘にも當らうか

と。幾瀬の思ひする内に。詞今年は餘所へと聞く時は。ア、嬉しや遁れたよ。來年はどうあらうと案ずれば今年も又遁れた。嬉しやくと地人の子の取らるゝを悦んだ其の報い今年といふ今年こちの身にむくい來た。せめて病で死んだらば骸なりとも残らうもの顔見せてたも稻田姫。ナウ此の美しい顔を。大蛇の餌食になすかいのと。抱きよせ咽び入り立つも立たれぬわしや足摩乳。此方にもがれた眞の手摩乳。どうしましよいと縄付き聲も。惜ます泣きるたり姫も。現の心なく。大蛇の餌食にならん事。悲しい上は。フシなけれども。所の作法は是非もなしと諦めもあるぞかし。お年寄られた父母に長い歌きをかけます。是が悲しいばかりと。縄りつけば抱きよせ。涙争ふ親子の様。在所の者も一同に子を取られしは身に知る雨。我が身にかゝらぬ人迄も。フシ袂を絞るばかりなり。地素蓋鳴尊白小袖御手に提げ。とうくと搖ぎ出で。詞是こそ丸が望む時節。大蛇を討つて本意を遂げ。國の歎きを救ふべしと宣へば。百姓ども口口に。大蛇をどうした物とか思ふ。頭が八つ角が十六。眼も十六見通しの變化。男にも女にも形は自由自在の物。地殊に男たる者刃物を持つたる影を見せても命がない。手に覺えあるならば滅して一在所の。末代迄の難儀を救はれよ。詞必ずしや怪我をして恨み給ふな。ア、いはれぬ

腕立。地命の懸換あるさうなと。フシ一度にとつとぞ笑ひける。地知らずや我こそ天照神の弟素蓋鳴尊。大蛇を討つべき我が手だてよつく聞け。如何に自由を得たりとも龍蛇は必ず酒に惑ふ。八つの甕に毒酒を湛へ。稻田姫が影を映し香干す折を見合せて。討つになどか。フシ討たざらん。詞ヤア稻田姫。此の白き衣服の袂。外を圓く縫はせしは刃の反を隠さん爲。大蛇が間近く來らん時。關腋の此の所より。劍を出し臑を刺せ。地我其の時走り付き。大蛇にもせよ毒蛇にもせよ一ひしぎに取つて伏せ。奪はれし寶劍やはか取らで置くべきかと。はゞぎりの名劍を渡し給へば稻田姫。戴く劍を關腋の袖に包んで衣がへ。太刀を一振隠せしより。關腋を振袖とはフシ。此の時よりぞ始めける。地手摩乳夫婦も生死の頼みは尊の詞の末。松にかゝれる命の露。數の土民に引立てられ。憂をかり行く稻田姫。夫婦は涙にくれ方の時をつれなく別れの道。見返れば引立つる駈出づれば引留む。名残りを末世にとゞめくる事も愚かや稻田姫は。祇園少將井大山祇は三島の明神。開耶姫は富士權現。瓊々杵尊は外宮の相殿神と。神との振合せ袖の縁こそ久しけれ。

第五 八雲猩々

既に時刻も夜半の雲。天を焦せる篝の煙。谷深うして嶺聳え。山水漲る簸の川上。調八つの
 甕に毒酒を湛へ。影を浮べる高棚に。五重の荒蕪注連を引き。地贄の少女を据ゑ置きたり。
 祭文 無慚なるかな稻田姫。昨日迄も今朝迄もオクリお乳や。乳母に侍かれ。荒き風にも。當てぬ
 身をつれなく一人捨てられて。説經父よと呼べば谷の聲。母よと呼べば松の風。斯るべしとは。
 夢にさへいざ白小袖の振袖も。ナホス絞りかねたる。フシ哀れさよ。地時にコハリ山鳴り震動し。谷
 の水音さ々なみ立ちあれく。遠に雲起り。俄に降り來る雨の脚。鳴神稻妻ナホス天地を返し大蛇
 が姿。フシ現れたり三人ハルフシ消ゆるとすれど。吹上げて。又山風が焚く篝。簸の川上に年を経て
 住めど濁るは濃き薄き。酒にもまる。九十九髪。亂れ心は何故ぞ。我寶劍に心をかけ。スエテ岩
 長姫とは生れしが。蛇道の縁は切れやらず。悪女と生れ人に笑はれ憎まれし。美女は悪女の烟
 の種。よしとは言はじ葦原や。スエテ八島の浦の外迄も。地眉目よき女を取盡さんと。簸の川上
 に隠れ棲み八つ岐の大蛇と成つて。人を取ること多年なり嬉しや今宵ぞ廻りくる。姿は女。
 心は如何に。鬼とも蛇とも。フシ見えわかす。フシ見る目も暗き。心の闇。消ゆるは露より心の玉。
 耀く大蛇が眼の光。フシあれこそ今宵の我が贄ぞと。三人。コハリ答を振上げ紅花の舌をふり立て



振り立て。歩むとすれども毒酒の薫に引留められ。立寄る一つの甕の影。地爰に女はありくあり。く有明の。月夜にあらぬ桂女の姿は一つ。影は二つ。三人三つ四つ五つ。七つ八岐の大蛇が魂。八つの甕に八つの形。いで飲干して底なる女を。贅に取らんと飲んでも亂るゝ酒のさゝ波。寄り来るゝ寄せ来る面。フシ面を浸し頭を下け。飲めどもく盡きせぬ泉。次第に傾く大蛇の影面色變じて茜さす。コハリ角は珊瑚の枝をふり立て忿怒の醉に足引の。山もくるゝ野もくるゝ踏留むればよろゝ。立上ればたぢくゝ。かつばと伏せば亂れ心は只一身。ナホス地返すゝも恐ろしや。三人血瀧の響きは鼓。松風笛の音。雫と積りて菊水消え流れ。竹の露の甘露。月は影有明。朝霧夕霧。添へて汲むは玉水。面白の夜遊や。歌やあん楊柳枝。楊柳枝。南天龍膽金銀花咲いた。銀杏金柑楊梅寒梅瓢箪鳳仙花。やあん鐵仙花。々々。栴檀沈丁香。芙蓉林檎長春半夏草。ゑゝする。ゑゝするよりゑゝするすりよギンこんりやう。ゑすゝりよこんりよこんちんこんりやうこんちんかう。ころゝく轉び。起きては輾び。ナホス己がフシ心の戯れは。二人ハルツシ人の命の。仇敵捨てたる身さへ若しや又。遁るゝたけはと見廻せば。此處の山。彼處の岨。八岐にまたがる大蛇が姿コハリ東南西北四面四維。霆雷電隣く内。八つの形は

顯然たり誠の女はあれこそと。執念き顔吐く息は巖を穿ち古木を倒し。落ち來る木の葉ははらはらしく。地あら腹立や〜コハリ偽る人の心の酒。盛りて悔ゆるとかひあるまじ思ひ知らせん思ひ知れと。八つの姿は附纏はつてくる〜〜手繰れば千尋の大蛇が形。眼は火輪炎の背。鱗を鳴らし角をふり立て雲を卷上げ卷下し。高棚ナホス目懸け蒐りしはすさまじかりける。三重ハ勢ひなり。地姫はあるにもあらればこそ。死するに二つの道なしと只一筋に思ひ切り。谷へかつばと飛びおるればつれなき玉のおのづから。土手の平沙に下り立ちたり。嬉しや生きる道筋と目指すも知らぬ草の原。フシ亂れ〜〜迷惑ふ。地大蛇は怒りの鱗を立て猛火の腮は利劍を吐き山岳草木動搖し。河水を覆し大地を蹴立て追詰め三重ハ追廻り。地弱腰を引唾へ只一呑みの毒蛇の口。遁れがたなき世の譬へ。フシ哀れ果敢なき有様なり。地せきにせいたる尊の顔色眞黒になつて駈來り。姫が敵天下の仇何時まで遁し置くべきぞ。寶劍出せと身體髮膚に力を入れ。小脇にうんと抱締めゑい〜〜と引立つれば。勇力和光の勢ひ強く。弱る處をどうと投げ付け頭にしつかと踏跨り。劍を返せ姫返せと角を擱んで捻付くる。時に胴骨動き出で。大蛇が背を腹の内よりさら〜と切りさばき。稻田姫朱になつて顯れ出で。尾筒に隠せし十握の寶劍

やす〜取つて候と。右と左に寶劍利劍。二振袖に提げてにつこと笑ひし其の顔。尊御悦喜淺からず。天の叢雲の御劍と名付け大日本寶。フシ揃ふぞ目出度けれ。地尊大蛇が頭より寸々に切伏せ〜滅し給へば。天兒屋根を先として大山祇蘇民將來手摩乳夫婦。日月の御旗眞先に押立て。御迎ひの諸軍勢野に満ち山に敷島の。歌に和らぐ君が代は八島の外の國迄も。日本の威を振袖の。人民無病延命に五穀は。家に満ちにける。

七行大字直の正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又逸失多かるべし全く予が直の正本にあらず故に今此の本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左のごとし

- 竹 本 筑 後 掾
- 正本屋 山 本 九 兵 衛 板 (番印)
- 大阪高麗橋壹丁目 山 本 九 右 衛 門 板 印
- 本竹
- 教博

曾我稽山

(七行九十三丁本)

作者近松門左衛門

地照射する火串の影のねらひ獵。狗は獸を追うて殺し人は其の處を指し示す。今諸君は功犬なり。詞蕭何が如き勝つ處を指し示すは。功人なりとの故事の心を爰に狩衣。裾野に暫し御宿陣右大將家の御威勢は。富士より高き鎌倉山。建久四年五月二十八日と。明くるも寅の一點にオロシム虎の御門ぞ。開けゝる。地御留守なれども式日の御禮は御臺所に與奪あり。竹取の間にいで給へば。和田畠山千葉上總。大老執權の北の方を始として。工藤梶原宇都宮土肥佐々木三浦黨。昵近高家の内室達。其の外御譜代由緒ある家の子の妻女迄。夫々の格に任せ座次を亂さず參列して。二十八日の御禮一度にあつと拜謁ある。袖の縫物綾錦高燈臺に輝きて。金泥砂子竹取の翁が娘の彩色も。フシ光を恥づる許りなり。地斜ならざる御氣色にて喃方々。詞富士の御狩の御留守に。幼稚の頼家いひがひなき自ら各とても女の身。鎌倉を靜謐に持固めしも大將殿武威目出たき故ぞかし。地あの庭上に並べし御狩の中の勝れ物とて送られし。射手の譽も擲すた

め。それく目録と宣へば。中原の吉之が妻承り。男文字に和訓を付けて。天爾波巧みに讀んだりけり。地御帳面の第一の筆も夏毛の麩は。大友の市法師まだ十五歳の小腕の矢先。就中御褒美たり。番鹿は秩父の六郎。三町五反の尾上を隔て。鐵細かき鹿子まだら御行膝の料たるべし。牛とも象とも紛ひて三刀かき切つたる肋骨。仁田の四郎忠常が世上の美談に乗つたる猪。御狩一のフシ功名なり。長沼五郎が兩肱。さすや岡邊に蓬喰。呦々と鳴く小牡鹿の角。二つに引裂きて是を手取りの證據とす。捷は土肥の彌太郎。巖に躓く狼その。喉首を踏んで叩きとめたる一撃の。力鐵鞭恐ろしき。虎狼より盛長が組んで仕留めしあら熊と。名は明けき月の輪も浮んで薄の波走る。番ひ兎の登り坂。駒馳違へ長刀に。のせてとめしは小山の判官。皮に疵なく山猪の眉間の骨を射摧きしは。淺利の與市が神頭の弓勢。愛鷹山に足くらべ追ひも。追うたり二十八町。息の限りを追詰められ。狐は死して岡部の六彌太。是も手取の功名たり。コハリ兒玉の太郎が鑓玉に上げて突きしは飛鳥の業。雁股早く飛鹿の。もと首射きる安田の三郎。竹の下の子孫八左衛門向ふ猪に矢はたゝす。打物にて切りとむる宇佐美の左衛門川越太郎。相馬の小太郎結城の友重。土屋平山千葉宇都宮各矢先の功名あり。外に牡鹿一頭。工藤左衛門祐經秩父

の郎等本多の次郎親經。一の矢二の矢の諍ひ。鹿一疋に矢二筋。祐經太腹本多は草分六分の勝
 に候へども。鹿論未だ落居せず二本の矢は射付けの通り。仍て終りに記す者なり。地御狩場の
 別當和田の義盛判と讀上ぐれば。伺候の女中面々の殿御の武藝を身の手柄。御臺所も御機嫌の
 フシ御前。ざゝめくばかりなり。地祐經が妻阿古屋の前進出で。聞き憎き御帳面。秩父の郎
 等陪臣の本多輩。我が夫祐經と鹿論さへ慮外なるに。本多が六分の勝とは義盛の依怙最負。末
 世に残る御記録祐經一人射留めしと。書改め願ひ奉ると憚りなく言上す。義盛の北の方巴御前
 聞きもあへず。是阿古屋殿。本田の次郎親經は秩父の家來といひながら。武藏源氏の歴々。軍
 の場敷は御出頭の工藤殿も及ばず。此の度の御狩にも。假屋奉行夜廻り御直の御用承り。御近
 習の御家人並。女房にも御臺所御對面ある程の筋目。誰に恐れ負けてるん。義盛が依怙とは工
 藤殿の奥様。ちと口上が出来過ぎたと膝元に措寄つたり。阿古屋色をかへ。いや昔は王の孫に
 もせよ。今は秩父の歩行若黨。そも昔は朝日將軍木曾殿のお部屋御臺巴御前。大力の子胤
 を取らんと和田の義盛申し受けられ。今は我々同輩。其の時々の身の程知らぬ無用の本多が系
 圖だで。しかも金泥にて。工藤左衛門祐經と矢印あり。本多が矢には家名もなき平頭の的矢。狩

場の法も知らず慮外千萬の鹿論。地御帳面替るか本多が名を消さるゝか。いつ迄もお願ひと額
 髪押しなでて。まばゆからぬ張臂辯口。末座に着きし本多が女房常夏。詞これく阿古屋殿。
 慮外といふは馬の乗合座敷の高下。盃の前後などの事。扱は戦場にも目上の敵には太刀打も
 慮外と。後を見せて逃げらるゝな。地弓矢の道不案内で。小差出た批判かたはら痛しと嘲笑ふ。
 それくく。調慮外といふが其の事よ。イヤ上をもどく。地其の方が慮外よと。兩方聲もあら
 木の真弓。フシ詞鏡にいひはりける。地御臺所御聲高くあれ鎮められよ人々。調老中さへ理非を
 分かね鹿論女の批判及ばぬ事。されば蒲の御曹司範頼入道殿。今遁世長袖の身ながら頼朝公の
 御弟。折しも在鎌倉こそ幸ひよ。地北の丸に請じ互に遺恨なき様に。中分の扱ひ御料簡に任す
 べし。地巴宜しう沙汰せられよと御褥を立ち給へば。阿古屋つつ立ち工藤左衛門祐經と。匹夫
 下郎の本多と。中分の扱ひとはお恨めしい御臺様と。御裳袴に取付く所を常夏引留め。調匹夫
 下郎とはどれどの口から。コレ三箇の庄の主近江八幡など本多程の者は。家來に持つた大名
 の御前様。下郎といふが不思議か。テ、其の大名の御前様。地息の根止めんと爪紅血ばしる摺
 みあひ。百花亂るゝ女中の騒ぎ巴御前すんど立ち。兩足宙に俵がへし。小脇にかい込みゑいや

つと締めたる大力。眉も鬘もばらく涙。フシ鼻息ばかりたえぬなり。詞ホウむつちりと抱心地よい甘さうな肉合。祐経殿の御祕藏が尤さりながら。御臺様の御前で。餘り慮外な口がさがない。乗物下馬迄巴が送る。地我が儘がいひたくば祐経殿歸られて。夫婦間の私語。無理も我が儘も睦言は御勝手。人中で我が儘いへばまつ此の如く。地痛いかく。詞痛い目に逢ふぞやと。地締付けく。片荷づつて力に足らぬ。相手の不祥常夏と。片手に取つて引寄せ横だきしめたる弓手の小脇。下髪垂れて薄化粧。二つ頭の顔の色我が顔共に三つ巴。太鼓の御門明け六つの雲ほの。くくと三重。白旗の。フシ流れは同じ。詞源の蒲の御曹司範頼朝臣。天下の疑晴さんため修善寺にて御出家あり。法名源雄と衣を墨に染めながら。鎌倉殿の御舍弟世の覺え重けれど。身持は軽き駕籠乗物只一僕を侍にも。草履よ杖よ吳竹の。フシ藪醫に紛ふ風情なり。地大名小路の升形より引馬に五つ道具。乗物の戸八文字に開かせ布袋乗に乗つたるは。梶原平次景高なり。地範頼の御乗物道を護つて片付けば。梶原が近習ども蒲の入道殿の御通り。下馬なさるべきかと伺ひける。詞世捨坊主に何の下馬と顔差出し坂東聲。それなるは蒲の入道殿な。工藤と本多が扱ひのため北の丸へ御参か。我等始め御留守役の大名小名相詰め申す。出頭第一

の祐経と。陪臣の本多が鹿論は提灯に釣鐘。鶴の毛の先程も祐経ひける扱ならば。お爲によく御座んまい。乗物やれ。地参れと傳へて八枚肩。徒歩臍脛やつこらさ。邊をはねて跳馬の人を蟲ともはいくく。地埃蹴かけて通りしは。フシ存外至極の無禮なり。地堀抜井戸の方より二十ばかりの若侍。編笠ぬぎ捨て兩手を土に蹲うたり。詞蒲殿御覽じ。浪人が主持か此の方への會釋ならば。お通りやれ。地くくと手を出し給へども。只あつくとばかり差俯向きステテ忍び。涙にくれ居たり。蒲殿も斯ばかりの涙あやしと乗物を。おりの衣立寄つて如何なる人の何故に。用ありけなる落涙見捨てがたと宣へば。涙に沈む顔打上け直に申すも恐れながら。口惜しの世の中や候。詞殿は忝くも頼朝公の御弟。九郎判官殿諸共に平家追討の御代官。五萬騎の大將軍。地一の谷の大手生田の杜を攻破り。武功と申し御連枝の六十餘州に冠たる御身。梶原が末子など我は顔の乗打ち。御無念察し奉る。詞我等が主人も伊豆相模に名を得し者の末なれども。運の變によつて一族に父を討たせ。本領は其の者の秣刈場となり果て。地昔の劍鏑浪人貧しき家には故人疎く。世にも人にも侮られ。何時花咲かん。フシ埋木の。地身の無念存じ合せて不覺の涙。問はず語りも御恥かすと又。涙にぞ咽びける。地入道殿小聲にて。詞扱

は曾我兄弟が下人よな。地年月の堪忍さぞあらん。祐経君の寵に誇り。詔を勤めと紛らし世に蔓り。鎌倉武士の風儀を紊す佞人。エ、齒痒し得討たぬな。詞入道昔の範頼ならば天晴力を添へんずもの。地もどかしさよと宣へば。地御覽の上は包むに及ばず。曾我が下人鬼王と申す者。今度の御狩を武運の時と兄弟忍び巡りしに。昨日の朝山敵祐経尾越す鹿に目を付け。弓矢番ひ追ひかけしを。茂みの蔭より五郎時致真直中をと急ぎに急いで放つ矢が。敵の竹笠射かすつて鹿の草分ずんばと當り。地祐経が矢は太腹。難なく鹿は止まりしが。詞時致は隠れなき大力。笠廻り太く矢束も拔群。殊に名乗り家名の印もなく。既に矢穿鑿に及ぶべかつしを。秩父殿の執權本多の次郎親経。我こそ一の矢射たんなれと本多と祐経鹿論に取りなし。地大事の難は遇れしが。今度の御狩に討ち漏らさば何時の世にか優曇華の。曾我が天運開くべき。御賢察とばかりいひさしてスエテ頭をさけてぞ泣き居たる。地蒲殿も涙ぐみ。あつたら勇士ども世に埋もる。不便やと。懐中より木机二枚取出し。詞是は北條時政大江の廣元兩印にて。鎌倉殿の御前返も内意を達する割符なり。地祐経が用心構へ頼朝を後楯。尺寸側を去らぬと聞く。兄弟に是を貸す何處迄も恐れなく。鎌倉殿の膝許にて曠業の敵討。花やかにして無念を散ぜよ。必ず隠密

隠密と別れ給へば鬼王有難しとも冥加とも。詞はたらず御厚恩忝涙つゝめども。心に漏るゝ籠乗物伏拜みくゞてぞ三重へ別れ行く。地北の丸の大廣間工藤本多が鹿論。蒲殿に扱はせ穩便に濟すべしと。巴御前承り鹿を庇に昇きすゆれば。御留守番の大小名遠侍に相詰め。フシ蒲殿をこそ待受けけれ。地梶原平次景高祐経が一子犬坊丸。郎黨八幡の三郎相具し御廣間にのさばり出で。八幡の三郎目鼻を撃め。詞扱々づない大矢御覽なされ景高公。小兵の本多が射たればとて一間も飛ぶものか。是を射ん者昔ならば鳥の海彌三郎。當代は淺利の與市殿。然らば矢印ある等名を書かぬは合點。阿呆力の曾我の五郎時致といふ饑渴浪人。主人祐経一門のはし毎度の無心合力。何貸せ彼貸せもらかせの騙り事も人食はねば。狩場で小盗みせんため紛れ入りたるに疑なし。地和田殿の不穿鑿兎角梶原殿御父子にかけねば。明白ならずとそやされ。詞ヲ、サ別はない。重ねて本多めに射させて見れば忽ち化が顯はるゝ。地此の矢は景高預つたと抜かんとすれば是梶原殿。詞其の矢に指でも觸るが最期腕を巴が引抜くと。地腕捲り脇捲り紅梅もる雪の膝ぶし。骨太々と練絹に。フシ岩を包みし如くなり。地悪しかりなんと梶原先づ蒲殿が來せて扱ひの術に依つての事。詞ナウ女の力と首のない石佛。外の用に使はれぬ。何の役に立た

ぬ物と、フシ御書院にぞ通りける。地物に堪へぬ朝比奈の三郎。斯くと聞くより御番所の柘の棒提けて。駈込む所を母飛びかゝり。棒の物打確かと取りヤイがきめ。御殿中を知らぬか。騒ぎを止め穩便に納めよと御意を受けた巴が子。此の棒で誰を撲つ。チ、曾我殿原を盗みよ騙りよ。父義盛の不詮議と吐かした奴等。素頭撲碎く怪我なされたと捻上ぐる。コリヤ撲碎く程なれば己れは頼まぬ。地あんばく者め又捻り餅喰ひたいかと。片足あけて真中より棒をはつしと踏折つたり。梶原め八幡め殿殺して退けんと飛んで出づるをむんづと組めば。朝比奈兩手をさし込んで親子四つ手に取組んだり。コハッ母も母なり子も子なり汗を貫く頼髭と。風に亂るゝさけ髪のすべり出でたは母の腹。今は我等が腹僧と三尺ばかり釣上ぐる。巴兩足踏放し我が身を重りに持上ぐれば朝比奈も朝腹に。大力の母倦み果て。釣下しつ釣上げしは龍の氣ざしの六々鱗。滾つて落つる水の勢緒を敲いて龍門の。瀧登りとも謂つべく。母跳返し一放れ大の男をひつ擔ぎ。どうと落す其の響き。ナホス祇園精舎の釣鐘を切つて落すも斯くやらんフシ御殿も搖ぐ許りなり。地泣顔にて朝比奈。むづ／＼起きる胸骨膝に引つ敷き。同エ、疎ましの荒者め。親に世話を揉まするな。アかたむくろに曾我を引く己れは最負の引倒し。文武二道の弓取とて強

いばかりが武士でない。又しては切つての投けてのと手習ひは否がる。物讀みは嫌ひで和田の家が嗣がるゝか。地サア今から手習するかと太股を。ふつ／＼と抓られて。同あ痛／＼あ痛手習ひしましよ。物讀みするか讀みましよ／＼あ痛た。母がいふ事聞かねば又是ぢや。あ痛あ痛捻餅の味忘れなくと。地ふつ／＼振り引起し行儀ようして遠侍に相詰め。何事あらうとお廣間へ差出て慮外したらば又是ぢやぞ。また怖い目付やめぬか。身柱に一柱するうかと感されてお次へたつ。爰嫌ひの髭男短慮の病母親の。フシ意見ぞ藥艾なる。地程なく蒲殿御入りと邸下番衆取次けば。梶原始め犬坊八幡出向ふ。蒲殿暫く鹿に目をとめ莞爾と笑ひ。同なう巴御前。寶を争ひ地を争ふは人間世の欲心。それとは變り是は優しき弓矢の藝。其の争ひは君子なりと孔子も是を褒め給ふ。位争ひ歌争ひ春秋の詠を争ひし。雲の上人の風骨にも劣るまじ。地心憎さよ優しさよ爰に一つの物語。昔の／＼とつと昔の其の古。大和の國天の香具山といふは女山。又畝傍山耳無山此の二山は男山。香具山姫の艶なる形に想をかけ。我が妻にせんいや我こそはと山と山とが妻争ひ。夜毎に谷峯震動す。出雲の國に在します阿善の御神是を救ひ止めんと。同御船を走らせ給ふと聞き二つの山は中直り。阿善の神は播州印南野に神とま

り在ます。此の三つ山の争ひ中の大兄の御歌を。地萬葉集には載せられたり。今の世迄も眉目よき女をお山といふも。此の香具山のフシ謂れなるべし。地總じて物の扱ひには心なき山のかひもある。況んや文武の工藤本多。入道が扱ひ不足はあらず。争ひを親みの始めにて。上下相和するこそ。源氏長久國家安穩の基なれと。御詞に花實を交ぜ面白可笑しき御扱ひ。巴悦びこ領きお次外様遠侍間傳へく。フシあつと感ずるばかりなり。地莞爾ともせず梶原イヤサ濟まぬ濟まぬ。詞第一本多めが體に似ぬ大矢。殊に的矢は業の矢とて。親の敵を射る故實あれども鹿を射る法はなし。サア矢の主の詮議々々とせり懸くれば。地蒲殿も當話の返答猶豫して見えけるを。犬坊八幡聲を揃へ但し本多が親を鹿に突殺され。其の敵射たるか何とく。とやりこむる。お次に朝比奈堪へかね襖半身出でんとす。母きつと見て又なく。地捻餅身柱一炷するるか。と。ねめ付けられて身を締め。フシ引込む顔こそ殊勝なれ。地蒲殿ちつとも臆せず。百様知つて一樣知らぬとは御邊が事。的矢を業の矢といへばとて悪業の業と心得。親の敵を射る事と故實を一遍に覚えしな。是常に射なれて矢業よきゆゑ。わざの字の聲にて業の矢といふ義なり。地鞞胡籙に的矢一手入るるは侍所瀧口の骨法。親の敵に限らず鳥をも鹿をも射る時あり。長袖となりた

れども家に生れ弓馬の道は入道こそよく知つたれ。謂はれざる詮議推參なりと御氣色變つて宜へば。イヤサ主人祐經を會我兄弟が。親の敵と狙ふ由念を入るゝが僻事か。チ、さもあればこそ頼朝の膝許離れず用心する祐經。會我兄弟に翅はなし何を知邊に御前近く忍び入るべき。地用心無用と仰せも果てぬに梶原イヤサ。地祐經が出頭を嫉みそねむ者多く。會我を引き御前通路の割符の札。彼等が手に入るまい物でなし。御身の方にも彼札二枚受取りて置かれしが。散さず手まへにあるならばサア。只今是にて一見せん。ヤア御邊に咎められ。是に候梶原殿とておめく。と出すべきか。大事の切手汝等には見せぬ。地扱こそく。見せぬは曲者。會我に割符をくれたは必定推量は違はぬ蒲殿。ヤア蒲焼殿蒲焼の鰻入道殿。ぬらくら抜けても抜けさせぬと。悪口難言手話になれば蒲殿も。無念餘つて一世の浮沈急き逆上したる顔色。巴御前は根元知らず。何事やらんと氣を盡し。フシ心を配つて控へたる。地これ梶原。入道が受取りの割符紛失せば何とする。チ、會我は伊東が末天下の御敵の引入れ。よい仕合で切腹々々。ムウ入道が切腹には冥途の供を召連るゝが合點か。洒落臭い誰を供に。梶原平次景高を連るゝわと衣の下の薄氷。地一尺二寸拔討にはつと飛退く梶原が烏帽子のまねきを切落され。後障子蹴破

つて同じく逃けて犬坊に。續いて逃ぐる八幡が肩骨脇つほ迄切下けられ。うんと反を取つて押へ胸元を三刀刺し。死骸にどうと腰打掛け。一息ついで立ち給へば。地お次外様の騒動上を下へと返す音。巴御前大音上げ。蒲の入道殿仔細あつて八幡の三郎をお手討ち騒ぐなく。御所へ走り御臺所へ注進申せ。御用なき者此の内へ一人も叶はぬと地戸口に立つて呼ばはりしは。木曾殿の後家義盛のフシ北の方ぞと物々し。地其の際に蒲殿衣服捨て齒嚙みをなし。地エ、打物短く梶原めを切損じて口惜しく。八幡輩五十人百人成敗せしとて誤る筋はなけれども。地割符の札の御詮議一度は切らで叶はぬ腹。世に健氣なる曾我がため捨てん命。通世の身の悦び導き給へ南無歸依佛と。小脇に突立て引廻し返す刀の切先唾へ。眞逆様に貫かれ。三十五歳五月間。フシ短き夢と消え給ふ。地御臺所の御使者として重忠の北の方。銀杏御前徒跣足にて駈付け。地榛谷の四郎重朝二の宮の太郎安清を召出し。榛谷は死骸ども御預け。二の宮は富士野へ早打。蒲殿御切腹曾我兄弟御狩場に紛れあるよし。狼藉なき中急度御詮議遊ばせとの御口上。晝八つの時切り半時の半時違うても越度過意仰付けらるゝとの御意大事のお使早う。地畏り奉ると駈出づる刀の鑓榛谷の四郎隆と取つて引留め。地こりや待て二の宮。御分は曾我の姉

聲小舅の難儀する御使。眞直には得いふまい。役替へして死骸受取れ。地富士野へは身が罷ると引戻して駈出す。榛谷が鑓二の宮播擲んでからく。と笑ひ。地和殿は祐經と相掣祐經を引く心から此の二の宮を疑ふな。似合うた。ヤイ一門縁者の好みと御奉公とは格別。ム、疑ひを晴して見せんとどうと引据る。地床の硯引寄せ三行半にさらく去つて去状。裏さしの笄暇の印と巻きこんで家來の侍呼寄せ。地宿所に歸り女ども三世の縁の切目なりと申し渡せ。地富士野の御使曾我と他人の二の宮太郎といひ捨てて駈出す。袴腰むんすと抱留め。地人に心を許させんとさつぱり立受取らぬ。お使は榛谷の四郎重朝が乞受ける。是非にやらぬと引留めたり。地エ、面倒心急き五つの時に程もなし。二十里に餘る道三時切の早打天狗の羽をも借りたい所。時刻延ばして二の宮に腹切らせん巧みよな。腕ふし斬放す奴なれど互に御用蒙る身。騒動の上の騒動命は助くる爰放せと。捻ぢても押しも榛谷少し力増し。縄付いて動かせずお次に朝比奈身を揉んで。齒痒く間疎く遺戸口より身を半分。齒嚙みをして母の怖さつと引込み。によつと出してはずつと引込み。業を沸かして睨む顔。巴御前きつと見て。地やれ朝比奈ちやつと来て働け。許す。チ、地まつかせと踊出で。母の御免ぢや忝しとつとより。榛谷

が兩腕取つて捻上げ。サアお行きやれ二の宮。地急用のお使物申すも暇惜しとラッいひ捨て駈出し走り行く。二の宮を遣るからは我等に何の言分。爰を放せ朝比奈。チ、二の宮は時切れおのれを宥すも時切れ。地知行潰しの米櫃半櫃かけはんがい。片手に足らぬ中は空との明はんがい。御時分能からう朝比奈が握拳の握飯。喰らうて見よといふ空の霞におつる鐘の聲。ごんと鳴ればぐわんと喰らはせ。又ごんと鳴るぐわんと拵る。三つ四つ五つ頭の頭で数とる拍子取る。次手に初夜後夜晨朝入相寂滅爲樂。跡はひららく頭の骨砕けて百八ほんのくほ。撮んで小庭へどうと投げ。思へばく梶原め釣髭の釣鐘面。拵砕かいで残念至極。よし／＼今は逃がすとも我見込んだは鰐百倍。一度はとらで置くべきかと。日数を泳ぐ生死の海。淺瀬は波も朝比奈が待來る寄來る磯の波どう。く。とろ／＼と踏鳴らす。女波男波の足早く鰭を並べてひともつれ共に。御所へぞ参りける。

第二

地片削の千木や内外の曇りなき。空も五月の二十八日式日の御祝儀に。二の宮太郎安清出仕の留守の間には。夫に代る武士の妻心の障り身の不淨。手水の水に灌ぎ捨て。スエテ袋棚より取出

し。紐解く大聖不動の尊像五月なり縁日なりと。床に移せば女子ども供へのお神酒お鏡に。向ふ心の眞直なる。フシ冥慮ぞ暗に有難き。二の宮の姉御前心靜かに合掌し。夫の武運長久御狩の御留守預りて。大切の役目禍のない様に。取分け弟曾我の祐成五郎時致。一萬箱王と申せし時不動を工藤と聞き違へ。勿體なくも尊像を。切り奉らんと迄思ひ込んだる親の敵。工藤左衛門祐經を首尾よう討たせたび給へと。只一筋の念願はフシ感應。嘸と著し。家來白崎八平次違しく。詞旦那より火急の御用。参りつけねど御居間へと。御免も乞はず大息ついで畏る。地女房驚き何の御用か氣遣はし。御口上はと問ひければ。詞何れも同じ御奉公とは申しながら。斯る御使身に取つての大難と。地巻込む暇の印の筭一通を差出せば。開いて見るや見もわかずはらはら涙の顔振上げ。御身も息災御武運も長久と祈りしはたつた今。御出仕の折迄も云ひ語らひし数々は。捨詞か空言か恨めしの心やと。巻いては解き讀んでは泣き。去狀顔に押當て。思はずかつはと身を投伏し。フシ聲も惜まず泣きもたる。在合ふ腰元下女はした様子知らねば泣かれもせず。互に顔を見合せて溜息。フシついたるばかりなり。詞コリヤ八平次。地どうした事で隣やると御口上はなかりしか。様子は知らぬか知つたらば聞かせてくれと氣を急げば。詞委

細の事は存ぜねども祐成様御兄弟。蒲の入道殿に方人なされ。頼朝公を討奉らん企てと。梶原殿の言葉によつて入道殿には御切腹。それゆゑ旦那は御狩場へ御注進の御使。八つ切との仰を請け榛谷と又口論あり。地お暇の状印の筈。渡し申せと仰より外には何も存ぜずと。いはせも敢ずムウ聞えた。詞安清殿は最早狩場へござつたか。イエノ、御前で口論最中。地今頃お立ちも存ぜずと聞きすて、ずんと立ち。脛高々と帯引締め。詞誰そ足早な女子ども。地薙刀持つて追付けと云ひ捨て、駈出す。各慌て絶りつきお里へではあるまいし。詞恨み云ひにお出で遊ばすはお道理といひながら。殿のお歸り待受けて詫。地なさるゝがよい筈と。止むれば振放し退去もあるならひ。詞我が身の事は兎も角も。其の儘狩場へやりましては今の恨みつらみより。増つた歎きもあらうかと思ふゆゑ。搔きたくる程氣が急くもの。地まだ、待つて居られうか。八平次お留守大事にせい。皆の者ども頼むぞと下婢一人引具して。振撥けたる薙刀の道をそ。らせて三重、鳴る鐘の。フシ空四つあがり。地藤澤や澤邊の水に富士映る。雪さへ暑きフシ夏の旅。空尻馬も徒歩人も。蒸し来る雲に雨を乞ひ一吹さつとくださるゝ。涼風價千金と。行惱む道の傍に葭養園うて。杉葉葺く。清水堰入れ水車。フシ篋の竹の糸筋に。滴るる水の。柳

陰。小オクリ暫しとてこそ旅人の。立寄る所。フシ天下。根本仕出しの家と看板冷やり氷室山。氷つき出す染付けの。南京すし錫の皿。樽折りしく青楓。フシ櫓の葉もりのたゝりなし。霍亂薬咽にはや秋風通ふ見世商ひ。主は陸上の禪師坊。今度の御狩に祐成時致年來の本意を遂げ。富士野は兄弟の命の露の置所と。便り密に寺を出で御骨なりとも拾はんと。懸鬘に姿を替へ十日餘り此の營み。御狩場御廻の諸方の使。大磯通ひ鎌倉の。商人旅人暑を避けて上りトりの其の中に。祐經が家來近江の小藤太鎌倉への歸るさ。見世に立寄りコリヤノ、亭主水くれいとぞ横柄なる。詞やすいこと同じくは。心太になされたらそつちもこつちも後藥。暑氣を去つて湯きをとめ二日酔ひのよろゝも一膳喰へば心太。地頼朝公も聞召し大名小名御相伴の御膳料理。前代未聞のところてんさつても甘しと舌をまきがり。隨分商ひにせこを入れ。往來の人の腰錢を狩取るべしとの御詔にて。詞見世さきに富士を作り御狩の體を人形にて。水機關に仕掛けて御目にかくる。地サア只今始まりと。聲をかしくて拍子とり。地御寮の其の日の御賞。青葉涼しき心太おなかよしけに一二膳。白血受けて。フシ召されたり。御相伴には五郎丸。赤繪吳須手の錦皿下し賜つて是で喰ふ。詞價は八十五文が所燃立つ腹を冷やりと。四尺八寸の水船